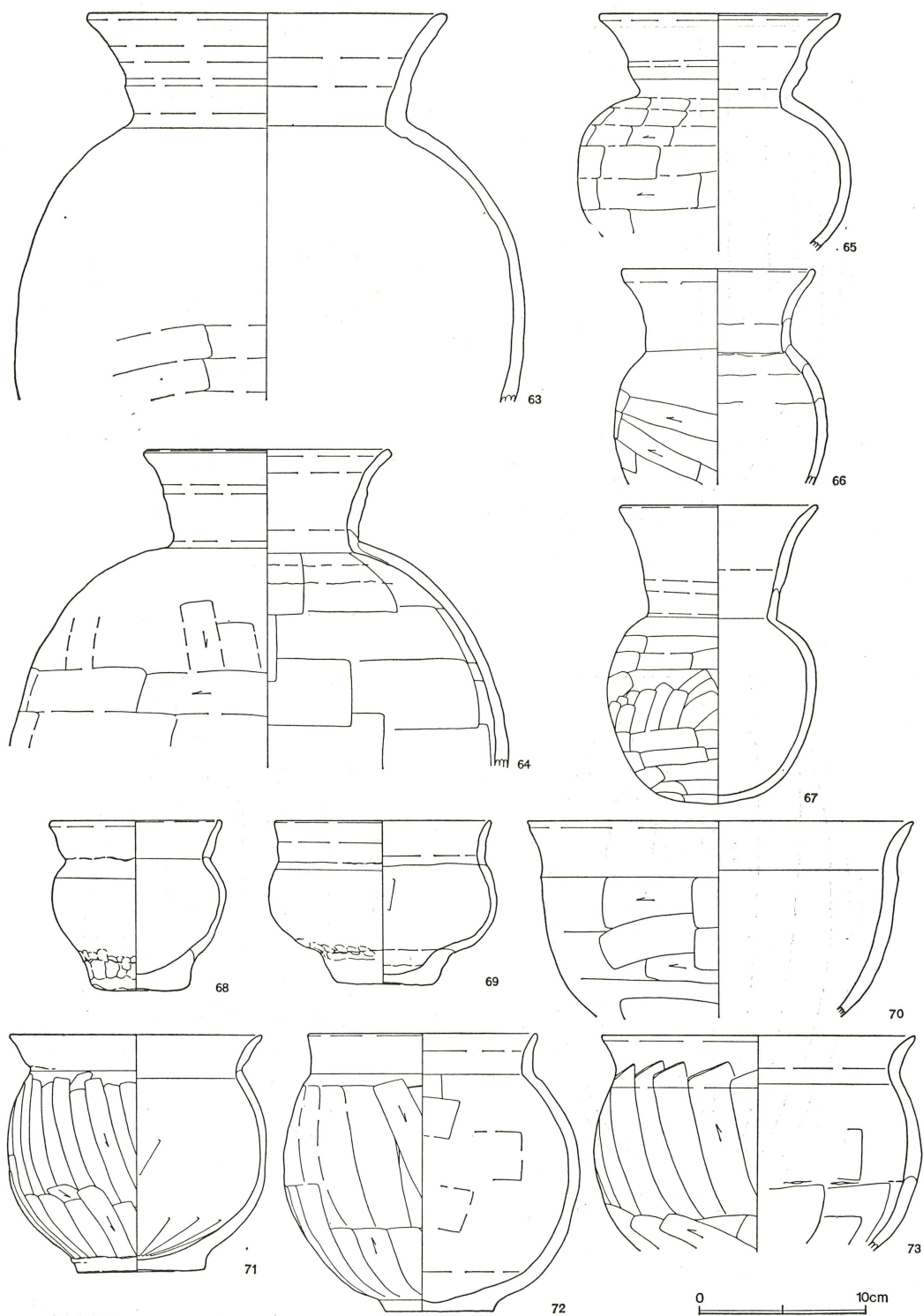
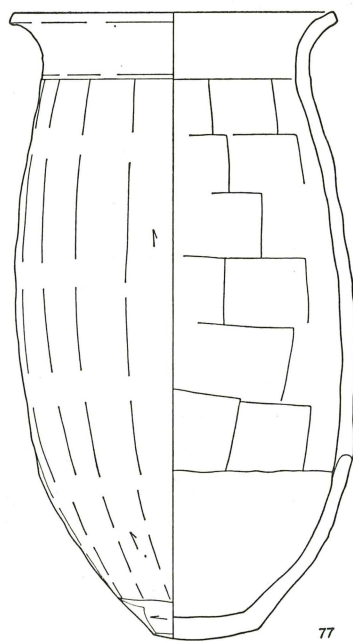
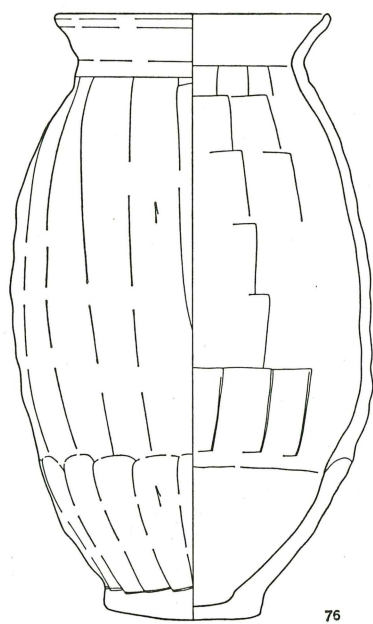
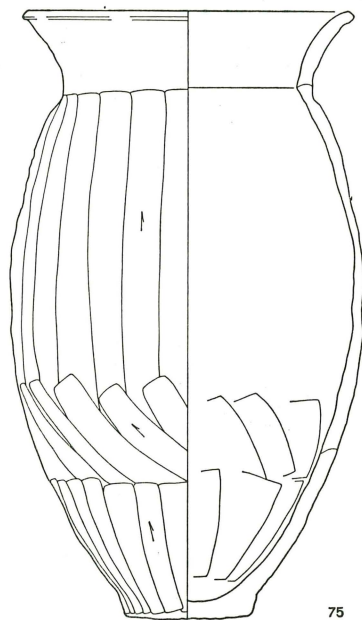
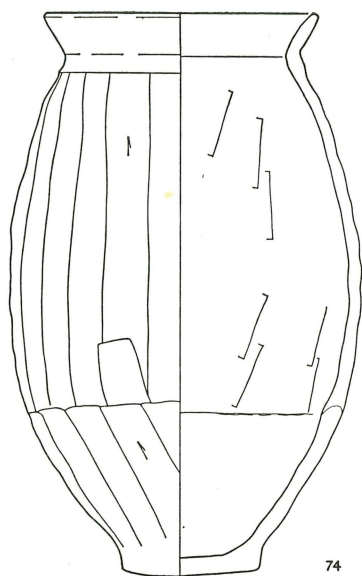


川越田

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調 焼 成	手 法 の 特 徴	出 土 位 置 ・ 残 存 率
		口径	底径	器高				
坏	27	13.0		4.6	A(多)CF(少)	淡褐色 3	体部外面篋削り、内面ナデ。口縁部横ナデ。磨滅著しい。	№112。完存。
坏	28	(12.8)		4.8	ABC F	橙褐色 4	体部外面篋削り、内面ナデ。口縁部横ナデ。磨滅著しい。	№257。2/3。
坏	29	11.2		4.7	C F	橙褐色 1	体部外面篋削り後ナデ、内面ナデ。口縁部横ナデ。	№208。ほぼ完。
坏	30	13.0		4.6	C F	橙褐色 1	体部外面篋削り、内面ナデ。口縁部横ナデ。	№254。2/3。
坏	31	11.3		4.7	C	褐色 1	口縁部横ナデ。体部外面下位篋削り明瞭、上位ナデ。	№5。4/5。
坏	32	13.8		6.2	C D	橙褐色 1	体部外面篋削り後ナデ。口縁部横ナデ。	№402。完存。内面に煤付着。
坏	33	15.4		6.5	F(多)ABC	橙褐色 2	体部外面篋削り、内面ナデ。口縁部二工程の横ナデ。	№344、カマド覆土。2/3。口唇部沈線状くぼみ巡る。
坏	34	14.6		6.7	F(多)ABC	赤茶褐色 1	体部外面篋削り上位未調整またはナデ、内面ナデ。口縁部横ナデ。	№183、198、202他。ほぼ完。体部内面一部黒灰色。
坏	35	15.6		5.6	C D F	橙褐色 1	体部外面篋削り、内面ナデ。口縁部横ナデ。	№123。完存。
坏	36	(12.6)		3.4	A C D F	褐色 4	体部外面篋削り上位ナデ、内面ナデ。口縁部横ナデ。	№377。1/2。磨滅著しい。口唇部沈線状くぼみ巡る。
坏	37	14.4		4.0	A(多)B F	褐色 3	体部外面篋削り、内面ナデ。口縁部横ナデ。磨滅著しい。	№113。ほぼ完。
坏	38	13.4		4.1	A B C D F	橙褐色 4	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。磨滅著しく調整不明瞭。	№269。完存。
坏	39	12.4		5.2	F(多)ABC	赤褐色 2	体部外面篋削り上位ナデ、内面ナデ。口縁部横ナデ。	№319。完存。
坏	40	11.8		5.4	C F(多)A B D	赤褐色 2	体部外面篋削り上位ナデ、内面ナデ。口縁部横ナデ。	№378。ほぼ完。
坏	41	11.4		6.3	B C E	褐色 1	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。磨滅著しい。	№38。2/3。
坏	42	(9.1)		4.7	B C F	褐色 2	体部外面下位縁削り上位ナデ、内面ナデ。口縁部横ナデ。磨滅著しい。	№382。2/3。
須恵坏	43	(12.0)		(3.7)	D E F・砂粒子	青灰色 1	体部外面下位回転篋削り上位ロクロナデ。口縁部ロクロナデ。	№6、116。1/5。体部外面下位「×」の記号あり。
蓋	44	(12.3)		(4.4)	D E F・砂粒子	青灰色 1	ロクロナデ。天井部外面回転篋削り。	№81。1/4。
土師小型壺	45	9.5		5.4	F(多)BC、緻密	赤褐色 2	体部外面篋削り、内面はナデ。口縁部横ナデ。	№339、355、カマド覆土。4/5。
小型壺	46	(9.5)		6.4	F(多)A(少)C	橙褐色 2	体部外面篋削り上位削り残し有り、内面ナデ。口縁部横ナデ。	№253。2/4。外面口縁～体部に器表の剝落有り。
小型壺	47	9.3		6.1	B C	橙褐色 3	体部外面篋削り上位未調整、内面ナデ。口縁～体部内面横ナデ。内面赤褐色。	№379。ほぼ完。口唇部を中心に磨滅著しい。
高坏	48	(11.0)	8.5	7.0	F(多)AC	橙褐色 3	坏部外面篋削り、内面ナデ。口縁部横ナデ。脚部横ナデ、内面上位はナデ。	№375。2/5。内面横ナデ範囲は磨滅により不明瞭。
高坏	49	11.4	7.8	7.2	F(多)ABC	褐色 2	坏部外面篋削り、内面ナデ。口縁部横ナデ。脚部横ナデ、内面上位はナデ。	№413。ピット1覆土。ほぼ完。磨滅調整不明瞭。
高坏	50	11.7	8.8	7.6	F(多)AC	褐色 3	坏部内面ナデ外面篋削り後下位ナデ。口縁横ナデ。脚部横ナデ内面上位ナデ。	№136。4/5。内面橙褐色。磨滅により調整痕不明瞭。
高坏	51	12.6	9.6	7.9	A C F	橙褐色 2	坏部外面篋削り、内面ナデ。口縁部横ナデ。脚部横ナデ、内面上位はナデ。	№403、405、1住貯穴。4/5。磨滅により調整痕不明瞭。
高坏	52	10.5	9.8	8.0	F(多)ABC	橙褐色 2	坏部外面篋削り後ナデ、内面ナデ。口縁横ナデ。脚部横ナデ、内面上位ナデ。	№407。貯蔵穴。ほぼ完。三方スカシ。(楕円・台形)。
高坏	53	11.4	9.4	8.5	F(多)AC	橙褐色 2	坏部外面篋削り、内面ナデ。口縁横ナデ。脚部横ナデ、内面上位はナデ。	№78。ほぼ完。磨滅により調整痕不明瞭。

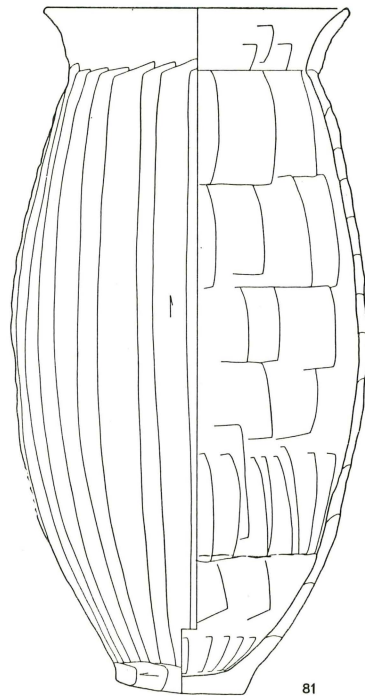
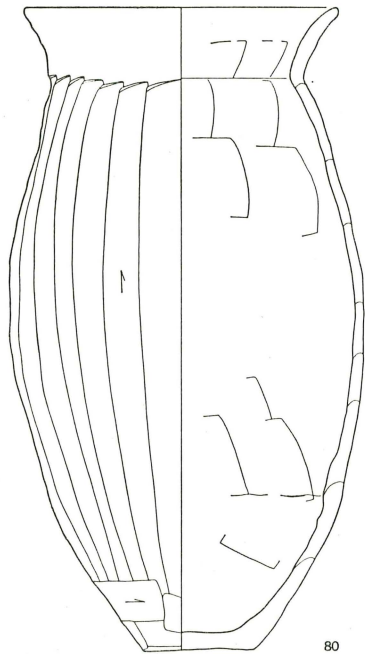
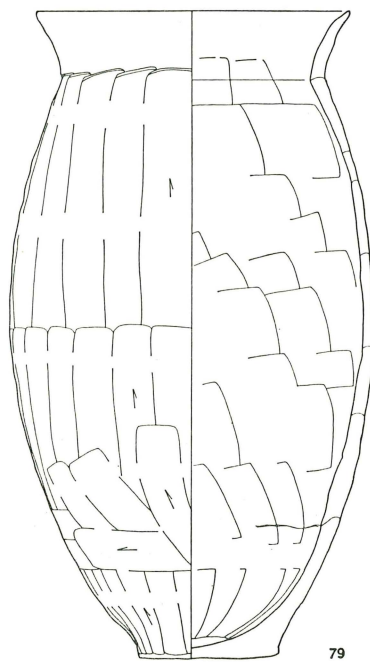
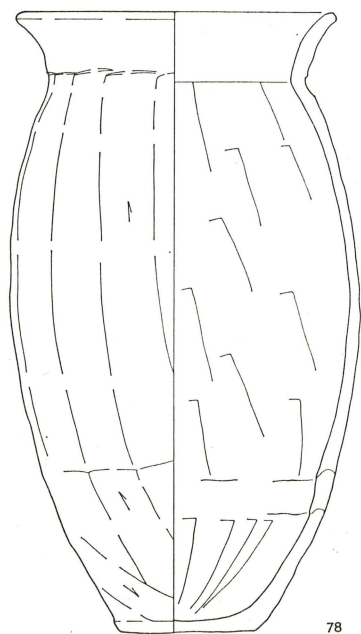


第188図 1号住居跡出土遺物(3)



0 10cm

第189図 1号住居跡出土遺物(4)

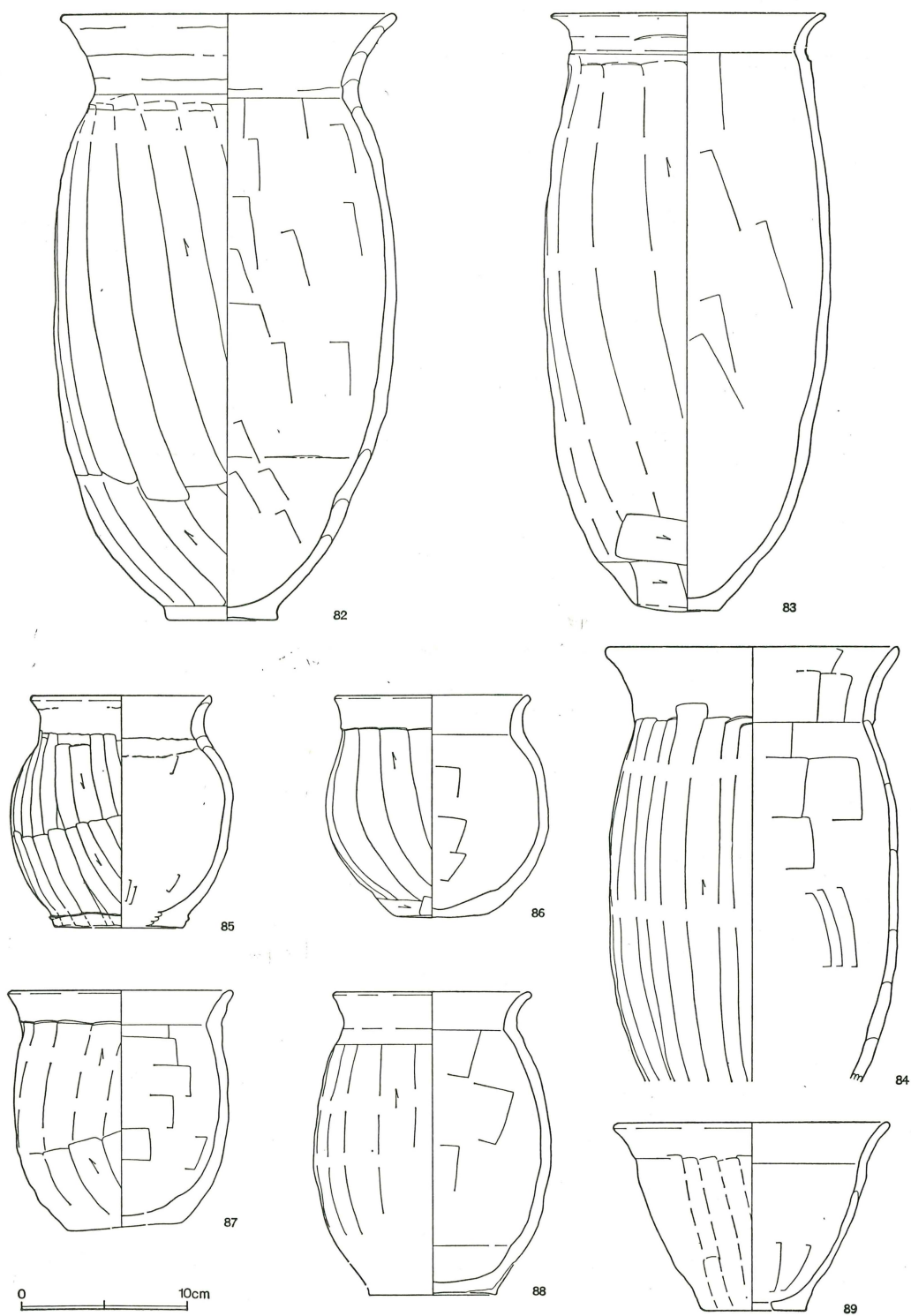


0 10 cm

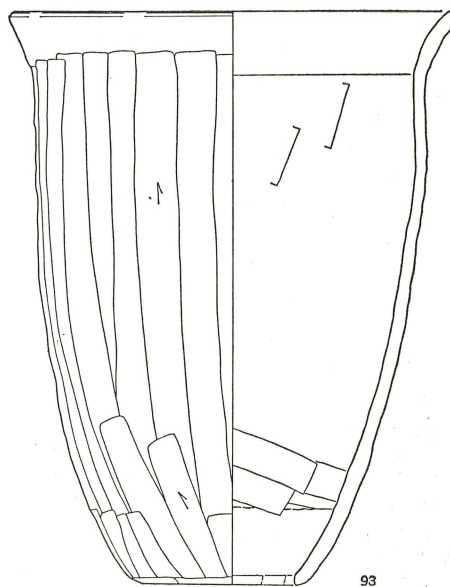
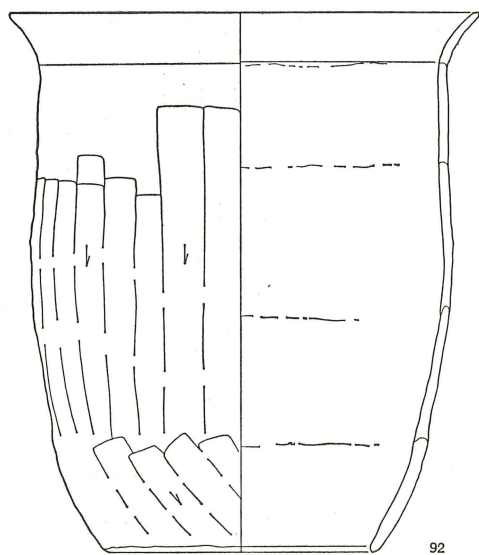
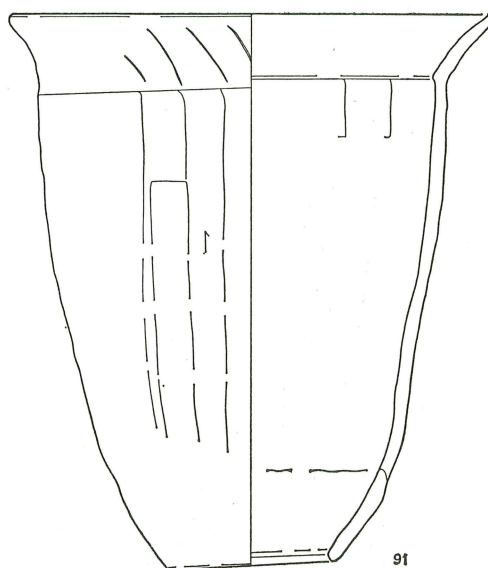
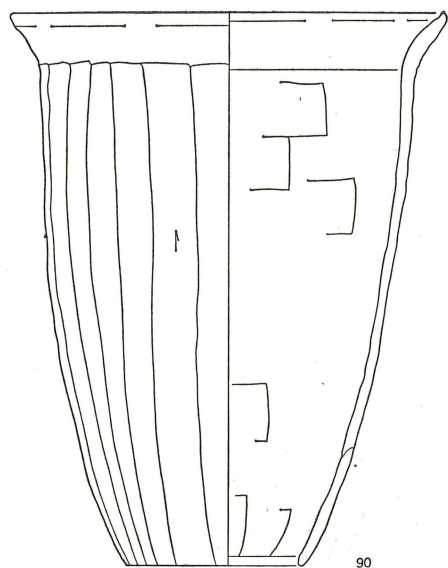
第190図 1号住居跡出土遺物(5)

川越田

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調	手 法 の 特 徴	出 土 位 置 ・ 残 存 率
		口径	底径	器高		焼 成		
高 环	54	(11.5)	8.9	8.6	F (多) AC	橙褐色 3	坏部外面篋削り上位未調整。内面ナデ。口縁横ナデ。脚部横ナデ内面上位ナデ。	覆土。2/3。口縁部 1/6。磨滅著しく調整痕不明瞭。
高 环	55	17.1	12.2	10.2	ACDF	橙褐色 4	坏部・柱状部外面篋削り後下位ナデ。坏部内面ナデ。口縁部・裾部横ナデ。	Na.293。ほぼ完。磨滅著しく調整痕不明瞭。
高 环	56	17.9	(12.0)	9.9	ABCF	橙褐色 3	坏部外面篋削り。口縁横ナデ。柱状部篋削り後ナデ内面上位ナデ裾部横ナデ。	Na.343。4/5。柱状部内外面にヘラ痕あり。
高 环	57	16.5	11.4	11.0	ABCF	橙褐色 3	坏部内面篋ナデ後口縁部横ナデ。柱状部外面篋削り後下位ナデ、内面篋削り。	Na.400。ほぼ完。脚内面上位指ナデ。
高 环	58	16.9	10.9	11.2	F (多) ABC 緻密。	橙褐色 2	坏部外面篋削り後下位ナデ。柱状部外面篋削り後下位ナデ、内面篋削り。	Na.380, 381, 404、貯穴他。ほぼ完。脚内面上位ナデ。
高 环	59	15.7	10.9	12.3	F (多) ABC	橙褐色 3	坏部外面篋削り後ナデ、内面篋ナデ後ナデ。裾部横ナデ後柱状部内面篋削り。	Na.362, 392, 406、貯穴。ほぼ完。磨滅調整不明瞭。
高 环	60	15.8	11.6	12.1	ABCDEF	橙褐色 1	坏部外面篋削り後ナデ内面篋ナデ後ナデ。柱状部内面篋削り後ナデ裾横ナデ。	Na.102。4/5。
高 环	61	17.6	12.5	12.1	F (多) AC、 緻密。	橙褐色 3	柱状部外面篋削り後下位ナデ、内面上位ナデ、中～下位篋削り後下位ナデ。	Na.256。ほぼ完。器内中央灰褐色。
高 环	62	17.6	11.9	12.0	F (多) BC (少) A	橙褐色 4	坏部、柱状部外面篋削り後下位ナデ。柱状部内面篋削り後ナデ、上位はナデ。	Na.256, 259。ほぼ完。口縁部の横ナデ痕明瞭。
壺	63	21.4		23.6	ABCDEF	淡褐色 1	胴部外面篋削り後ナデ、内面ナデ。口縁部横ナデ。	Na.55, 61, 66, 70, 242, 244, 292, 295, 296, 293, 他。1/2。
壺	64	14.6		19.3	ABCDEF	橙褐色 1	胴部外面篋削り後ナデ、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	Na.300, 301, 302, 317, 325, 326。1/2。
小型壺	65	14.3		19.3	ABDEF	橙褐色 1	胴部外面篋削り後ナデ。口縁部横ナデ。	Na.401。2/3。
小型壺	66	11.5		13.1	ABCDEF・ 微細粒子	茶褐色 1	胴部外面上位ナデ下位篋削り、内面ナデ。口縁部横ナデ。	Na.69。2/3。
小型壺	67	11.9		18.1	ABF	橙褐色 1	胴部外面篋削り後ナデ。口縁部横ナデ。	Na.324。ほぼ完。
鉢	68	10.5		10.4	ABEF	褐色 2	胴部外面ナデ下位指押え、内面ナデ。口縁部横ナデ。底部篋削り中央ナデ。	Na.346。4/5。底部は磨滅している。
鉢	69	13.1		10.0	F (多) B (少) A、緻密。	橙褐色 3	胴部外面ナデ、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。底部篋削り。	Na.98。ほぼ完。底部は磨滅している。
鉢	70	(23.4)		(11.8)	ABCDEF	橙褐色 1	胴部外面篋削り。口縁部横ナデ。	Na.194。1/5。甌か。
小型甕	71	15.4		(14.5)	ACD	橙褐色 2	口縁部横ナデ、胴・底部外面篋削り胴部下位ナデ、内面篋ナデ後ナデ。	Na.236, 239。2/3。
小型甕	72	13.7	6.4	17.0	ABC (多) D E (大粒)	橙褐色 3	口縁部横ナデ。胴・底部外面篋削り胴部下位ナデ、内面篋ナデ後ナデ。	Na.61, 64, 67, 74, 76, 84, 87, 89, 90。2/3。
小型甕	73	(19.0)		(13.1)	ACDEF・3 ～5mm大小石	橙褐色 2	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り、内面篋ナデ。	Na.376, 415。カマド覆土。1/4。
甕	74	14.5	7.3	30.2	ABCDE	褐色 2	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り、内面篋ナデ。下位に接合痕あり。	Na.297, 305, 307, 313, 314, 315, 316。ほぼ完。
甕	75	17.2	6.5	32.7	ACDEF	褐色 2	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り、内面下位篋ナデ。	Na.351, 360, 364。2/3。
甕	76	14.4	8.2	32.6	ABCDE	褐色 2	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り後ナデ、内面篋ナデ下位はナデ。	Na.92, 93, 204, 215, 216, 249, 311, 315。2/3。
甕	77	17.2	5.7	33.8	ABCDE	褐色 2	口縁部横ナデ。胴・底部外面篋削り胴部大半後ナデ、内面篋ナデ下位はナデ。	Na.103。2/3。
甕	78	16.7	6.9	33.5	ABCDE	褐色 2	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り後ナデ、内面篋ナデ。	Na.357～8, 365, 368～9, 412。カマド覆土。ほぼ完。
甕	79	16.6	7.4	34.8	ACDE	褐色 2	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り後ナデ、内面篋ナデ。	Na.292。ほぼ完。
甕	80	16.7	6.0	34.3	ACDE	褐色 2	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り、内面篋ナデ。	Na.166, 350～1, 361, 393～4, 384, 408。カマド覆土。2/3。



第191図 1号住居跡出土遺物(6)



0 10cm

第192図 1号住居跡出土遺物(7)

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調		手 法 の 特 徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高		焼 成			
甗	81	16.0	7.0	37.0	A B C D E F	茶褐色 1	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り、内面篋ナデ。	№349。4/5。	
甗	82	20.0	6.6	36.9	A B C D E	茶褐色 1	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り上位後ナデ、内面篋ナデ。底部外面ナデ。	№181、345。2/5。	
甗	83	16.1	5.2	36.5	A B C D E・粗い砂粒	褐色 2	口縁部横ナデ。胴・底部外面篋削り後ナデ、内面篋ナデ。	№106。2/3。	
甗	84	17.6		(23.5)	A C D E F	褐色 2	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り後ナデ、内面篋ナデ。	№232、236、238、246、285、314。3/5。	
小型甗	85	11.0		14.1	A B C D F	褐色 1	口縁部横ナデ。胴・底部外面篋削り胴部下位後ナデ、内面ナデまたは篋ナデ。	№209、221、225、227、229、230、233、234、354。2/3。	
小型甗	86	11.6	5.6	13.6	A B C D E	橙褐色 2	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り、内面篋ナデ。	カマド内№2。4/5。	
小型甗	87	13.2	7.0	14.8	A B C D E	橙褐色 3	口縁部横ナデ。胴・底部外面篋削り、内面篋ナデ。磨減著しい。	№47、85、124、130、160、174。3/5。	
小型甗	88	11.8	7.8	18.5	A B C D E	褐色 3	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り後ナデ、内面篋ナデ。	№262。1/1。	
甗	89	16.5	6.3	11.5	A C F	橙褐色 2	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り後ナデ、内面下位篋ナデ。	№245、290。1/2。	
甗	90	23.0	9.4	29.8	A B C D E・砂粒子	橙褐色 2	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り、内面篋ナデ。	№278、279、288、290、292。ほぼ完。	
甗	91	25.5	8.7	29.6	A B C D E	橙褐色 1	口縁部軽い横ナデ。胴部外面篋削り後ナデ。内面篋ナデ。	№260、261、262。カマド覆土。ほぼ完。	
甗	92	24.6	14.2	29.1	A C E F	橙褐色 2	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り後ナデ。内面輪積み痕明瞭。	№82、220、243、244、251。2/5。	
甗	93	23.4	8.3	30.9	A B C D E F	褐色 2	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り、内面篋ナデ、下位木口状工具によるナデ。	№279、291、284、289。ほぼ完。内面暗褐色。	

2号住居跡 (第193図)

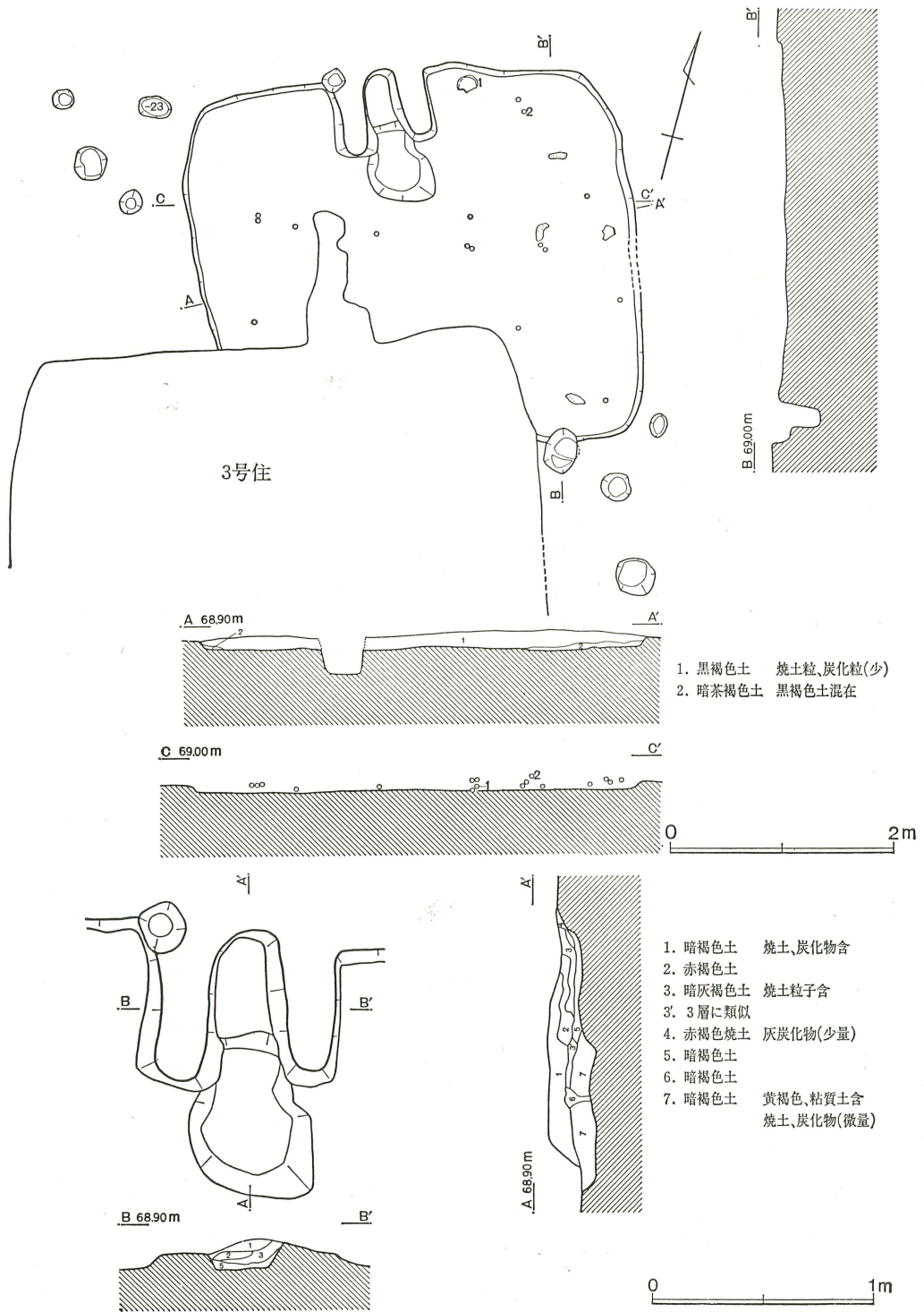
6M・7M区を中心に位置する。3号住居跡と重複し、2号住居跡が古い。4×3.4mの隅丸方形プランを呈するものと考えられる。深さは約4~10cmと非常に浅く、床面はほぼ平坦である。主軸方位はN-25°-Wを指す。

カマドは北壁の中央部に付設され、現状では壁外の掘り込みは確認されない。袖部は地山を掘り残して構築されている。柱穴、貯蔵穴等の施設は検出されなかった。

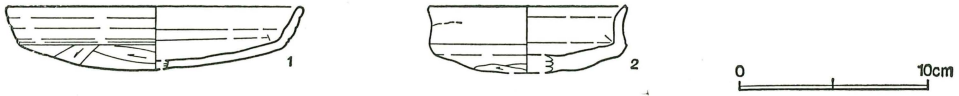
出土遺物は少なく、図示した1・2の坏はカマド東側の床面からやや浮いた位置より出土した。その他には土師器甕・壺・甗、須恵器甕の細片が出土している。

2号住居跡出土遺物 (第194図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調		手 法 の 特 徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高		焼 成			
土師坏	1	15.6		(3.4)	A B C	赤褐色 1	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。外面に3条の沈線状痕跡がめぐる。	№1。2/5。	
坏	2	(10.4)		(3.6)	A B C D E F	赤褐色 1	体部外面下位篋削り、上位未調整。口縁部横ナデ。	№4。1/4。	



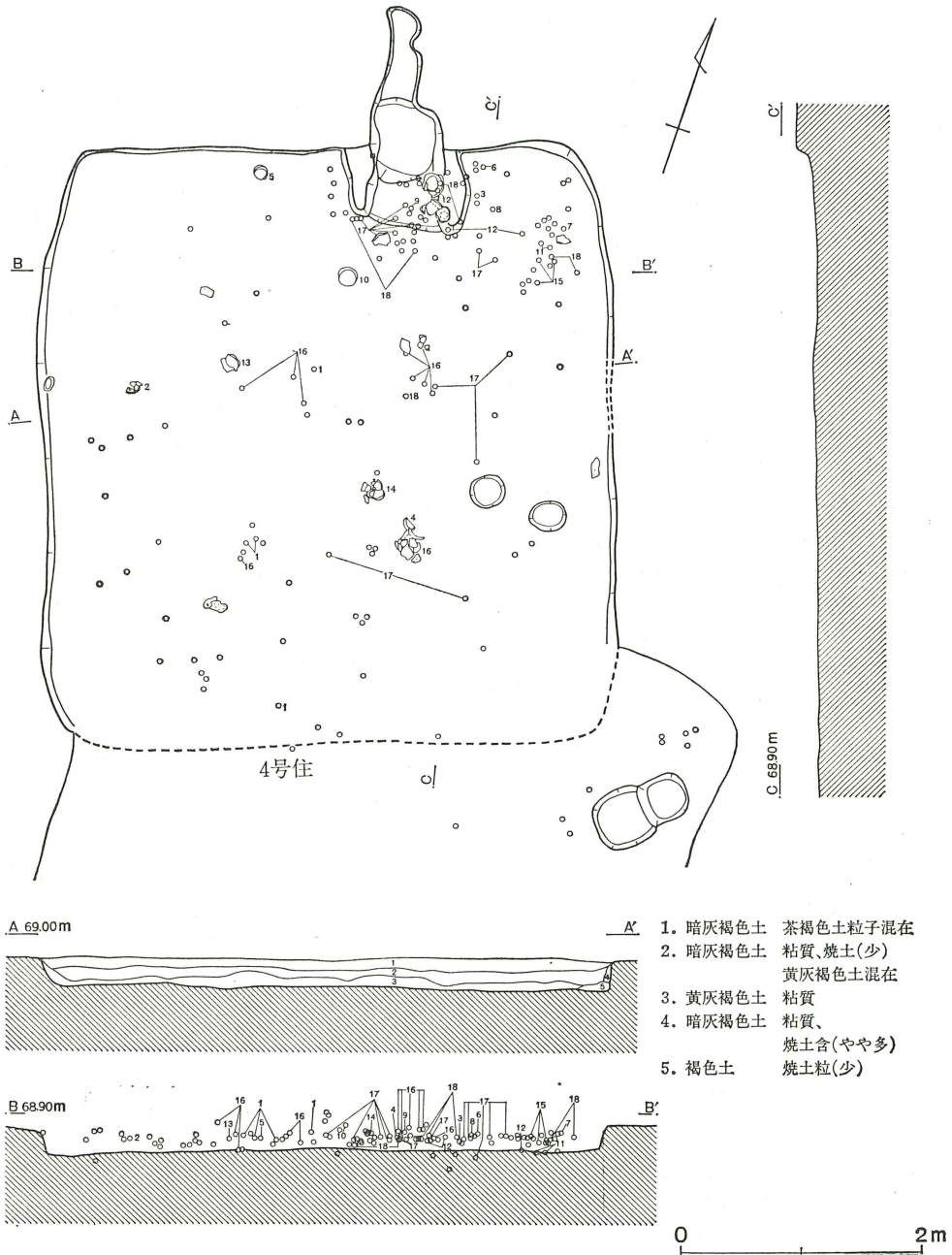
第193図 2号住居跡・カマド



第194図 2号住居跡出土遺物

3号住居跡 (第195・196図)

7M・8M区中心に位置する。1・2号住居跡を切って構築されるが、4号住居跡との遺構相互

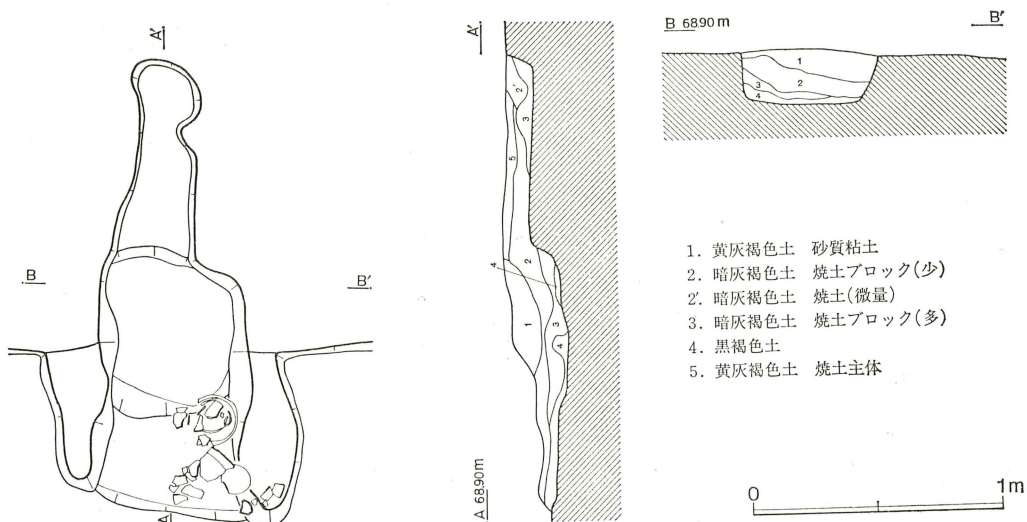


第195図 3号住居跡

川越田

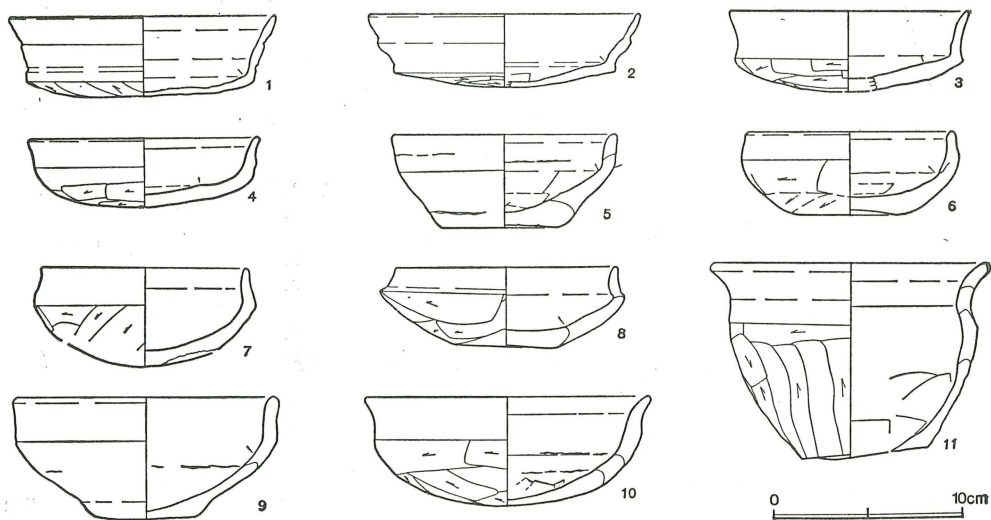
の切り合い関係はとらえられなかった。規模は東西辺4.85m、南北辺は4.9m 残存し、床面までの深さ20cmを測る。平面形態は方形を呈するものと推定される。主軸方位はN-19°-Wを指す。

カマドは北壁の東壁寄りに付設され、煙道は壁外へ約1.2m 延びる。焚口部を斜めに横断する溝のため、袖部は破壊され、その遺存状態は著しく悪い。ピットは2本検出されたが位置的に支柱穴とは考えられない。また貯蔵穴、壁溝等の施設も発見されなかった。遺物はカマド周辺からの出土が多く、また16の壺、17の甕ではかなり広範囲の接合関係が認められる。

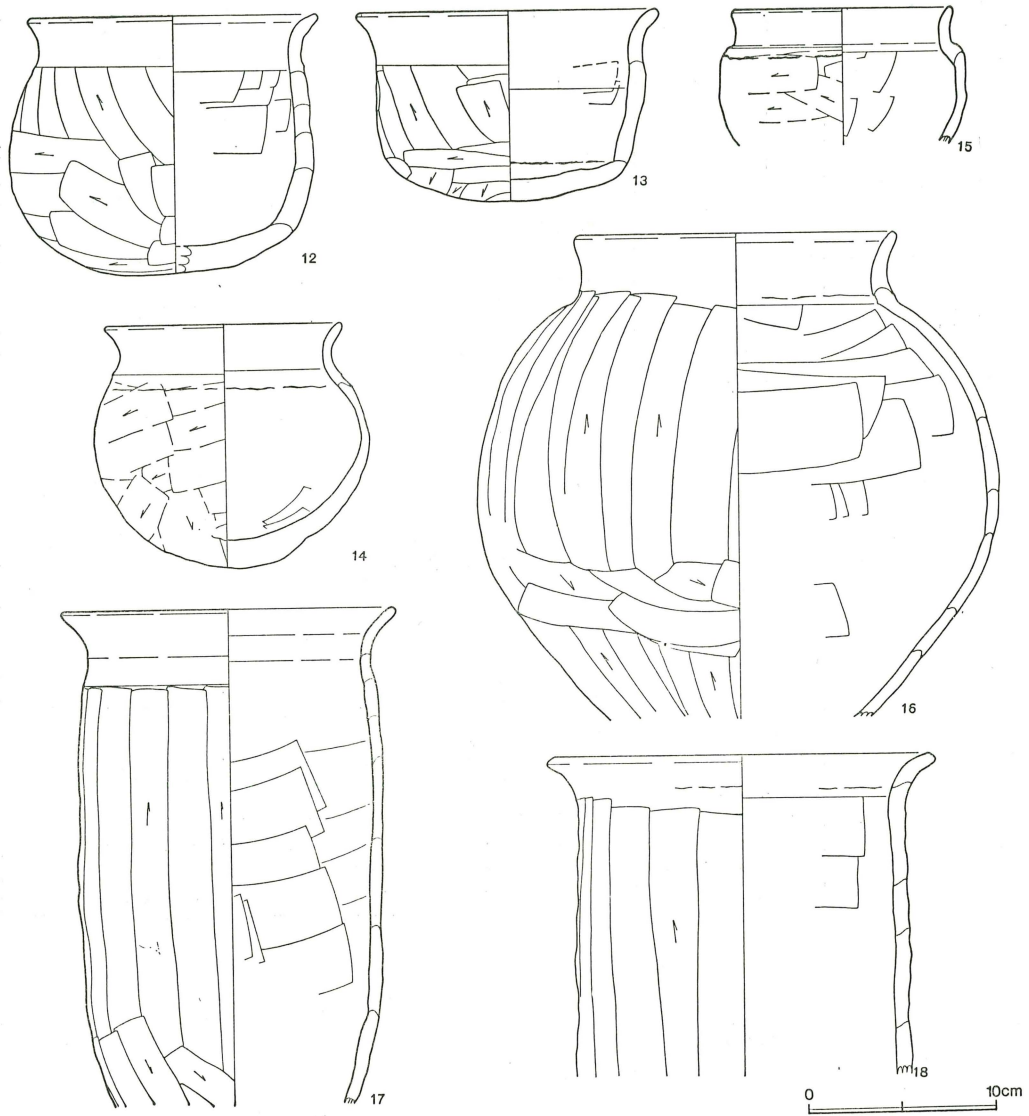


1. 黄灰褐色土 砂質粘土
2. 暗灰褐色土 焼土ブロック(少)
2. 暗灰褐色土 焼土(微量)
3. 暗灰褐色土 焼土ブロック(多)
4. 黒褐色土
5. 黄灰褐色土 焼土主体

第196図 3号住居跡カマド



第197図 3号住居跡出土遺物(1)



第198図 3号住居跡出土遺物(2)

3号住居跡出土遺物 (第197・198図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調 焼 成	手 法 の 特 徴	出 土 位 置 ・ 残 存 率
		口径	底径	器高				
土師杯	1	14.2		4.3	ABCE	褐色 2	体部外面篋削り。口縁部横ナデ、外面棒状工具による2条の沈線。	№72、81、83、4住№31。 2/8。
杯	2	(14.4)		(4.0)	ABCE	淡褐色 1	体部外面篋削り。口縁部横ナデ、棒状工具による段。	№74。1/4。
杯	3	12.8		(4.3)	ABC	茶褐色 2	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	№89。1/2。

川越田

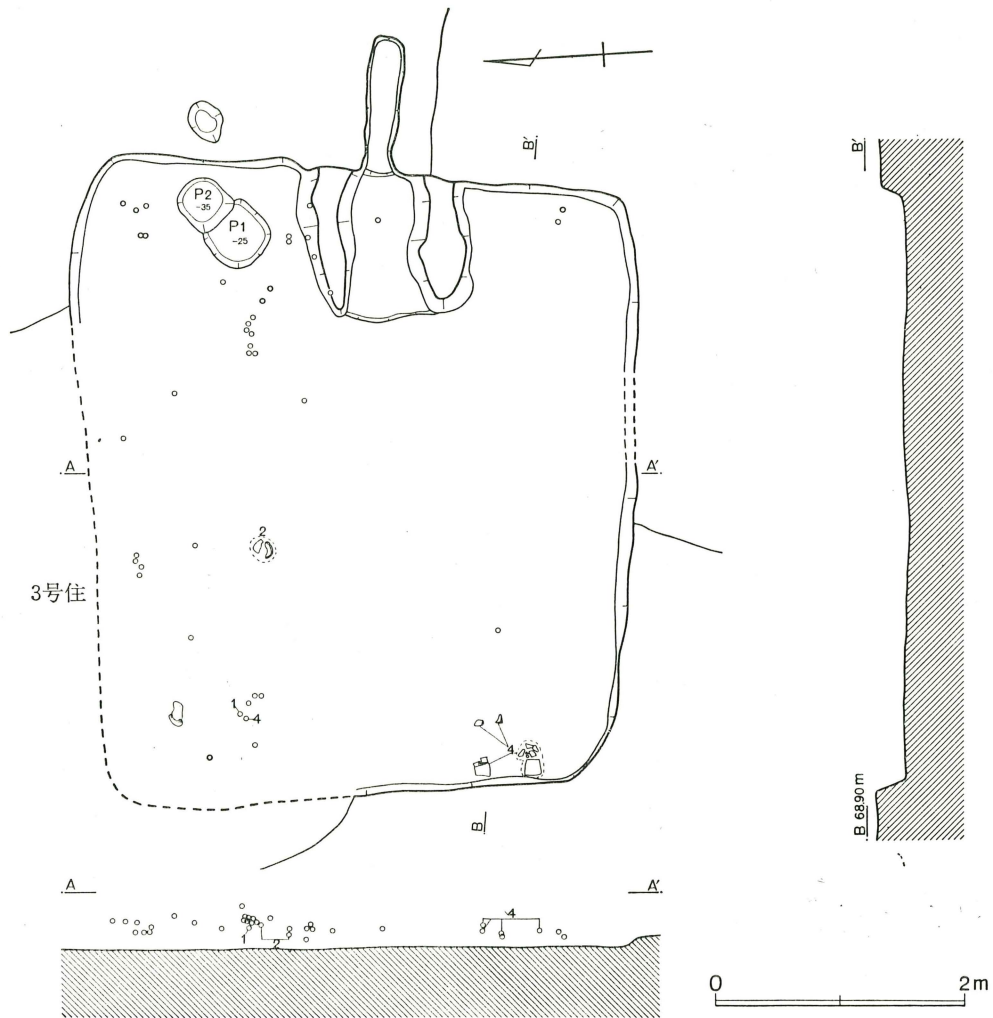
器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
坏	4	12.2		3.7	ABC F	橙褐色 2	体部外面下位篋削り、上位未調整。口縁部横ナデ。	№75。ほぼ完。
坏	5	11.6		5.0	ABCDEF	橙褐色 3	体部外面未調整、内面篋ナデ。口縁横ナデ。底部外面に木葉痕。	№64。ほぼ完。
坏	6	10.8		5.45	ABCDEF	橙褐色 2	体部外面篋削り後ナデ、内面篋ナデ後ナデ。口縁部横ナデ。底部外面木葉痕。	カマド内№4。ほぼ完。
坏	7	10.8		(5.3)	ABC F	橙褐色 3	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	№15。4/6。
坏	8	11.8		4.35	ABCDEF	赤褐色 1	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	№6。4/6。
鉢	9	(13.8)	(5.4)	6.6	C (少) A B D F	褐色 2	体部外面未調整。口縁部横ナデ。	№54。1/3。
坏	10	15.2		5.85	ABCDEF	茶褐色 1	体部外面篋削り、内面篋ナデ後ナデ。口縁部横ナデ。	№41。ほぼ完。
甌	11	14.6		10.6	ABCE F	橙褐色 1	胴部外面篋削り、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。底部を篋で切断する。	№19、20。ほぼ完。
小型甕	12	15.2		13.9	ABCDEF	橙褐色 1	胴部外面篋削り、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。底部外面ワラ状圧痕。	№18、カマド№2、6。2/6。
小型甕	13	15.6		10.2	ABCDEF	橙褐色 1	胴部外面篋削り、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	№69。ほぼ完。
小型壺	14	12.4		13.2	ABCDEF	橙褐色 1	胴部外面篋削り後ナデ、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	№35、3区。2/3。
小型壺	15	(11.6)		(7.3)	ABCDF	橙褐色 2	胴部外面篋削り後ナデ、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	№21、22、25、1区、2区 1/3。
壺	16	(16.8)		26.1	ABCDEF	褐色 1	口縁部横ナデ後、胴部外面縦篋削り後 中位のみ横篋削り、内面篋ナデ。	№37、33、39、40、68、70 71、75、84、97、102。1/2。
甕	17	(17.6)		26.6	ABCDEF	褐色 2	胴部外面篋削り、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	№10、31、43、49、50、52 53、63他。4号住№53。3/6。
甕	18	(20.0)		(17.2)	ABCDEF	橙褐色 1	口縁部横ナデ後、胴部外面篋削り、内面篋ナデ。	№44、63、21、30、98、カ マド№2、5。1/6。

4号住居跡 (第199図・200図)

8 L・8 M区に位置し、五領期の5号住居跡を切って構築されている。また北壁から西壁にかけては3号住居跡と重複するが、その新旧関係については明瞭に把握できなかった。規模は東西5 m 南北4.66mを測り、方形の平面形態をとるものと考えられる。深さは南西コーナー付近で24cmを測る。床面はやや凹凸をもつ。主軸方位はE-5°-Sを指す。

カマドは東壁中央から僅かに南に寄った位置に付設され、煙道部は壁外に1.1m延びる。袖部は粘質土を用いて構築され、燃焼部底面は床面を僅かに掘り凹めている。また、カマド北側にピットが一部重複して2本検出された。P₁が25cm、P₂が35cmの深さをもつが、他にピットが確認されていないため、支柱穴か否かは即断できない。貯蔵穴、壁溝は確認できなかった。

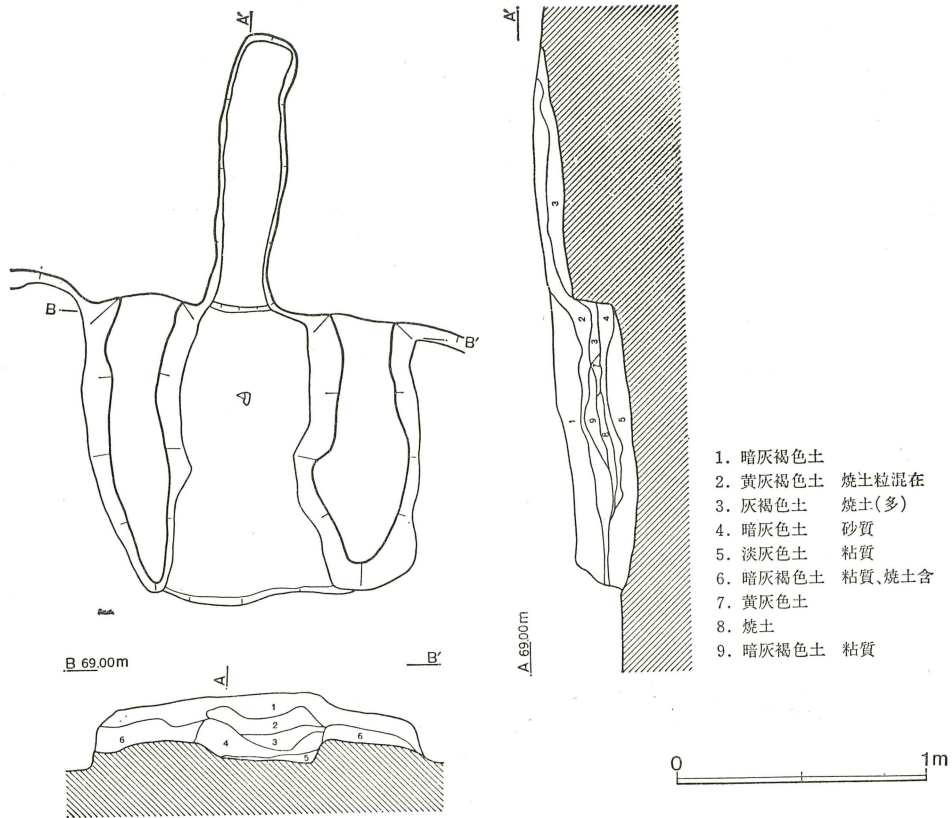
出土遺物は少なく、そのほとんどが床面よりも浮いた位置で出土している。図示した1・2の坏と4の甌もその例である。また、甌は南西隅付近と北東隅の破片が接合した。3の甕はカマド左側のP₁の覆土からの出土である。



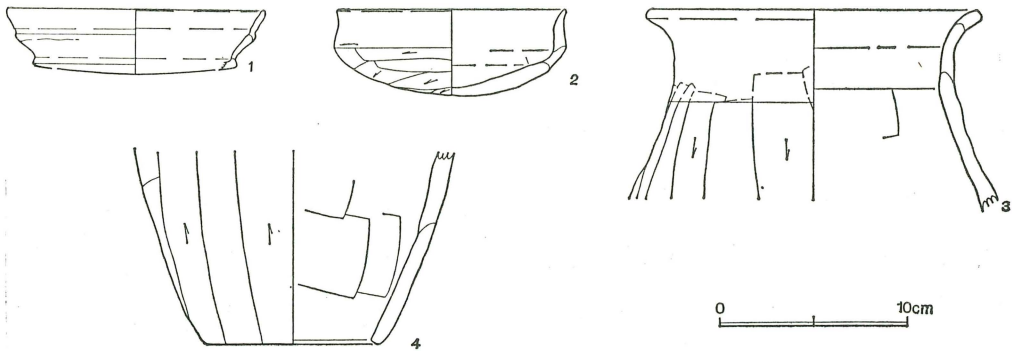
第199図 4号住居跡

4号住居跡出土遺物 (第201図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師坏	1	(13.6)		(3.6)	A B C	淡褐色 1	体部外面篋削り。口縁部横ナデ、外面に棒状工具による段。	№. 41。1/6。
坏	2	12.2		4.6	A B C D F	褐色 3	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	№. 29、55。4/6。
甗	3	(17.5)		10.8	A B D F	茶褐色 1	胴部外面篋削り、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	№. 57。ピット1覆土。口縁部1/2。
甗	4	(9.2)		(10.6)	A B C	橙褐色 1	胴部外面篋削り、内面篋ナデ。	№. 40、47、48、50、51、52。1/8。



第200図 4号住居跡カマド

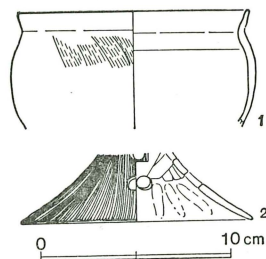


第201図 4号住居跡出土遺物

5号住居跡（第203図）

8 L・9 L区中心に位置し、4・7・9号の各住居跡と重複するが何れよりも古い。南北4.5m、東西は4.15mが残存し、やや不整な方形プランを呈すると推定される。主軸方位は南辺に直交すると仮定すればN-22°-Eを指す。

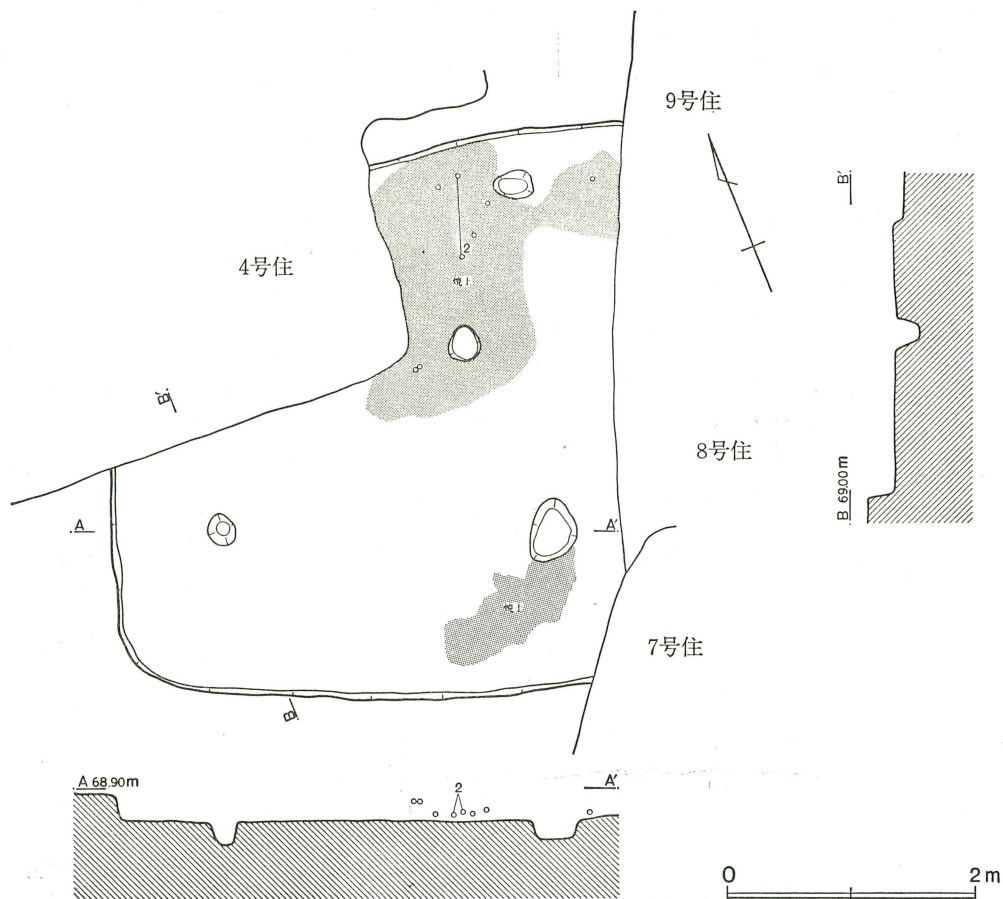
床面は平坦で東半に焼土が堆積する。ピット4本は住居跡に伴うか否かは不明。炉・貯蔵穴も検出されなかった。



第202図 5号住居跡出土遺物

5号住居跡出土遺物（第202図）

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
鉢	1	(12.4)		(6.3)	ABD	淡褐色 2	胴部外面上位粗いハケ目後ナデ。内面平滑。口縁部横ナデ。	2区覆土。1/4。
器台	2			(3.6)	F (少) ABC	赤褐色 1	下段に4孔上段残存部に1孔あり。脚外面篋磨き。内面上位篋削り下位ナデ。	№7、4。1/4。



第203図 5号住居跡

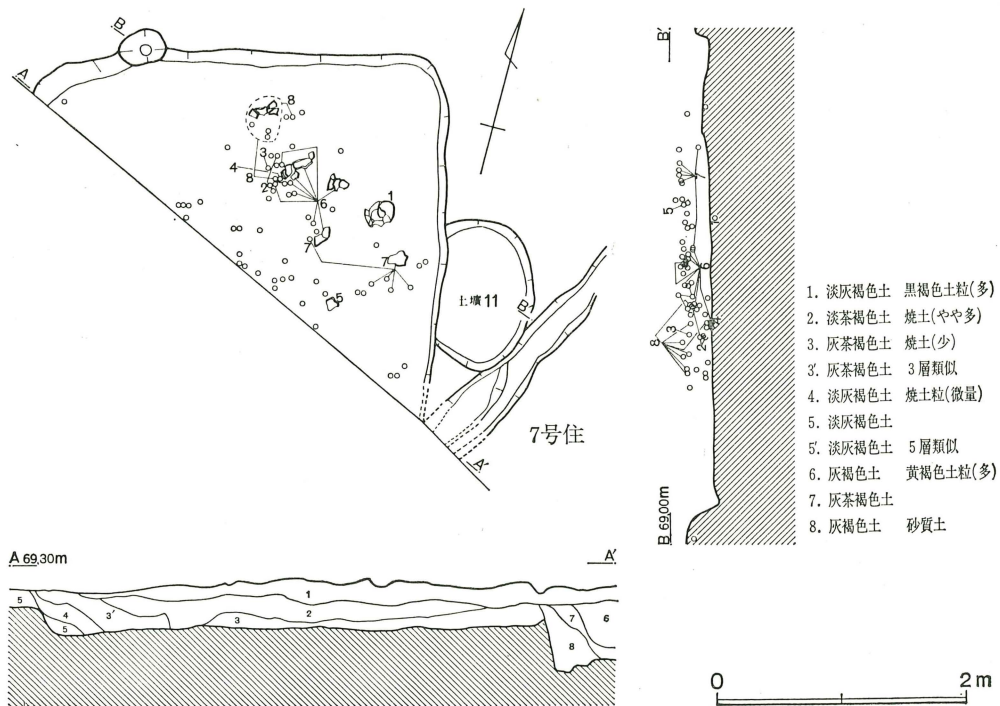
6号住居跡 (第204図)

9M区を中心に位置する。7号住居跡及び11号土壇と重複するが、6号住居跡が古い。南壁～西壁部は調査区外にかかるために全体の規模は明らかにできないが、東西3.4m、南北2.9m残存する。平面形態は方形を呈するものと推定され、深さは北壁部で22cmを測る。床面はほぼ平坦である。主軸方位はN-76°-Eを指す。炉・柱穴等の付属施設は明確には検出されなかった。

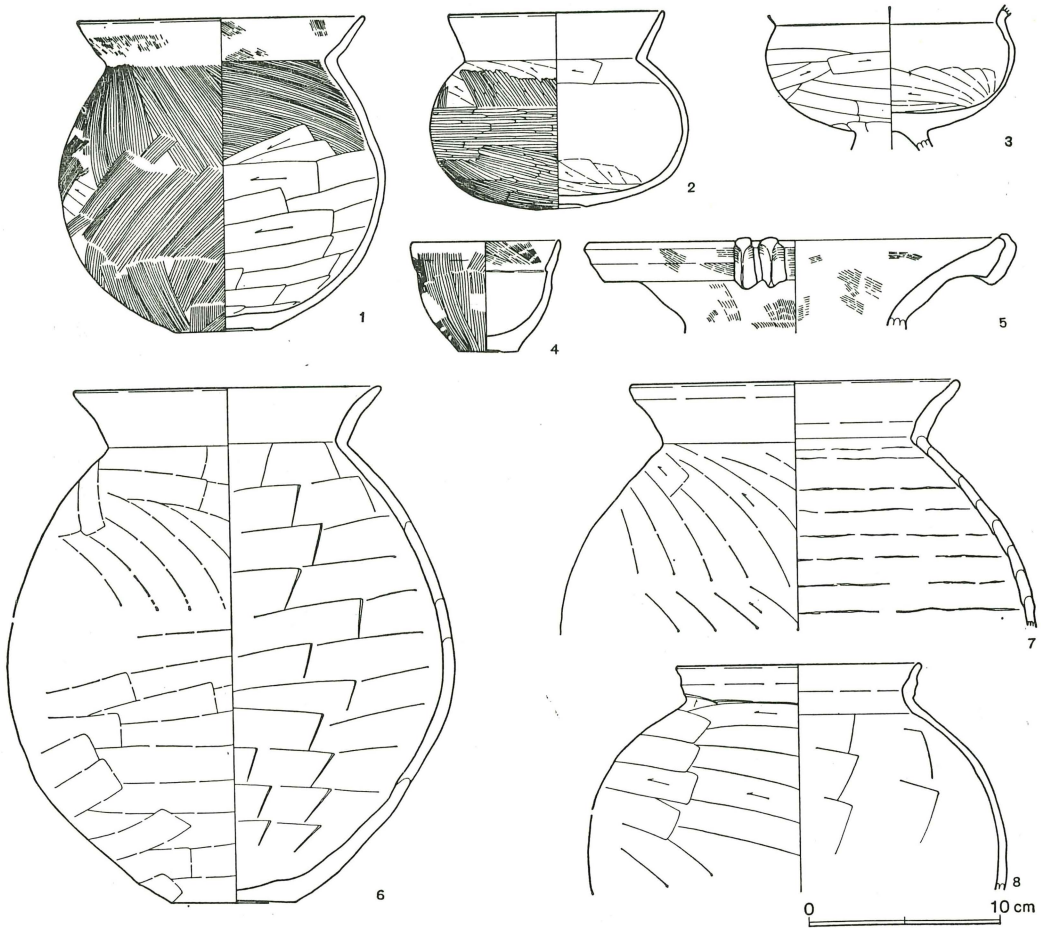
出土遺物には壺・甕・鉢・高坏(脚付碗)等があるが、その殆どは床面より高い位置で検出されており、二次的に投棄されたものと考えられる。

6号住居跡出土遺物 (第205図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師壺	1	15.2		16.8	A B C D E F	茶褐色 1	胴部外面篋削り後ハケ目、内面ハケ目後篋削り。口縁部ハケ目後横ナデ。	№59。3/5。底部中央がややくぼみ、輪台状。
小型壺	2	11.4		10.5	A B C	赤褐色 1	胴部外面篋削り、後上位ナデ後下位篋削り。内面上下位篋削り、下位後ナデ。	№12・62他。4/5。口縁部指ナデ。底部外面くぼむ。
高坏	3			7.7	A B C D E	橙褐色 2	体部外面上位ナデ。下位篋削り。内面下位篋削り後、全体にナデ。	№11。胴部3/5。底部外面に指頭によるナデ。
鉢	4	7.9	3.2	6.0	A B C D E・砂粒	褐色 2	口縁部内面ハケ目後、内外横ナデ。後に体部外面、部分的にナデ消すハケ目。	№62。ほぼ完。底部外面中央くぼむ。



第204図 6号住居跡



第205図 6号住居跡出土遺物

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
壺	5	(22.0)		4.8	ABDE・砂粒	茶褐色 1	口縁部ハケ目後横ナデ、2本単位の棒状浮文、内面と口頸部ハケ目後ナデ。	No.49。1/6。
甕	6	(16.2)	6.7	27.6	DE (少) ABC	茶褐色 1	胴部外面篋削り後ナデ。内面篋ナデ。口縁部横ナデ。底部外面篋削り。	No.1、2、4、5、7、8 22、他。3/6。
甕	7	17.4		13.4	ABCDE・砂粒	茶褐色 1	胴部外面篋削り後ナデ。口縁部横ナデ。胴部内面に接合痕を顕著に残す。	No.41、43、45、46、47、 57。口縁部1/2。胴部1/2。
S字甕	8	13.0		12.3	ABCDE	褐色 2	口縁部横ナデ後、胴部外面篋削り。内面篋ナデ。口縁部はS字甕の崩れた形。	No.6、7、16、18、19、20 62。胴部3/6。

7号住居跡 (第206図)

9L・10L区を中心に位置する。4軒と重複関係をもち、5・6・9号住居跡よりも新しく、8号住居跡よりも古い。また南壁部は調査区外にかかるため全体規模は不明であるが、東西長は5.9

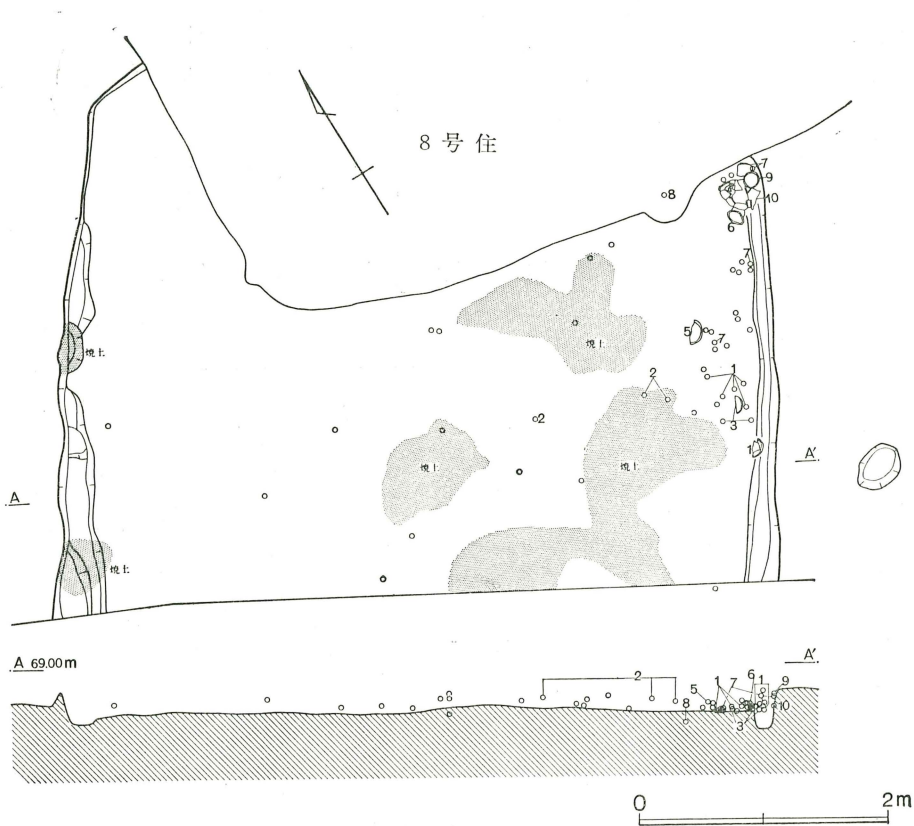
川越田

mを測り、南北は4.4mが確認できる。平面形態は方形を呈するものと推定され、深さは東壁部で18cm前後である。主軸方位はN-33°-Eを指す。床面はやや起伏をもち一定しないが、焼土の堆積が3ヶ所認められた。壁溝は西壁北寄りを除く他の部分で検出され、深さ4~15cmを測る。

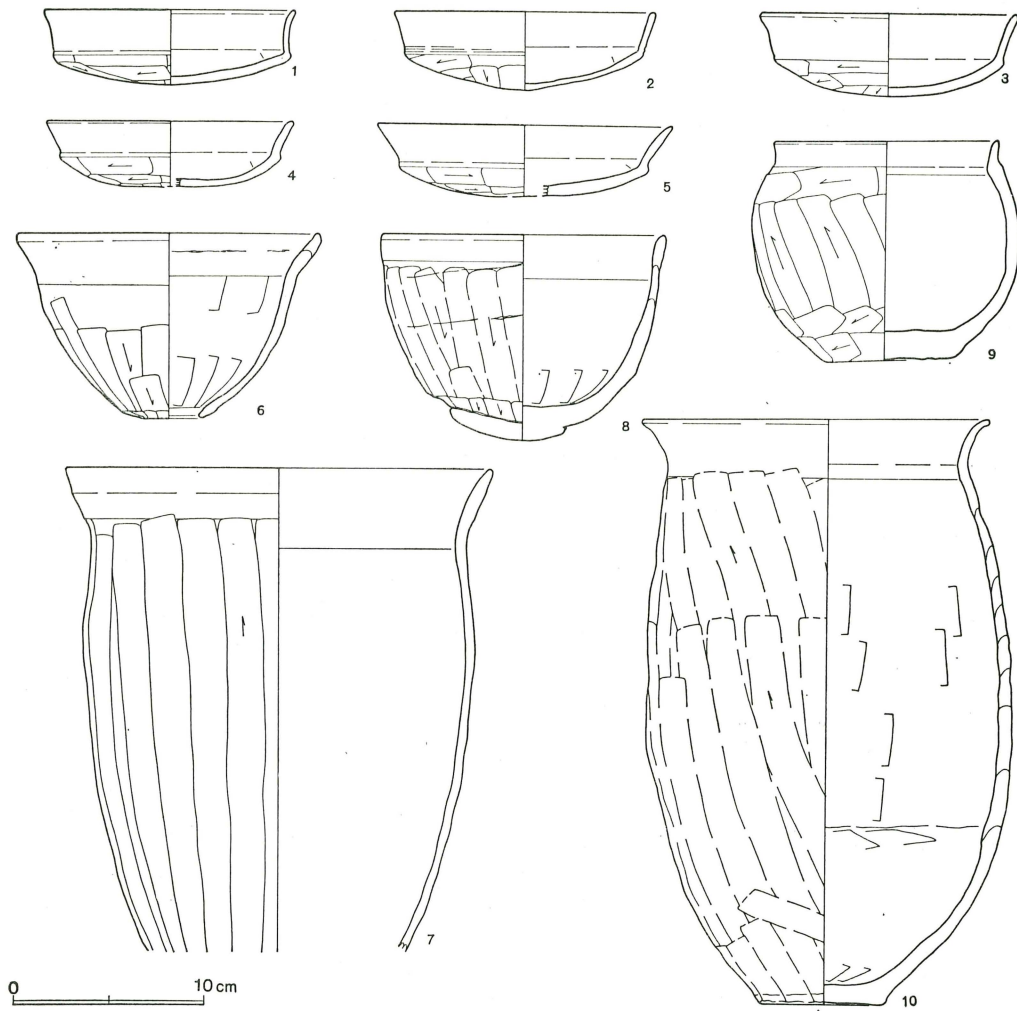
出土遺物は住居東半に多く、図示した6・7・9・10は東壁直下の周溝上にまとめて出土した。

7号住居跡出土遺物(第207図)

器種	番号	大きさ(cm)			胎土	色調	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高		焼成		
土師環	1	13.4		4.0	ACDEF	橙褐色 1	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	№.23、24、25、26、29、32。 2/3。
環	2	13.9		3.2	ACDEF	茶褐色 1	体部外面篋削り。口縁部横ナデ、2条の沈線状痕跡あり。	№.36、35、42、1区。2/3。
環	3	13.7		4.4	ACDEF	赤褐色 1	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	№.28、30、31。4/5。
環	4	(13.2)		(3.5)	ACDEF	橙褐色 3	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	1区覆土。1/3。

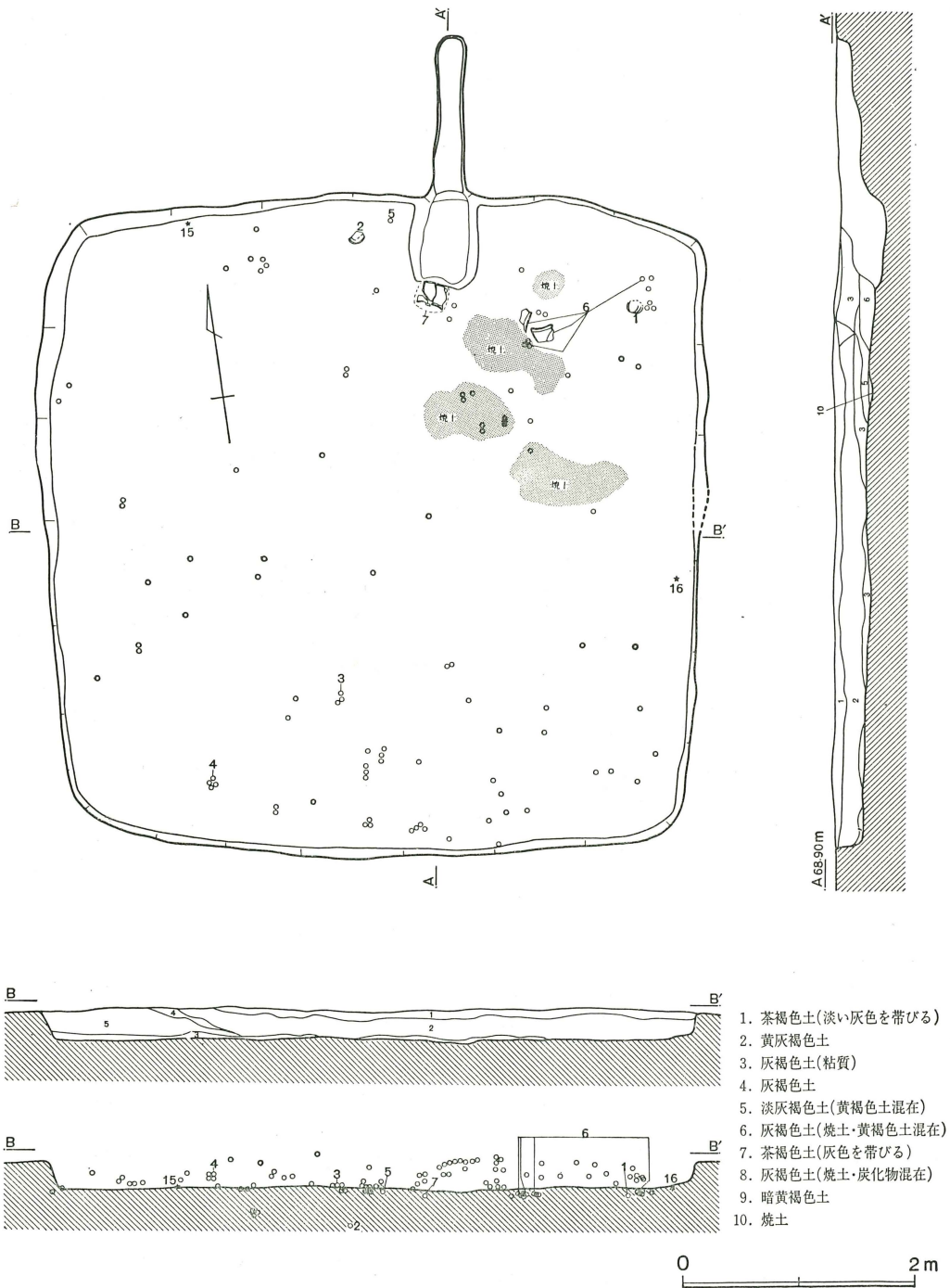


第206図 7号住居跡



第207図 7号住居跡出土遺物

器種	番号	大きさ (cm)			土胎	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
坏	5	(15.8)		(3.8)	ACDEF・小石	茶褐色 3	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	No.16。 ² / ₅ 。
鉢型甌	6	16.2	孔径 2.8	9.9	ACDEF	茶褐色 2	胴部外面上位ナデ、下位篋削り、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。孔端内面ナデ。	No.7。完存。
甌	7	(23.0)		(26.0)	D(多)ACF 3mm大小石	褐色 2	胴部外面篋削り、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	No.2、3、9、21。 ² / ₅ 。
鉢	8	15.0	6.3	11.0	ACDEF	茶褐色 2	胴部外面篋削り後ナデ。内面篋ナデ。底部外面ナデ。	No.52。 ⁴ / ₅ 。
鉢	9	(11.9)	6.7	11.8	ACDEF	茶褐色 3	胴部外面篋削り。口縁部横ナデ。	No.1。 ⁴ / ₅ 。
甌	10	18.7	6.9	31.6	ABCDEF	茶褐色 1	胴部外面篋削り後ナデ、内面篋ナデ。底部外面篋削り後、周辺に粘土が付着。	No.6。 ⁴ / ₅ 。

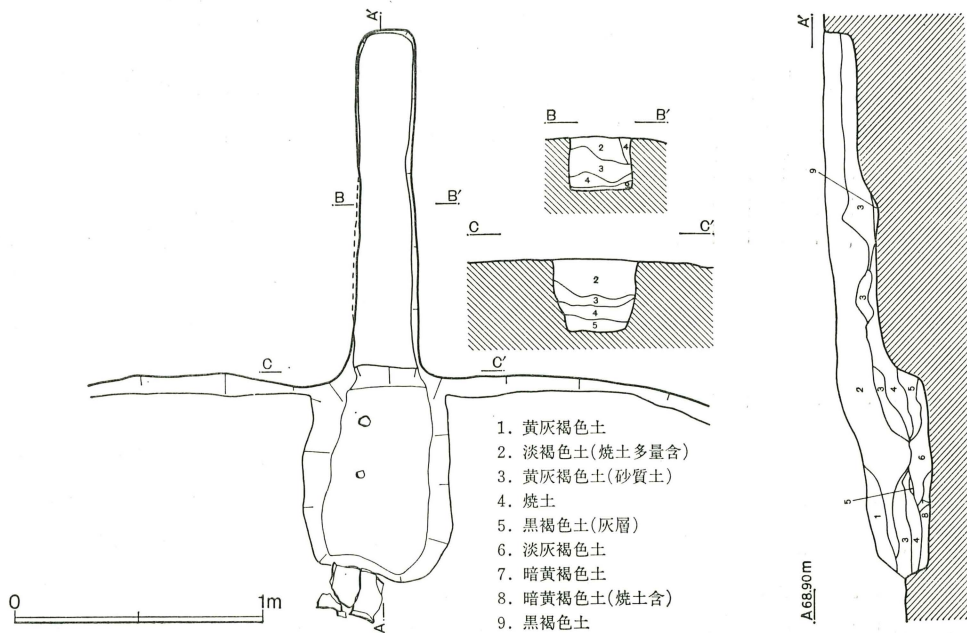


第208図 8号住居跡

9 K区を中心に位置し、重複する7・9・21号住居跡の何れよりも新しい。東西5.92m、南北で5.82mの方形プランを呈するが、各辺はやや外に膨む傾向にある。深さは南壁で30cmを測る。床面はやや起伏があり、北東コーナー付近に焼土の堆積が確認された。主軸方位N-10°-Eを指す。

カマドは北壁東寄りに付設され、煙道部は壁外に1.4m延びる。袖部は遺存状態が悪く不明瞭。

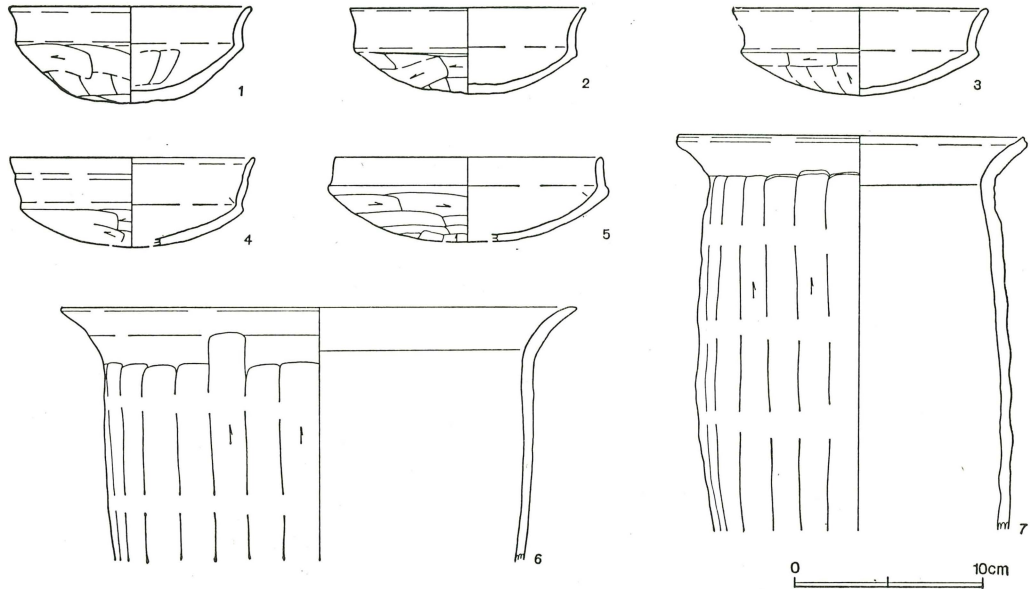
出土遺物は第210図1～3・5～7が床面付近から出土した。その他、北壁及び東壁直下の床面より紡錘車(第271図17・18)が2点検出されている。



第209図 8号住居跡カマド

8号住居跡出土遺物(第210図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師環	1	12.8		5.1	A B C F	橙褐色 3	体部外面篋削り。内面篋ナデ。口縁部横ナデ。磨滅により不明瞭。	№2。2/3。
環	2	12.7		4.5	A B C F	橙褐色 2	体部外面篋削り後ナデ。口縁部横ナデ。	№20。3/5。
環	3	13.5		4.6	A B C F	橙褐色 2	体部外面篋削り後ナデ。口縁部横ナデ。	№43。3/5。
環	4	(13.0)		(4.8)	A B C F	橙褐色 2	体部外面篋削り。口縁部段を持つ横ナデ。	№81。1/5。
環	5	(14.2)		(4.5)	A B C F	茶褐色 2	体部外面篋削り。上位未調整。口縁部横ナデ。	№21。1/3。
甌	6	27.5		(13.5)	A B C D E F	橙褐色 2	口縁部横ナデの後、胴部外面篋削り後ナデ。	№9、76、77、10。口縁部1/2。胴部1/2。
甌	7	19.5		21.4	A C E F・砂粒	橙褐色 2	口縁部横ナデの後、胴部外面篋削り後ナデ。	カマド№3。5号住1区。2/3。



第210図 8号住居跡出土遺物

9号住居跡 (第211図)

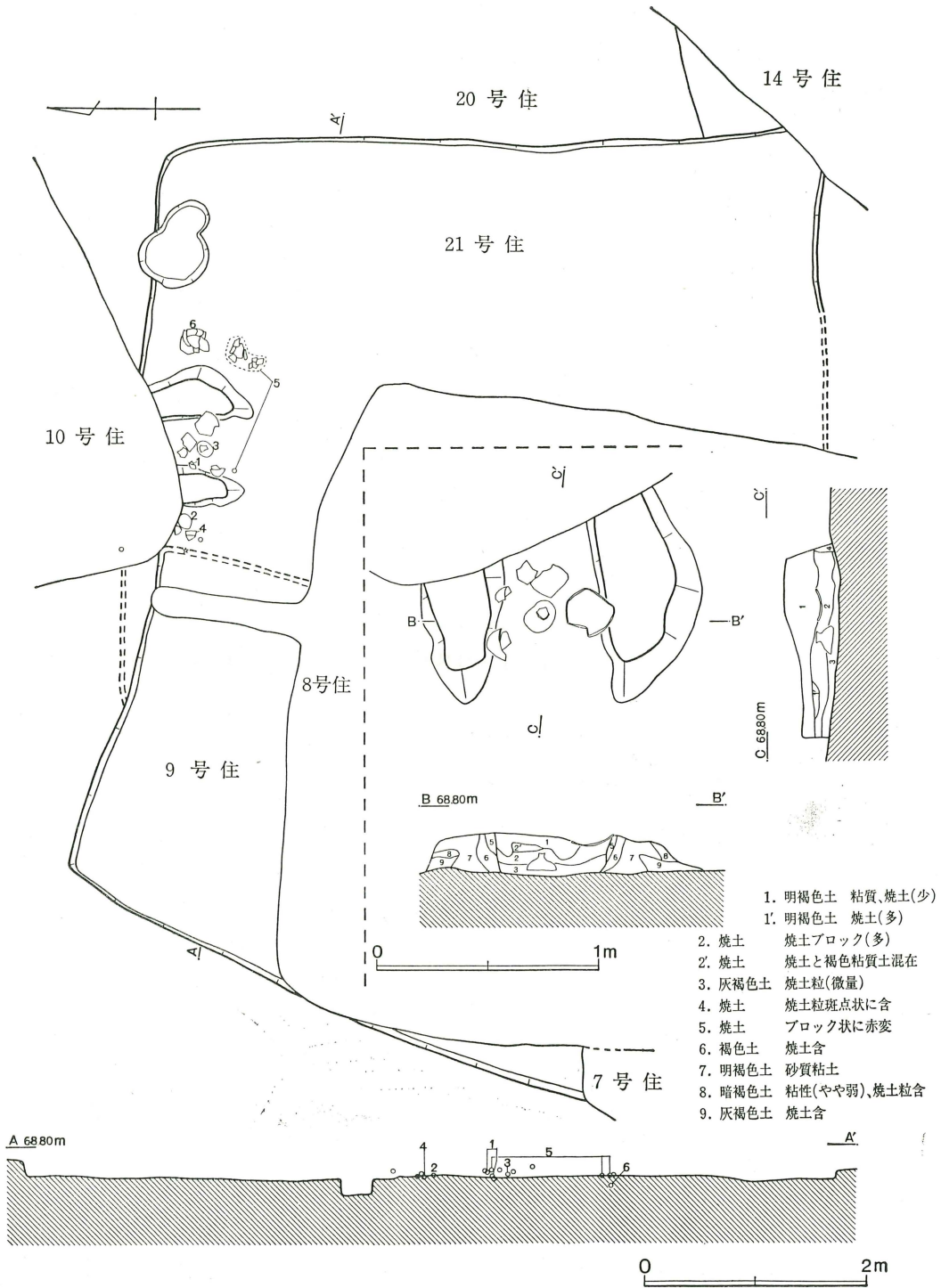
8 K・8 L区周辺に位置し、4軒の住居跡と重複する。5・21号住居跡よりも新しく、7・8号住居跡に切られる。このため南壁と東壁部の殆どは残存しない。また21号住居跡と床面レベルが同じであり、東壁北寄りの立ち上がりは不明瞭だった。東西3m前後、南北5.18+ α mの長方形プランと推定され、西壁部における深さは約15cmを測る。カマドは8号住居跡に破壊されたものと考えられ残存しない。主軸方位はE-23°-Sを指す。出土遺物は小片が多く、図示できるものはない。

10号住居跡 (第212・213図)

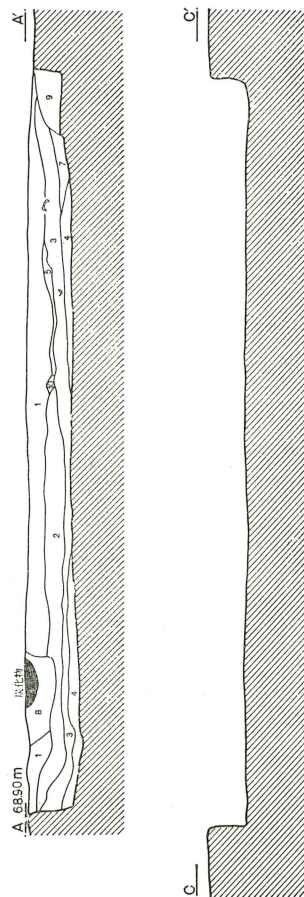
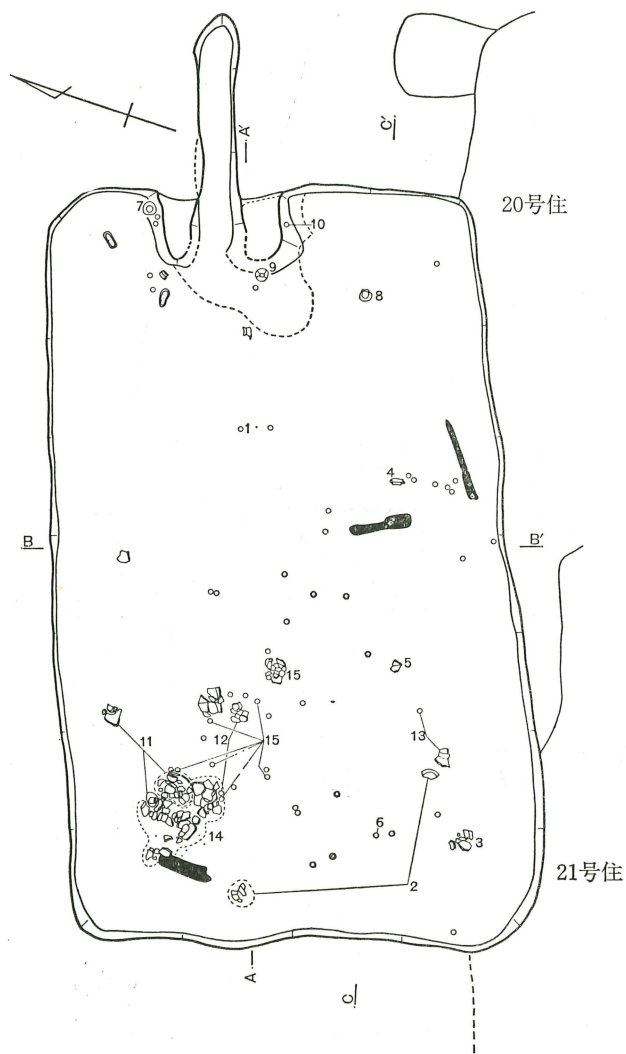
7 J・8 J・8 K区中心に位置する。20号・21号住居跡と重複するが、両住居跡を切って構築されている。規模は東西6.16m、南北3.86m、床面までの深さ30cm前後を測り、やや不整な長方形プランを呈する。床面は小さな凹凸が顕著に認められ一定せず、壁の立ち上がり角度は垂直に近い。主軸方位はN-71°-Eを指す。

カマドは短辺である東壁の北寄りの位置に付設され、煙道は壁外に約1.5m延びる。燃焼部は床面下に約10cm掘り込まれ、その中央部には長さ15cm程の角柱状の礫が2個並立した状態で残されていた。石製支脚とも考えられるが2個設置するのは不自然である。袖部粘土もかなり崩れており、遺存状態は悪い。柱穴・貯蔵穴等の付属施設は検出されなかった。

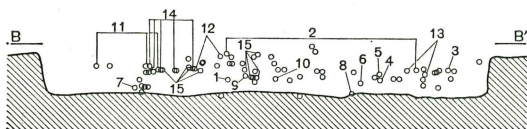
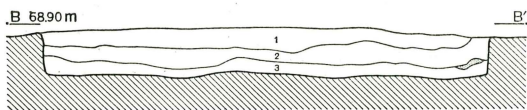
出土遺物はカマド周辺と西壁付近に多いが、その殆どが床面より浮いた位置であり、住居跡に直接伴う遺物とは考えられない。須恵器甕(第214図1)もやはり床面より約14cm浮いて出土し、床面に接して出土したのは214図8の坏があげられるのみである。その他炭化材が3本検出された。



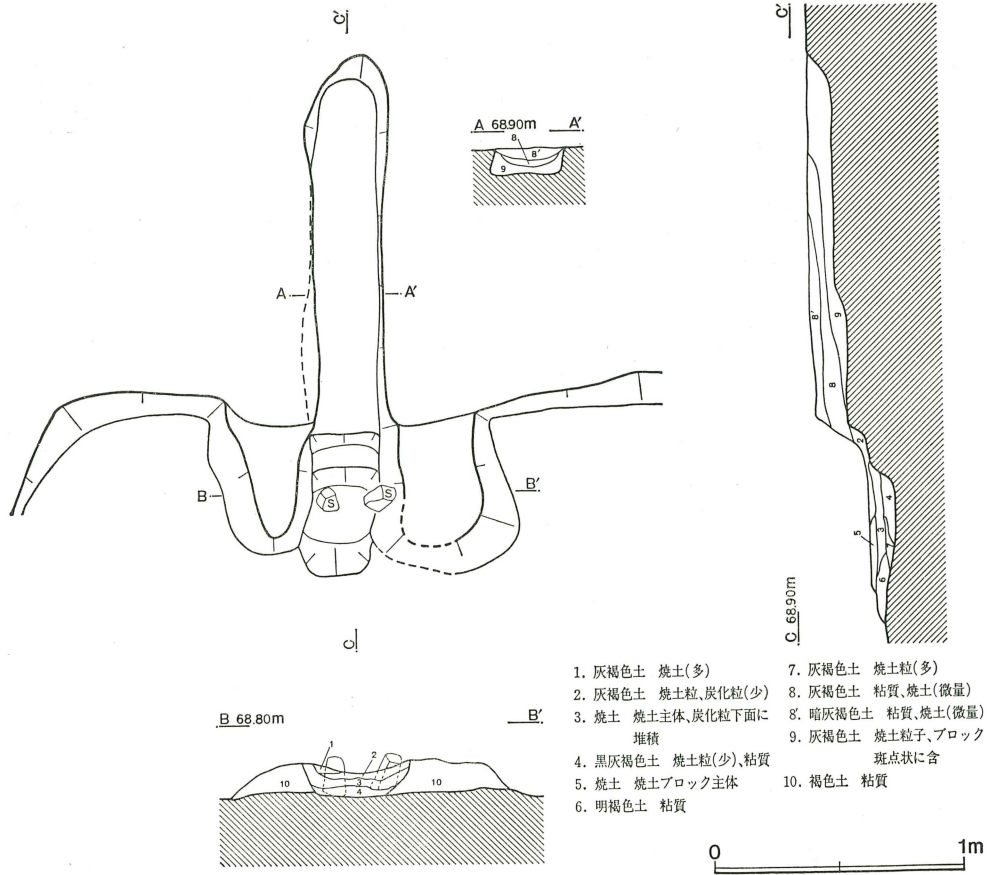
第211図 9・21号住居跡、21号住居跡カマド



- 1. 暗灰褐色土 黒褐色土若干混在
- 2. 暗灰黄褐色土 砂質
- 3. 灰黄褐色土 粘質
- 4. 暗灰黄褐色土 粘質
- 5. 暗灰黄褐色土 焼土(多)
- 6. 暗灰黄褐色土 炭化物粒(多)
- 7. 暗灰黄褐色土 焼土粒(多)
- 8. 暗灰褐色土 焼土炭化粒(少)
- 9. カマド袖部
- 10. 焼土



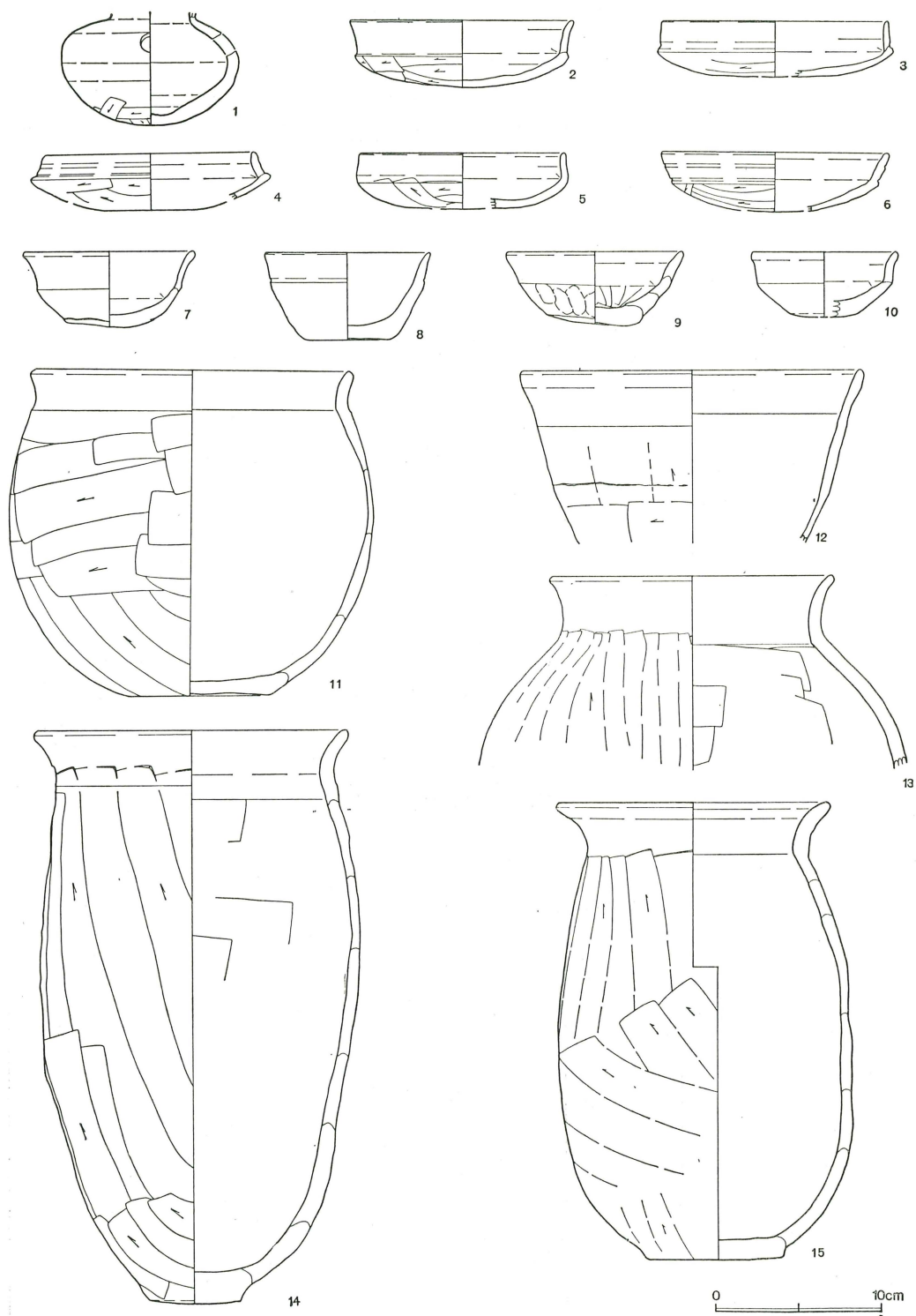
第212図 10号住居跡



第213図 10号住居跡カマド

10号住居跡出土遺物 (第214図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
須恵甕	1			(6.8)	DEF	青灰色 1	ロクロナデ。胴部外面下位篋削り。	№30。体部完存。
土師環	2	13.4		4.1	ABCE	橙褐色 1	体部外面篋削り。内面ナデ。口縁部横ナデ。	№17、54。2/3。
環	3	13.8		3.4	ABC	淡褐色 2	体部外面篋削り、内面ナデ。口縁部横ナデ。	№19。2/3。
環	4	12.6		3.5	ABCEF	橙褐色 1	体部外面篋削り。内面ナデ。口縁部横ナデ。	№8。1/3。
環	5	12.3		3.4	ABCEF	橙褐色 1	体部外面篋削り、内面ナデ。口縁部横ナデ。	№13。1/3。内面褐色。
環	6	13.8		3.6	ABCF	黒褐色 2	体部外面篋削り。口縁部横ナデ、体部内面に及ぶ。	№22。1/4。
小型鉢	7	10.2	5.3	4.6	ABCDF	橙褐色 1	体部内面ナデ。口縁部横ナデ。磨減著しく不明瞭。底部外面ナデ。	№36。ほぼ完。



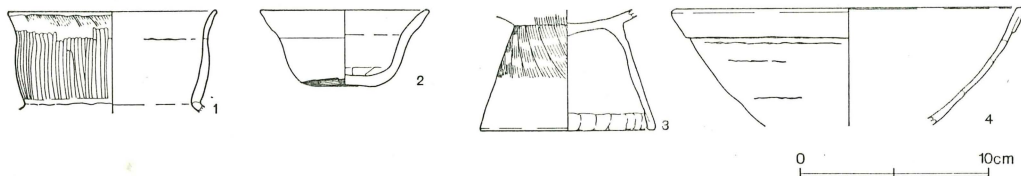
第214図 10号住居跡出土遺物

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調 焼 成	手 法 の 特 徴	出 土 位 置 ・ 残 存 率
		口径	底径	器高				
小型鉢	8	(9.9)	5.0	5.3	A B C D F	橙褐色 1	体部内外面ナデ。口縁部横ナデ。磨減著しく調整不明瞭。底部外面ナデ。	№.3。1/5。
小型鉢	9	10.6	5.6	4.5	A B C D E F	橙褐色 1	底部外面篋削り後ナデ。体部外面ナデ、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	№.67。4/5。
小型鉢	10	(8.6)	(4.2)	(4.0)	A B C D F	橙褐色 2	体部内外面ナデ。口縁部横ナデ。	№.68。1/5。
鉢	11	(19.0)	8.6	19.9	A B C D E F	茶褐色 2	底・胴部外面篋削り、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	№.38、50、51。2/5。
鉢	12	(20.5)		(10.5)	A B C D F	橙褐色 2	体部外面篋削り後ナデ、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	№.41、49。体部上半 ² /5。内面黒褐色。
壺	13	(16.9)		(6.9)	A B C D F	橙褐色 1	胴部外面篋削り後ナデ、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	№.14、16。口縁部 ¹ /5。
甕	14	18.7	5.5	34.9	A B C D E F	橙褐色 2	底・胴部外面篋削り、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	№.49~53。3/4。
甕	15	16.4	8.3	27.9	A B C D E F	褐色 1	底・胴部外面篋削り後ナデ、内面ナデ。口縁部横ナデ。	№.44、47、49、50、56、58、60、72。3/5。

11号住居跡 (第216図)

6 K・7 K区中心に位置し、東壁から北壁部は調査区外にかかり未検出。規模は南北5.26m、東西長は $5.2 + \alpha$ mを測る方形プランの住居跡と推定され、床面までの深さは北壁部で30cmを測る。主軸方位は N-67°-E を指す。床面は概ね平坦であるが、南壁付近にやや窪む箇所がみられ、一部炭化物の散布が確認された。炉跡、柱穴等の施設は検出されなかった。

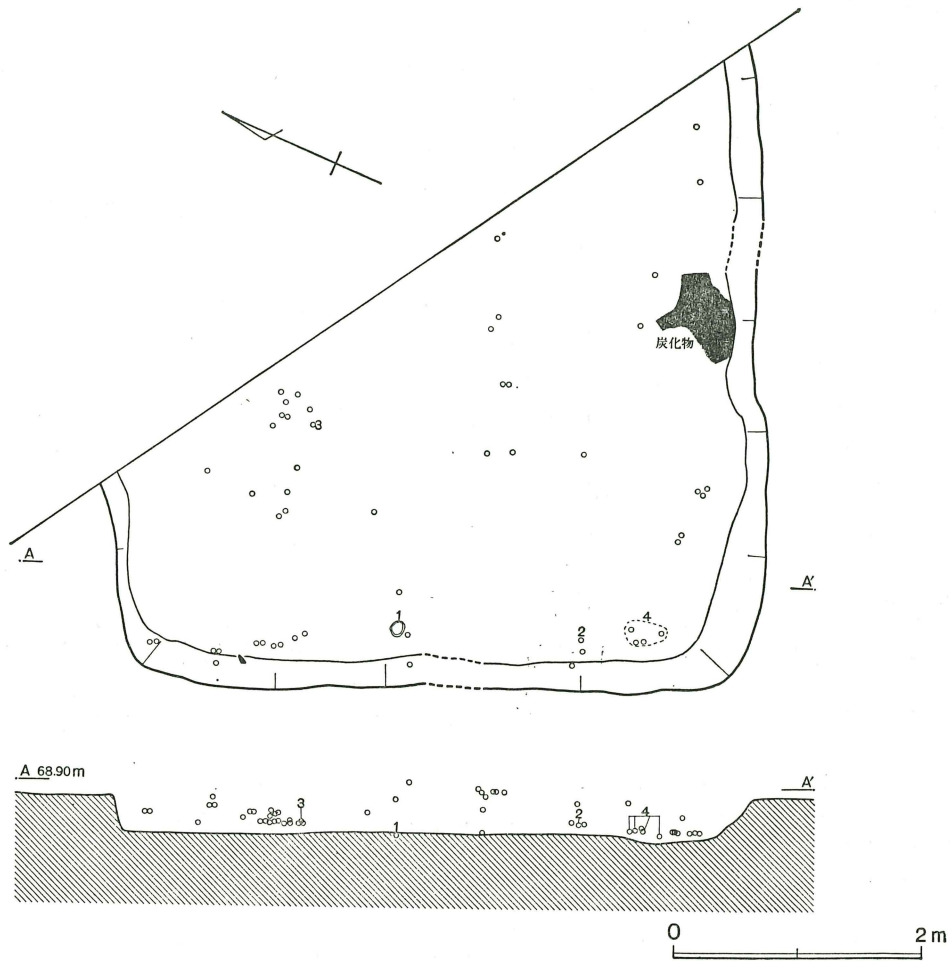
出土遺物は土師器甕等の細片が多い。図示した1・4は床面、2・3は床面上約8cmから出土。



第215図 11号住居跡出土遺物

11号住居跡出土遺物 (第215図)

器種	番号	大きさ (cm)			土 胎	色 調 焼 成	手 法 の 特 徴	出 土 位 置 ・ 残 存 率
		口径	底径	器高				
壺	1	11.1		(5.4)	A B C D E F	茶褐色 1	口縁部内外面ナデ。部分的にハケ目を残す。	№.26。口縁部ほぼ完。
鉢	2	(9.1)	(3.6)	4.0	A B D E	褐色 3	体部外面ナデ、下位にハケ目残す。内面下位篋ナデ。口縁部横ナデ。	№.30。1/3。
S字甕	3		9.3	6.4	A D E・砂粒子	褐色 2	台部外面上位ハケ目の後、全体にナデ。端部内面に折返して指でおさえる。	№.20。脚台部ほぼ完。
甕	4	18.6		(6.5)	A B C D E	茶褐色 1	胴部外面ナデ、内面篋ナデ。口唇部木口状工具痕。口縁部外面横ナデ。	№.31、32、33、34、12号住居 №.4。1/2。



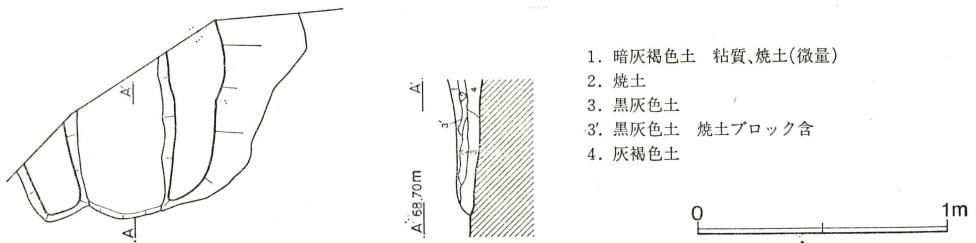
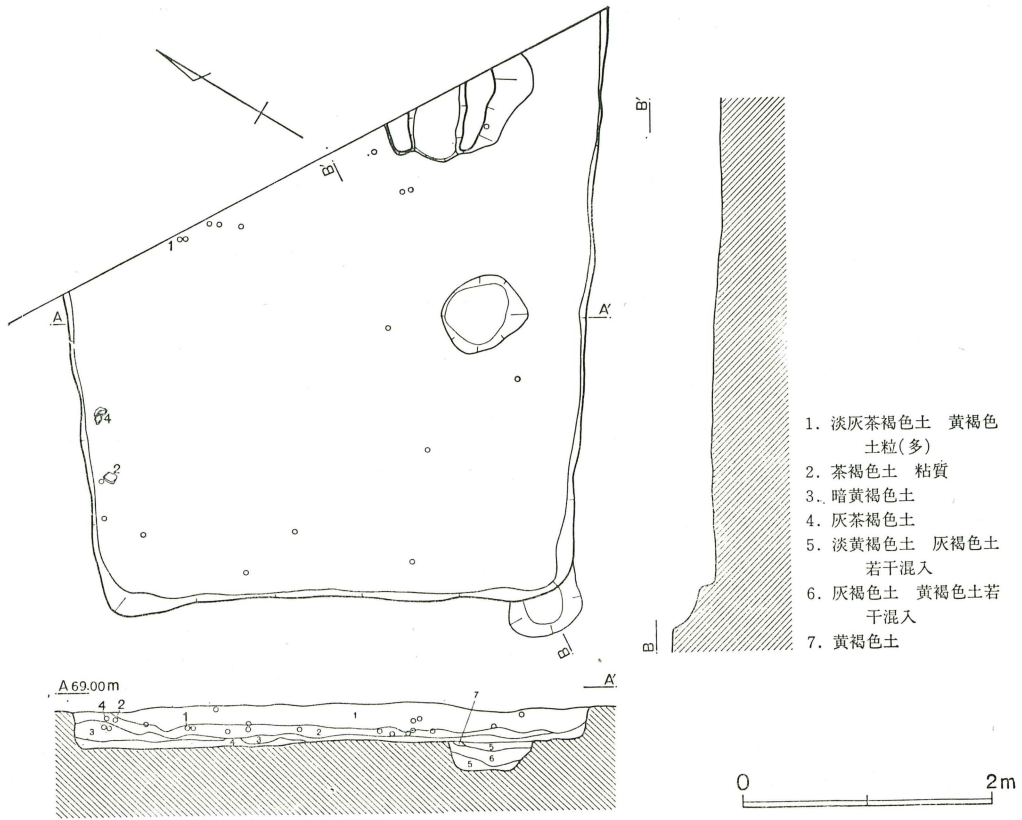
第216図 11号住居跡

12号住居跡 (第217図)

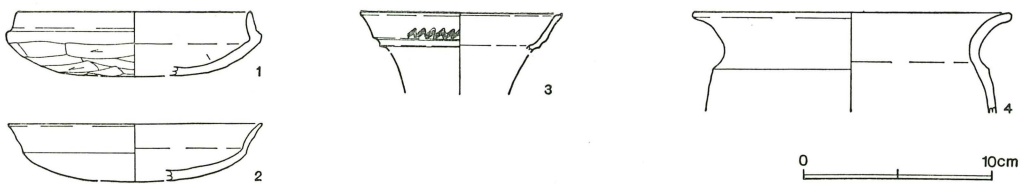
7 I・8 I区中心に位置し、東壁と北壁の一部は調査区外にかかる。他の住居跡との重複はない。規模は現状で4.7×4.2mを測る。南壁はカマドの位置から推して、調査区外にあまり延びずに屈曲するものと考えられる。平面形態は、台形状に歪んだ方形を呈し、深さは北壁部で約30cmを測る。床面は西壁附近がやや高く、カマドに向かって緩く傾斜する。また、壁の立ちあがり角度は垂直に近い。主軸方位はN-58°-Eを指す。

カマドは東壁の南壁寄りの位置に付設されるが、調査区域外に大半がかかり、焚口部のみ調査できた。床面下の掘り込みは浅く、袖部粘土もかなり崩落している。その他、住居跡中央の南壁寄りにピットが検出されたが、床面が被覆しており柱穴とは異なる。

出土遺物は少なく、図示した坏(1・2)、甕(4)、須恵器甕(3)は覆土から出土した。



第217図 12号住居跡・カマド



第218図 12号住居跡出土遺物

12号住居跡出土遺物(第218図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調 焼 成	手 法 の 特 徴	出 土 位 置・残 存 率
		口径	底径	器高				
土師環	1	(12.7)		(3.4)	FC(多)AB	茶褐色 2	体部外面篋削り、上位ナデ。口縁部横ナデ。	№8。1/3。
環	2	(13.8)		(3.0)	ACF	橙褐色 4	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	№2。1/3。
須恵甕	3	(10.9)		(2.1)	DF	黒灰色 1	ロクロナデ。口縁部外面に櫛描波状文。 (5本単位)	2区覆土。口縁部1/3。
土師甕	4	(17.2)		(5.4)	片岩粒(5mm大, 多)ABDE	褐色 3	胴部外面篋削り。口縁部横ナデ。	№1。1/3。

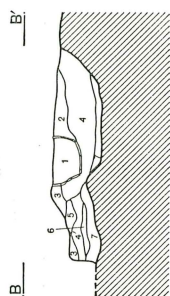
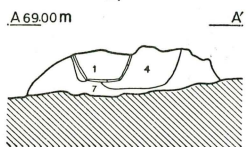
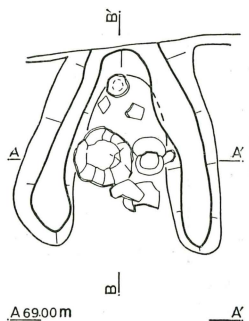
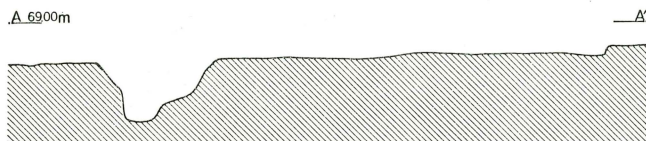
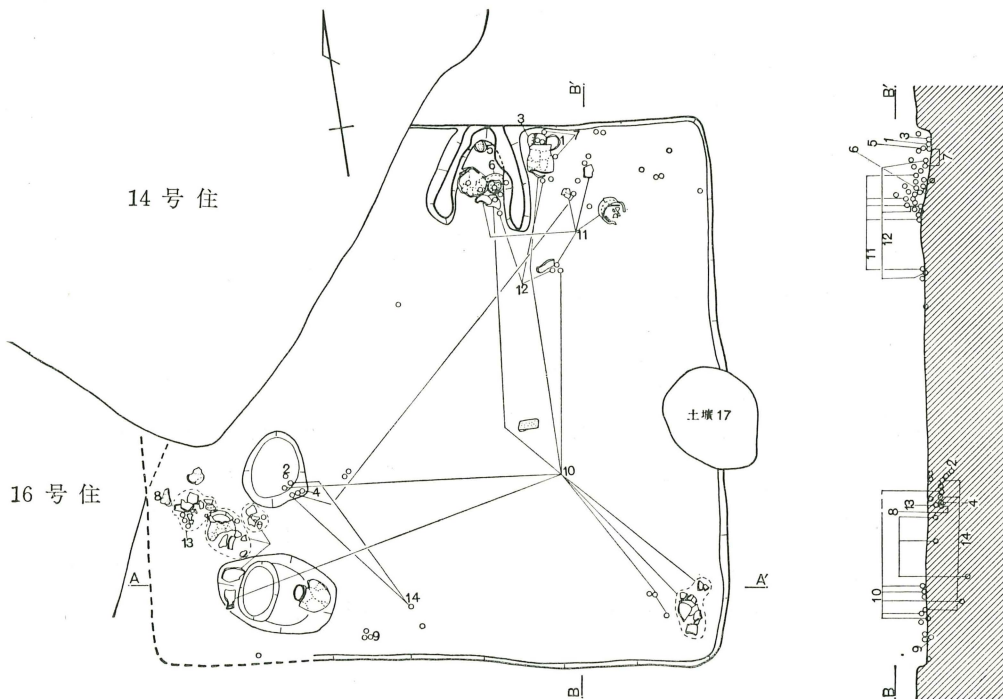
13号住居跡(第219図)

10 I 区中心に位置し、14号住居跡に切られている。南西コーナー付近は壁が残存しないが、南北4.4m、東西4.7m前後の方形プランを呈し、北壁部の壁高は10cmと全体的に浅い。床面は軟かくあまり明瞭ではない。主軸方位はN-8°-Eを指す。カマドは北壁に接して設けられ、壁内におさまる。袖部は褐色粘質土で構築される。その他にピット2本が南西隅部に検出された。

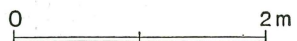
出土遺物は比較的豊富で5・6がカマド内、1・3・7・11・12がカマド右横部、10が南東コーナーとピット内、2・4・8・9・13がピット及びその周辺よりそれぞれ出土した。なお、ピット周辺の遺物は欠番となった15号住居跡の遺物が含まれている。

13号住居跡出土遺物(第220・221図)

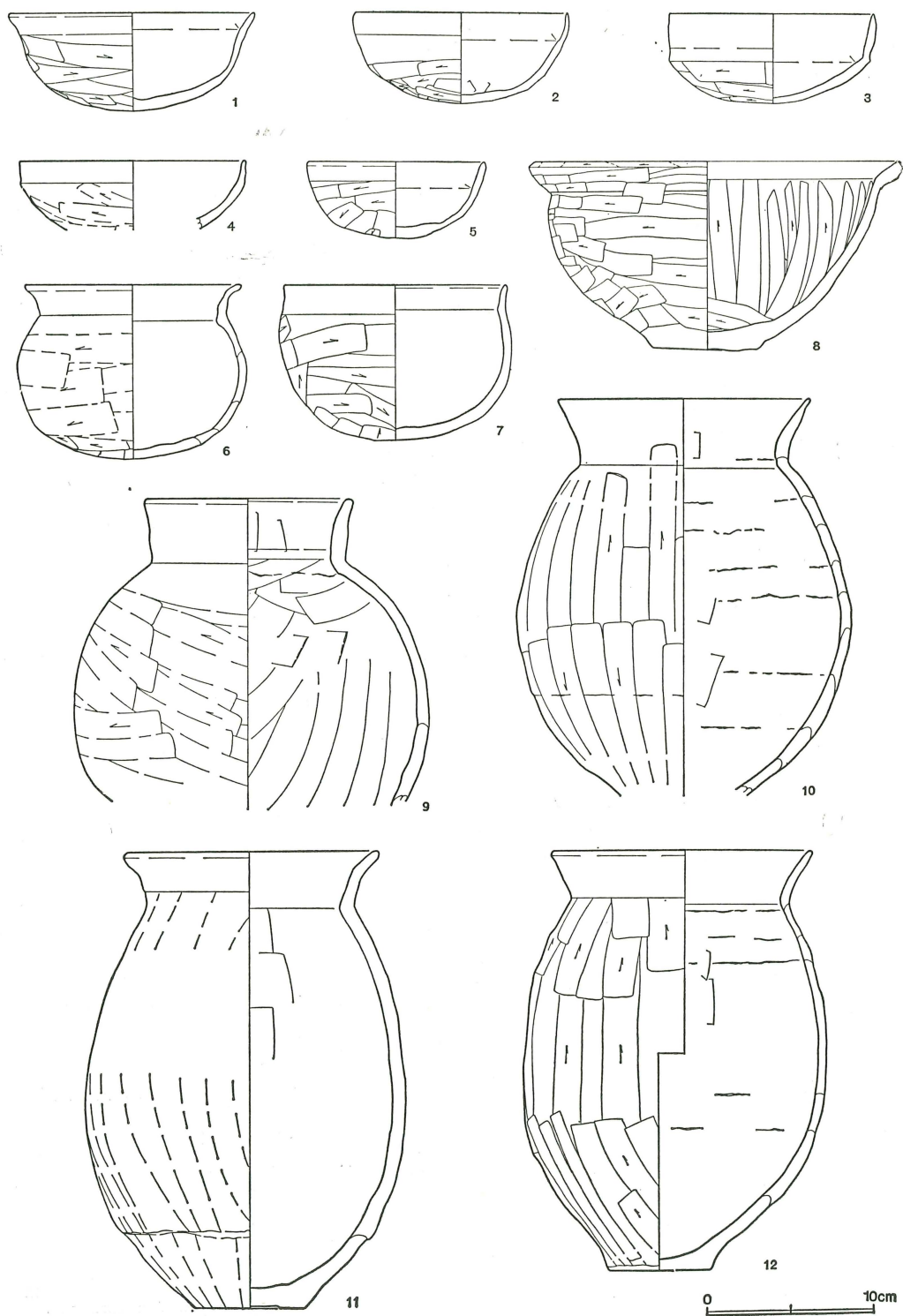
器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調 焼 成	手 法 の 特 徴	出 土 位 置・残 存 率
		口径	底径	器高				
土師環	1	15.0		6.0	BCDEF	橙褐色 1	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	№33。ほぼ完。
環	2	13.0		5.6	BCD	橙褐色 1	体部外面篋削り、上位未調整。口縁部横ナデ。体部内面下位篋削り。	№6。ほぼ完。
環	3	6.4		5.5	BCDEF	褐色 2	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	№35。ほぼ完。
環	4	(13.6)		(4.7)	BCD	茶褐色 2	体部外面中位以下篋削り後ナデと思われるが不明瞭。口縁部横ナデ。	貯穴2№4。覆土。1/3。
壺	5	10.7		4.6	BCDEF	橙褐色 1	体部外面篋削り、上位に未調整部分残る。口縁部横ナデ。	カマド内№15。完存。
鉢	6	13.0		10.7	BCDE	茶褐色 2	体部外面篋削り後ナデ。口縁部横ナデ。	カマド内№8、3区覆土。ほぼ完。
鉢	7	13.5		9.5	BCD	褐色 2	体部外面篋削り、上位未調整。口縁部横ナデ。	№32、34。4/3。
鉢	8	29.0	6.3	11.5	ABCEF	褐色 1	胴部及び底部外面篋削り、部分的に削り残す。内面ナデ後放射状の篋削り。	I-9G№4、24。15号住
壺	9	12.3		(19.0)	CDF	橙褐色 2	胴部外面篋削り後ナデ、内面篋削り後篋削り。口縁部横ナデ。	№5。2/3。口唇部篋削り。 №1。2/3。
甕	10	(15.3)		(24.1)	BCD	褐色 2	胴部外面縦篋削り、下位後ナデ。内面篋削り。口縁部横ナデ。	№5、12、13、14、15、貯 穴1。2/3。



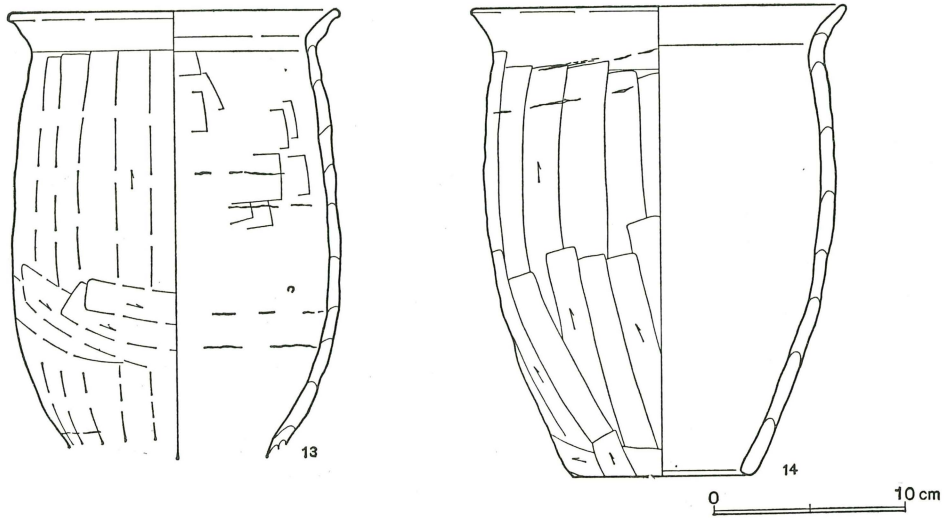
- 1. 黒灰褐色土 焼土(微量)、やや粘質
- 2. 灰褐色土 焼土粒(多)
- 3. 灰褐色土 焼土粒やや少ない
- 4. 暗灰褐色土 焼土粒(多)、粘質
- 4'. 暗灰褐色土 4層類似、焼土ブロック(やや多)
- 5. 焼土 焼土ブロック
- 6. 灰褐色土 炭化粒、焼土粒、灰含
- 7. 明褐色土 粘質土



第219図 13号住居跡・カマド



第220図 13号住居跡出土遺物(1)



第221図 13号住居跡出土遺物(2)

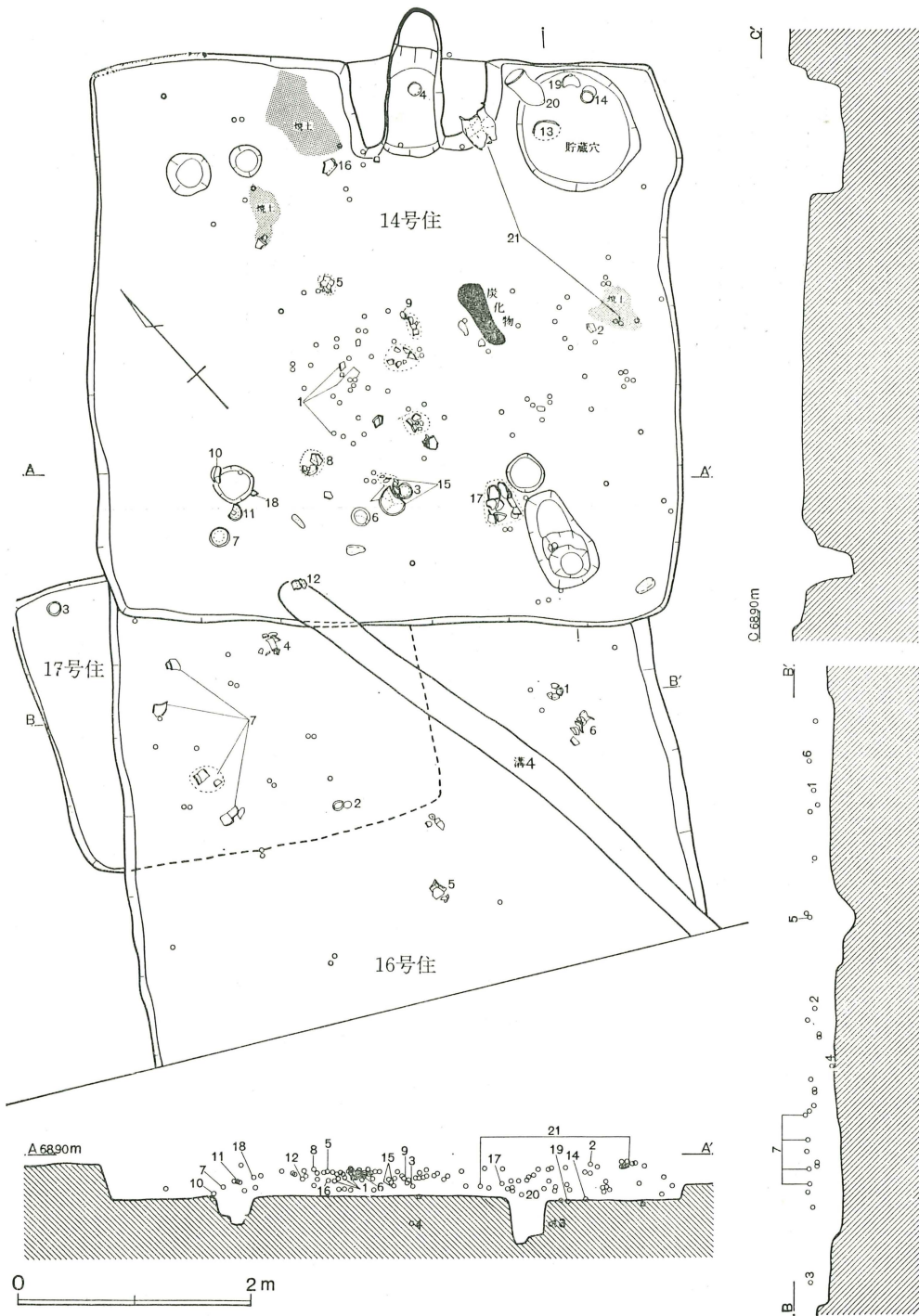
器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調 焼 成	手 法 の 特 徴	出 土 位 置 ・ 残 存 率
		口径	底径	器高				
甕	11	15.1	12.8	27.9	BCD	赤褐色 2	胴部外面篋削り後ナデ、内面篋ナデ。 口縁部横ナデ。	№10、21、25、29、カマド №4。 ² / ₅ 。
甕	12	15.2	6.2	25.7	BCDF	茶褐色 2	胴部外面篋削り、内面篋ナデ。口縁部 横ナデ。底部外面篋削り。	№10、32、カマド№11。 ⁴ / ₅ 。
甕	13	(17.2)		(24.0)	BCD	褐色 2	胴部外面篋削り後ナデ、内面篋ナデ。 口縁部横ナデ。	15号住№4。 ¹ / ₅ 。
甕	14	(19.8)	(9.0)	25.2	ABCDEF	橙褐色 2	口縁部横ナデ。その後、胴部外面篋削 り、内面篋ナデ。	№3、4、5。 ² / ₅ 。

14号住居跡 (第222・223図)

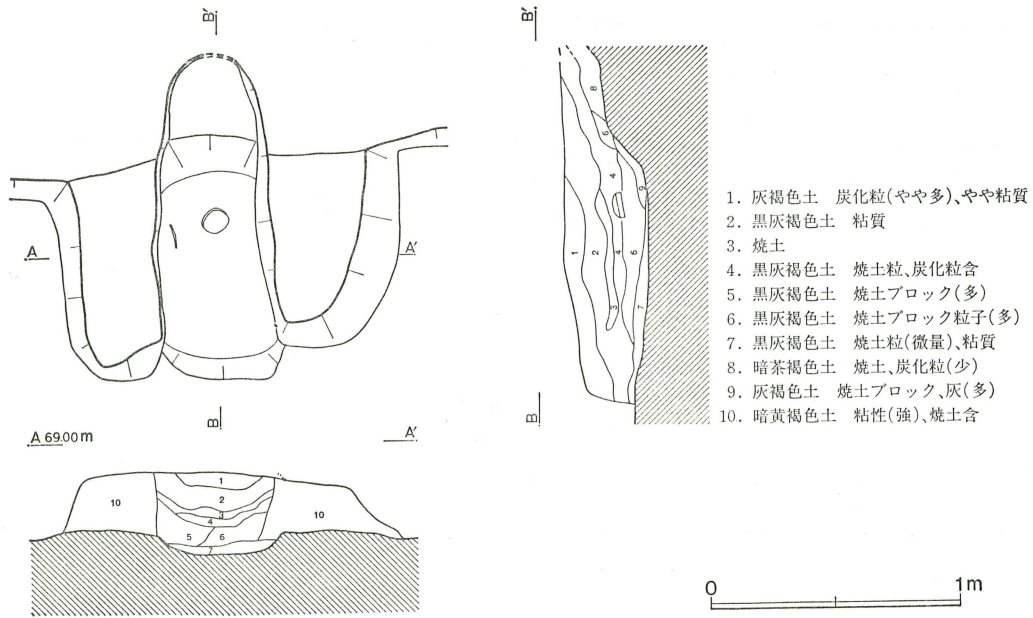
調査区ほぼ中央の10J区を中心に位置する。13・16・17・20・21号の5軒の住居跡と重複するがその何れよりも新しい。4.98×5.2mの比較的整った方形プランを呈し、床面までの深さは北壁で約15cmを測る。床面は概ね平坦であるが、中央部がわずかに高い傾向が認められる。主軸方位はN-43°-Eを指す。

カマドは北東壁の中央よりやや南東に寄った位置に付設され、煙道部は壁外に40cm延びる。燃燒部の掘り込みは6cmと浅く、緩く立ちあがって煙道に続く。袖部は黄褐色粘土で構築されていた。またカマド横には円形の貯蔵穴(1.02×1.08m、深さ32cm)が穿たれ、ピットは5本検出された。

出土遺物量は多いが、その殆どは覆土から検出されたもので、特に貯蔵穴周辺と住居中央から南側での出土が目立つ。図示した4の坏はカマド内覆土、13は貯蔵穴内、14・19・20は貯蔵穴の上面から出土した。また21の甕はカマド袖にもたれかかる様な状態で検出されている。



第222図 14・16・17号住居跡

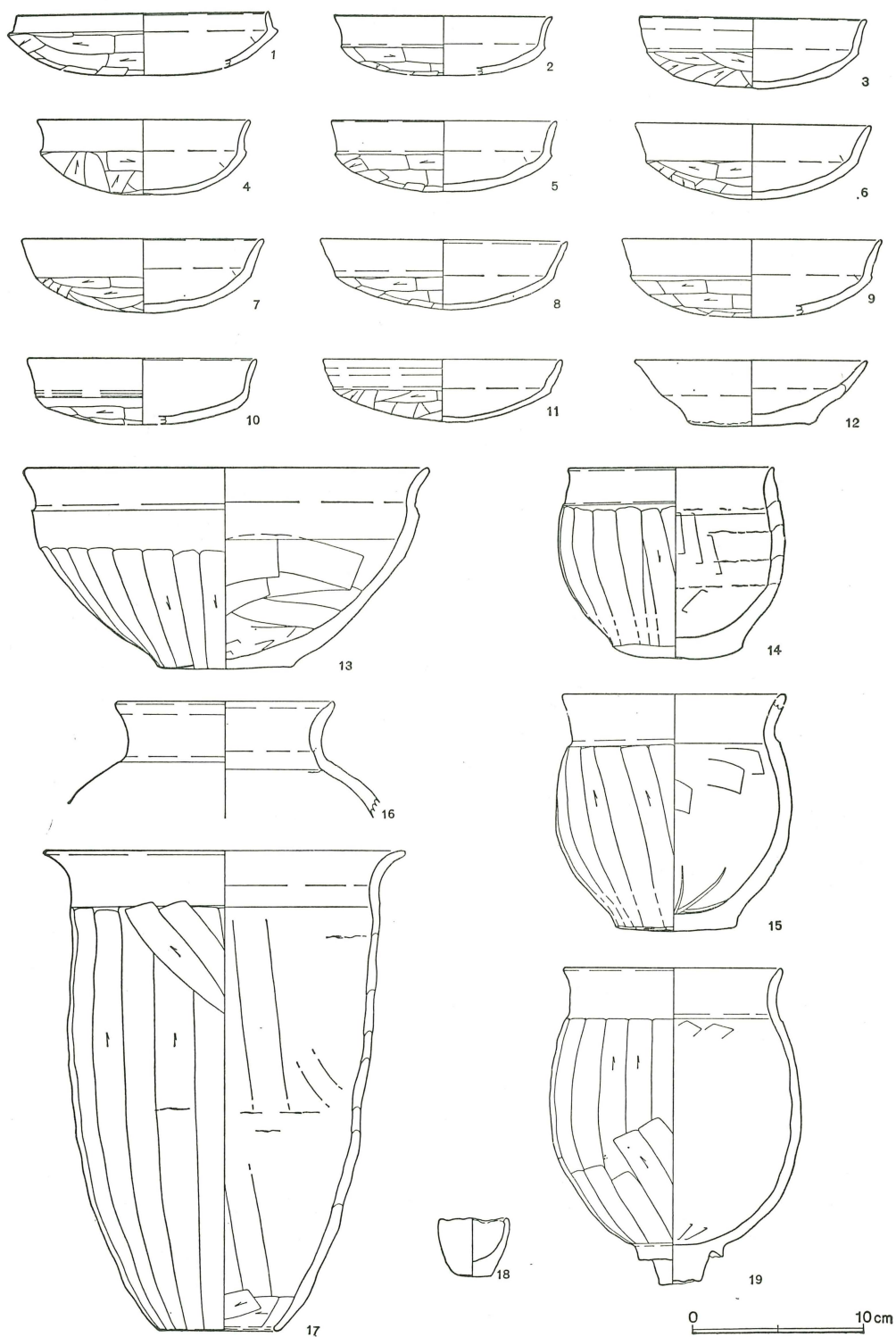


1. 灰褐色土 炭化粒(やや多)、やや粘質
2. 黒灰褐色土 粘質
3. 焼土
4. 黒灰褐色土 焼土粒、炭化粒含
5. 黒灰褐色土 焼土ブロック(多)
6. 黒灰褐色土 焼土ブロック粒子(多)
7. 黒灰褐色土 焼土粒(微量)、粘質
8. 暗茶褐色土 焼土、炭化粒(少)
9. 灰褐色土 焼土ブロック、灰(多)
10. 暗黄褐色土 粘性(強)、焼土含

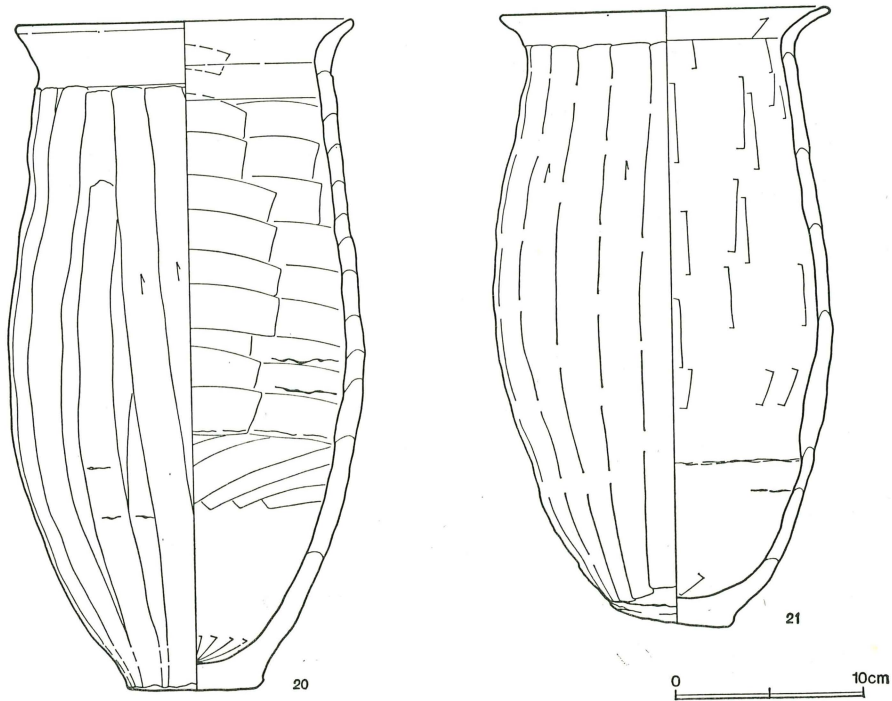
第223図 14号住居跡カマド

14号住居跡出土遺物 (第224・225図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師環	1	(15.0)		(3.7)	BCDEF	茶褐色 1	体部外面篋削り、上位に部分的に未調整残す。口縁部横ナデ。	№90, 93, 105。1/3。
環	2	(13.0)		(3.6)	ACF、緻密。	橙褐色 4	口縁部横ナデ。体部外面篋削り。	№19。1/5。
環	3	13.6		4.2	A(多)BCF、やや粗。	褐色 3	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	№9。ほぼ完。
環	4	12.5		4.5	F(多)ABC、緻密。	橙褐色 1	口縁部横ナデ。体部外面篋削り。	カマド№3。ほぼ完。
環	5	(13.5)		4.3	ACF、緻密。	橙褐色 4	口縁部横ナデ。体部外面篋削り。	№51。2/5。
環	6	14.1		4.5	C(多)ABF	橙褐色 2	口縁部横ナデ。体部外面篋削り。	№7。ほぼ完。
環	7	14.5		4.4	ABCEF	橙褐色 3	口縁部横ナデ。体部外面篋削り。	№5。ほぼ完。
環	8	14.8		4.1	B(少)ACE	橙褐色 4	口縁部横ナデ。その後、体部外面篋削り。磨滅により方向不明瞭。	№106。ほぼ完。
環	9	(15.6)		(4.7)	ACF、緻密。	褐色 3	口縁部横ナデ。体部外面篋削り、上位未調整。	№60、覆土。1/5。
環	10	(14.0)		(4.3)	ABCDE	褐色 3	体部外面篋削り後ナデ。口縁部横ナデ、外面下位棒状工具痕。	№122。2/5。
環	11				C(多)F(少)AB、緻密。	褐色 2	体部外面篋削り。口縁部ゆるい段をもつ。	№6。4/5。



第224図 14号住居跡出土遺物(1)



第225図 14号住居跡出土遺物(2)

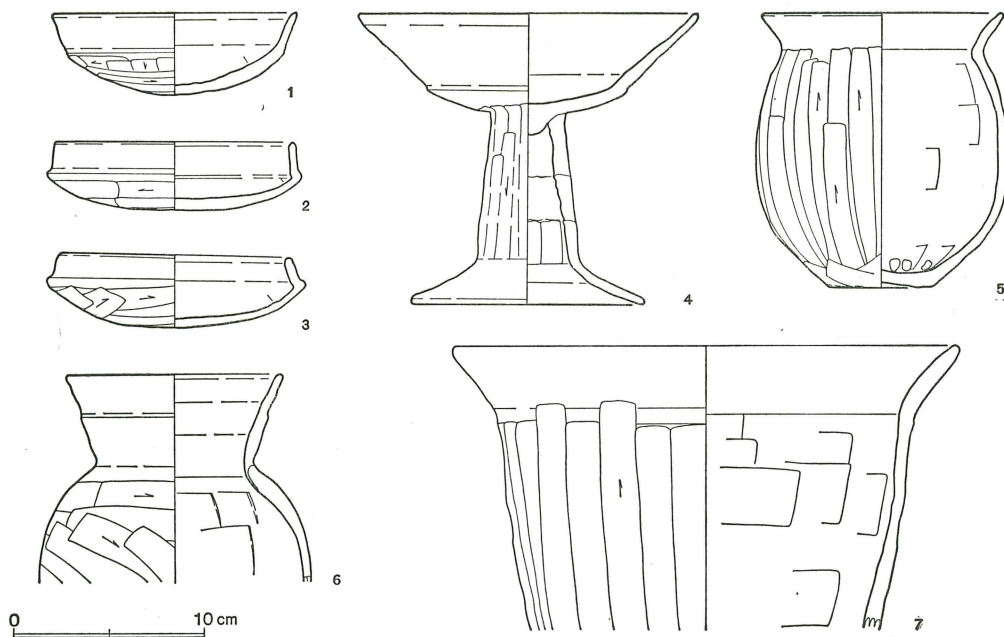
器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調 焼 成	手 法 の 特 徴	出 土 位 置 ・ 残 存 率
		口径	底径	器高				
土師環	12	13.9	7.0	4.0	BCDF	茶褐色 2	底部外面篋削り。体内内外面ナデ。	№125。2/3。
鉢	13	24.3	8.1	12.1	DE (多) AB CF	橙褐色 2	胴部外面中位以下縦篋削り、上位ナデ。底部外面篋削り、内面篋ナデ。	貯蔵穴№1。完存。
鉢	14	12.4	7.8	11.4	DE (多) BF	褐色 2	胴部外面篋削り後、下位ナデ、上位未調整、内面篋ナデ。底部外面中央ナデ。	№3。完存。底部外面は磨滅著しい。
鉢	15	(13.4)		(14.0)	D (多) ABC F	褐色 3	口縁部横ナデ後、胴部外面篋削り後下位ナデ。底部内面放射状に工具痕。	№8、114、覆土。3/5。
壺	16	(13.2)		(7.0)	F (多) ABC D	褐色 1	胴部内外面ナデ。口縁部横ナデ。	№48。1/2。
甌	17	21.6		28.9	ABCDE	淡褐色 2	胴部外面縦篋削り。内面篋ナデ、下端部横篋削り。口縁部横ナデ。	№78。ほぼ完。
手捏ね	18	4.2	2.1	3.5	ABCDE	褐色 2	底部外面篋削り後ナデ。体内内外面ナデ。	№124。ほぼ完。
台付甕	19	12.2	5.1	19.2	AB(少)CF・ 5mm片岩粒(多)	赤褐色 2	胴部外面篋削り。内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	№2。ほぼ完。脚部欠損。
甕	20	18.1	6.9	35.9	CF (多) AB DE	褐色 2	胴部外面篋削り後下位ナデ。内面中位以上、上→下・逆時計廻りの篋ナデ。	№1。完存。篋ナデは深くしっかりしている。
甕	21	17.6	6.1	32.8	ABCDEF	茶褐色 2	胴部外面篋削り後ナデ。内面篋ナデ。	№4、16。ほぼ完。

16・17号住居跡（第222図）

16号住居跡は10・11—J・K区に位置し、北壁を14号住居跡に切れられ、南壁部は調査区外にかかる。東西長5m、南北長は4.26mが残存する。プランは明らかでないが方形を呈するものと考えられる。床面までの深さは西壁部で15cmを測る。床面はやや起伏がみられ一定せず、柱穴その他の付属施設も検出されなかった。

17号住居跡は14・16号住居跡と重複する。南北長2.56m、東西長は0.9m確認されたがその正確な規模・形態は不明である。床面レベルは16号住居跡のそれより10cm程高い。住居跡に伴う施設は検出されなかった。

兩住居跡からの出土遺物量は比較的少なく、その垂直分布をみると図示した4の高坏を除く他の土器は全て床面よりかなり浮いて出土していることが判る。このことと床面レベルを考え合せ、一応高坏（4）を16号住居跡の遺物とし、2・3・7を17号住居跡覆土の遺物と把えておく。なお1・5・6はその帰属を明らかにし難い。新旧関係を示せば16号住（古）→17号住居跡となろう。



第226図 16・17号住居跡出土遺物

16・17号住居跡出土遺物（第226図）

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調 焼 成	手 法 の 特 徴	出 土 位 置 ・ 残 存 率
		口径	底径	器高				
土師 坏	1	13.1		4.3	ACDEF	茶褐色 2	体部外面篋削り、上位削り残しあり。 口縁部横ナデ。	16住№26。4/5。
	2	(12.8)		3.6	ACDEF	黒褐色 2	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	16住№16。2/3。

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調 焼 成	手 法 の 特 徴	出 土 位 置・残 存 率
		口径	底径	器高				
坏	3	12.8		3.9	A C E F	茶褐色 1	体部外面篋削り、上位未調整。口縁部横ナデ。	17住№1。完存。
高 坏	4	18.2		15.6	A C D E F	橙褐色 2	坏部。柱状部外面篋削り後ナデ。柱状部内面下位篋削り。口縁・裾部横ナデ。	16住№13。2/3。
小型甕	5	(12.6)	5.4	14.9	A B C D E F	茶褐色 2	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り、内面篋ナデ、下位指頭痕。	16住№20。2/3。
壺	6	11.6		(11.0)	A C F	橙褐色 1	胴部外面篋削り後ナデ、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	16住№27。2/3。
甌	7	(27.0)		(15.2)	A B C D E F	茶褐色 1	胴部外面縦篋削り、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	16住№2、3、6、9、口縁部2/3。

18号住居跡 (第227図)

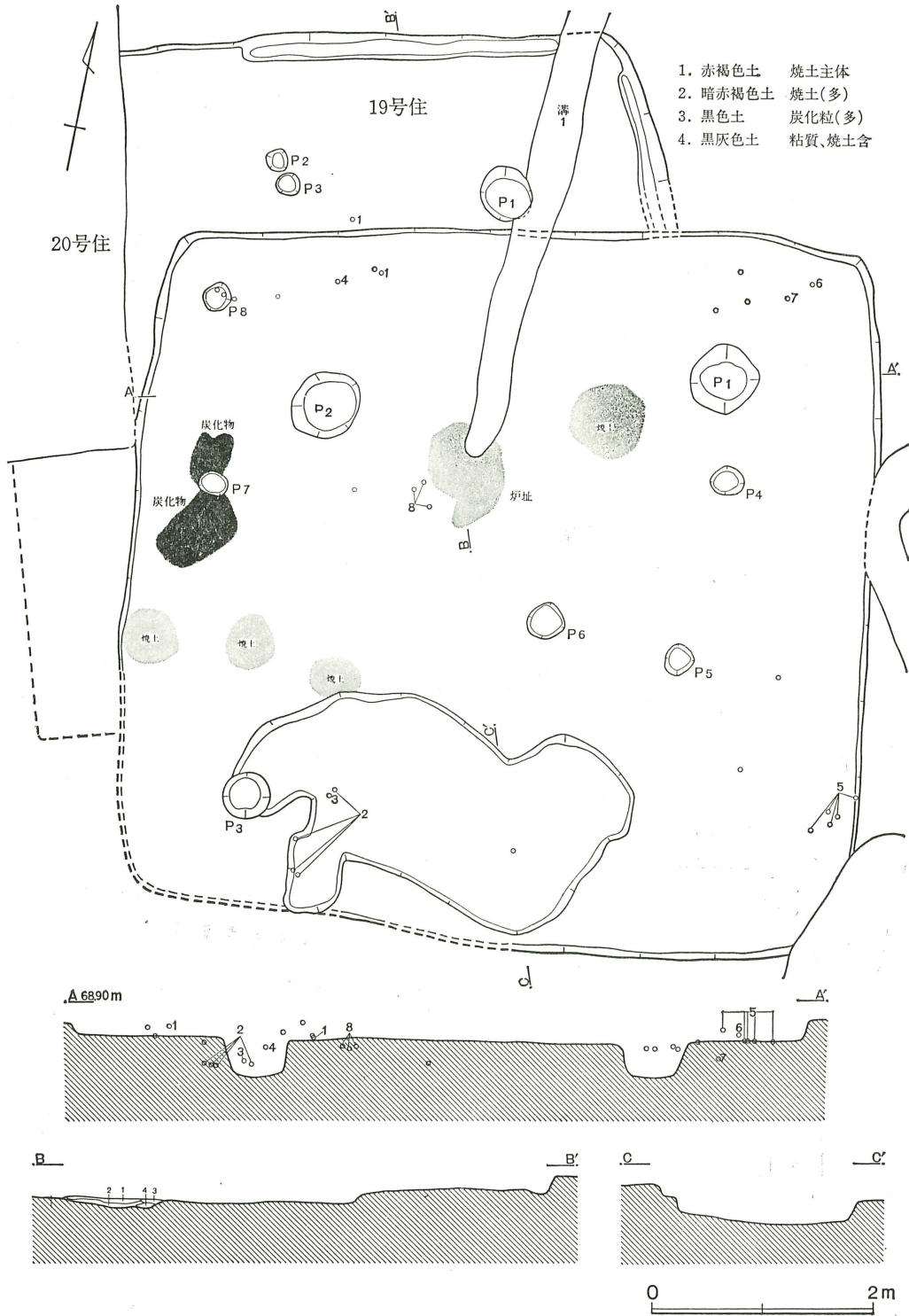
9 H・9 I 区中心に位置する。19号住居跡を切り、20号住居跡と接する。南壁から西壁の一部にかけてはプランが不明瞭であるが、東西6.86m、南北6.8mの整った方形プランを呈する。床面までの深さは10cm前後と浅い。床面はほぼ平坦であるが、南壁付近に攪乱(?)による落ち込みがみられる。その他、焼土及び炭化物の散布が数ヶ所認められる。

炉は住居中央からやや北寄りに位置する。1×0.7mの不整楕円形を呈し、深さ8cmを測る所謂地床炉である。ピットは7本検出され、規模の大きい2本(北壁寄り)が支柱穴に相当しよう。

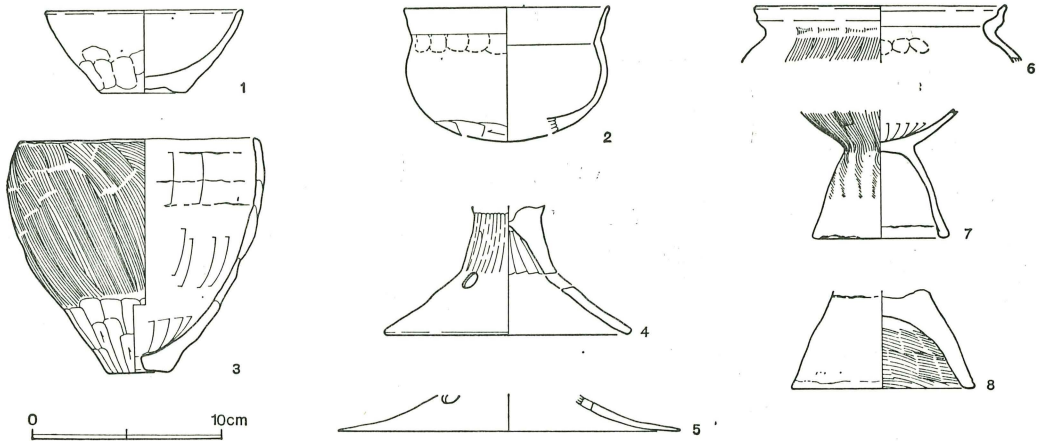
出土遺物は少なく、図示した6は北東コーナー附近、2・3は南壁近くの落ち込みから出土した。

18号住居跡出土遺物 (第228図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調 焼 成	手 法 の 特 徴	出 土 位 置・残 存 率
		口径	底径	器高				
土師鉢	1	10.4	4.6	4.4	A B C	褐 色 2	口縁・胴部外面丁寧なナデ。下位に指押えあり。	№309。2/3。
鉢	2	(10.9)		(7.2)	A B C D E F	茶褐色 1	胴部外面ナデ、上位に指頭痕、下位篋削り。口縁部横ナデ。	№448、449、522、525。2/3。
甌	3	12.6	3.4	12.5	A C D E F	橙褐色 2	胴部外面ハケ目後、下位篋削り。内面篋ナデ。	№435。ほぼ完。
高 坏	4			(6.9)	A B C D E	赤褐色 2	脚部3孔。磨滅により調整不明瞭。	№23。脚部1/3。
高 坏	5			(1.9)	A C F	橙褐色 4	脚部3孔。磨滅により調整不明瞭。	№239、279、286、287、288 脚部2/3。
S字甕	6	(13.4)		(2.9)	A B C F	橙褐色 2	胴部外面ハケ目、口縁部横ナデ。	№72。1/6。
台付甕	7			(6.8)	A C E F	褐 色 2	底部外面ハケ目、内面篋ナデ。脚台部外面ハケ目後部分的ナデ。	№480。脚台部ほぼ完。内面に折り返しをもつ。
台付甕	8			(5.2)	A B C D E F	橙褐色 2	脚台部外面ナデ、内面細かい単位のハケ目。	№117、118、119、脚台部完。



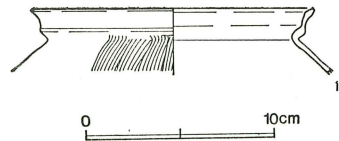
第227図 18・19号住居跡



第228図 18号住居跡出土遺物

19号住居跡 (第227図)

8 I 区中心に位置する。18・20号住居跡と重複するが、両住居跡よりも古い。北壁4.58m、東壁1.38mが確認されるが南西コーナー部は検出できなかった。床面までの深さは北壁で8~12cmと浅い。平面形態は方形を呈するものと推定される。主軸方位を北壁と直交する軸にとればN-3°-Wを示す。ピットは3本検出されたが支柱穴と考えられるのは北東コーナー寄りの1本だけである。壁溝は全周しない。遺物は僅少で図示し得たのは1点のみである。



第229図 19号住居跡出土遺物

19号住居跡出土遺物 (第229図)

S字状口縁台付甕。推定口径15.0cm。残存高3.5cm。色調は淡褐色を呈し、焼成は良好。胎土にA・B・Cが含まれる。口縁部横ナデ、胴部外面斜位のハケ目が施される。肩部横線はみられない。

20号住居跡 (第230図)

8 J・9 J 区に位置する。他住居跡との重複関係は19号住居跡を切り、10・14・21号住居跡に切られる。規模は南北長6.38m、東西長は6.6mを越える。床面までの深さは5~16cmと浅く、プランは方形を呈するものと推定される。床面レベルは北壁側が低く、南壁側との高低差は20cmを測る。主軸方位はN-18°-W。炉跡は住居中央から北に偏った位置に設けられる。また北東コーナー付近の床面に焼土の薄い堆積が認められた。ピットは5本検出された。そのなかで南東コーナーに最も近い楕円形ピット(1.05×0.76m、深さ34cm)は貯蔵穴と思われる。

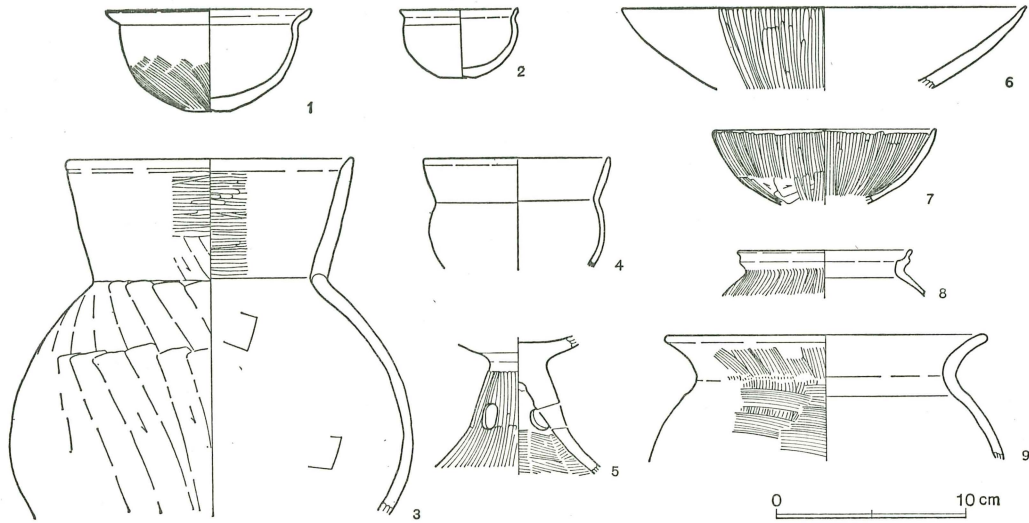
出土遺物は少ない。231図4が床直、3が貯蔵穴から出土し、他は覆土中からの検出である。



第230図 20号住居跡

20号住居跡出土遺物 (第231図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師壺	1	10.8	2.2	5.3	ACDEF	茶褐色 1	体部外面上位ナデ、下位ハケ目。口縁部横ナデ。	No.151。1/2。
壺	2	6.4	1.9	3.7	DEF	茶褐色 1	体部外面ナデ。口縁部横ナデ。	No.81。ほぼ完。
壺	3	(15.2)		(19.1)	E(多)ABC D	橙褐色 1	胴部外面・口縁部外面下位篋削り後ナデ。口縁部外面上位・内面篋磨き。	No.180。2/5。



第231図 20号住居跡出土遺物

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
埴	4	(9.9)		(5.9)	ACEF	茶褐色 3	胴部内外面ナデ。口縁部横ナデ。	No.111。1/50。
高 坏	5			(7.4)	ABCDEF	橙褐色 1	脚部に3孔。脚部外面鏡磨き、内面下位ハケ目。	No.163。脚部3/50。
高 坏	6	(21.7)		4.3	ABCDEF	茶褐色 1	坏部外面鏡磨き。内面ナデ。	No.177, 178。坏部上半1/50。
高 坏	7	12.0		4.0	ACDEF	茶褐色 1	坏部外面下位軽い鏡削り後、内外面鏡磨き。	No.9。口縁部1/50。
S字甗	8	(9.4)		(2.5)	ABCDF	淡褐色 1	口縁部横ナデ後、胴部外面ハケ目。	No.179。口縁部1/60。
甗	9	(17.0)		(6.7)	ACDEF	褐橙色 2	口縁部横ナデ後、胴部外面ハケ目。	No.47。口縁部1/50。

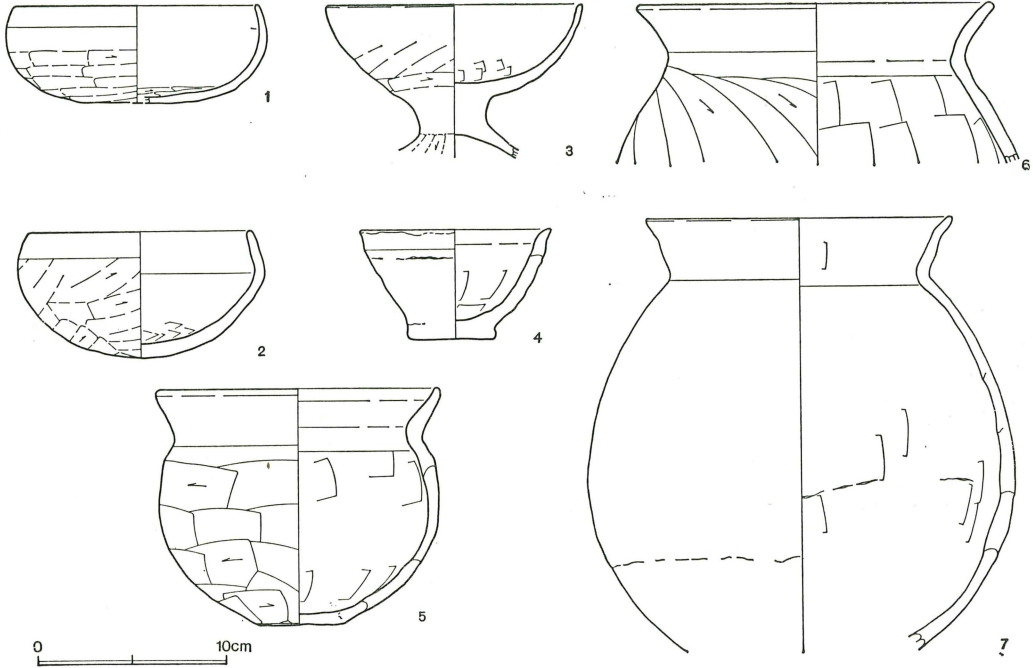
21号住居跡 (第211図)

8・9-J・K区に位置し、5軒の住居跡と重複する。新旧関係は8~10・14号住居跡より古く、20号住居跡よりも新しい。全体の規模は不明だが南北長6.12m、東西長は5mを越えるものと考えられる。床面までの深さは東壁部で8cmと非常に浅く、平面プランは方形を呈すると推定される。床面はほぼ平坦で、レベルは9号住居跡床面と大差なく壁の検出は困難であった。主軸方位はN-5°-Eを指す。

カマドは北壁に接して設けられるが、北半は10号住居跡により破壊されていた。その他、ピットが1本検出されたが住居跡に伴うものではない。出土遺物は少ないが、カマド周辺に集中する。

1・3はカマド内、2・4はカマド西側、5・6は東側からそれぞれ検出された。

川越田



第232図 21号住居跡出土遺物

21号住居跡出土遺物 (第232図)

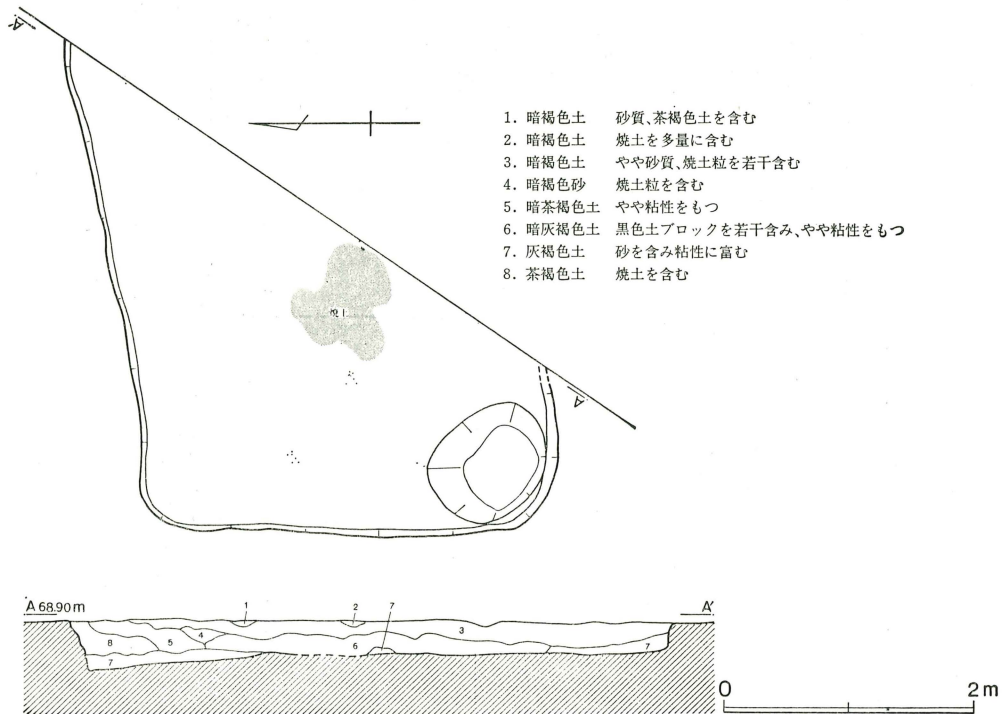
器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調		手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高		焼成			
土師	1	(13.0)		5.4	BCDE	褐色	口縁部横ナデ。体部外面篋削り後ナデ。上位はナデ。内面下位篋削り。	カマフNo.10。110 ² / ₅ 。	
環	2	11.8		6.7	BCDE	褐色	口縁部横ナデ。体部外面篋削り後ナデ。内面下位篋ナデ。	カマフNo.17。3 ³ / ₅ 。	
高	3	13.6		(8.1)	ABCE	茶褐色	口縁部横ナデ。体部外面篋削り後ナデ、内面篋ナデ。脚外面下位篋削り後ナデ。	カマフNo.12。3 ³ / ₅ 。磨滅著しい。	
鉢	4	10.2	4.5	5.8	ABCDEF	茶褐色	口縁部軽い横ナデ。体部外面ナデ、内面篋ナデ。底部外面木葉痕、のち磨滅。	カマフNo.16、10号住No.55。2 ² / ₅ 。	
小型甗	5	(14.8)	4.6	12.6	BE。大粒の粒子が多い。	赤褐色	口縁部横ナデ。底部・胴部外面篋削り、上位に削り残し有り。内面篋ナデ。	カマフNo.4、5、15。2 ² / ₅ 。	
甗	6	18.7		(8.6)	BCDE	茶褐色	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り。内面篋ナデ。	カマフNo.1。口縁部ほぼ完。	
甗	7	(16.1)		(23.1)	BCD	褐色	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り、内面篋ナデ。	No.5。1 ¹ / ₅ 。磨滅著しい。	

22号住居跡 (欠番)

23号住居跡 (第233図)

調査区東端の13E・14E区中心に位置する。調査区域外にかかるため完掘できなかった。また12号溝跡と重なるが住居跡が古い。南北辺3.4m、東西辺4mを越える（長）方形プランを呈する住居跡と考えられる。砂礫層を掘り込み床面としており、確認面からの深さは北壁で22cmを測る。

床面中央部には炉跡と考えられる浅い皿状の落ち込みが検出された。上層（床面）に炭化粒子と灰の混土層が、下層には焼土が堆積していた。また南西コーナー部には深さ50cmの貯蔵穴をもつ。出土遺物は土師器細片が8片あるのみで、時期は明確にできないが、五領～和泉期であろう。

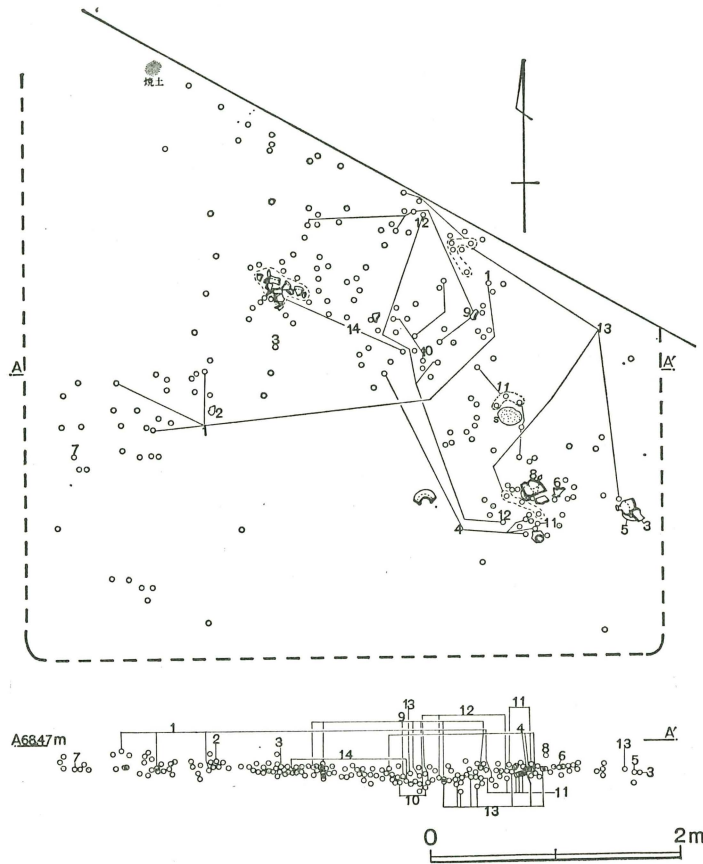


第233図 23号住居跡

24号住居跡（第234図）

本住居跡の位置する10F区は自然堤防肩部に相当し、東に移行するに従って地山面が傾斜（低下）している。この斜面上には漆黒土の堆積が認められ、土器はこの黒色土中から検出された。当初包含層と考えたが、出土レベルが一定すること、分布範囲が径5m前後にまとまること等から一応住居跡として扱った。以上の様な検出状況であるためプラン、床面は勿論、炉跡等の施設も確認できなかった。なお遺構図に示した点線もあくまで推定プランである。

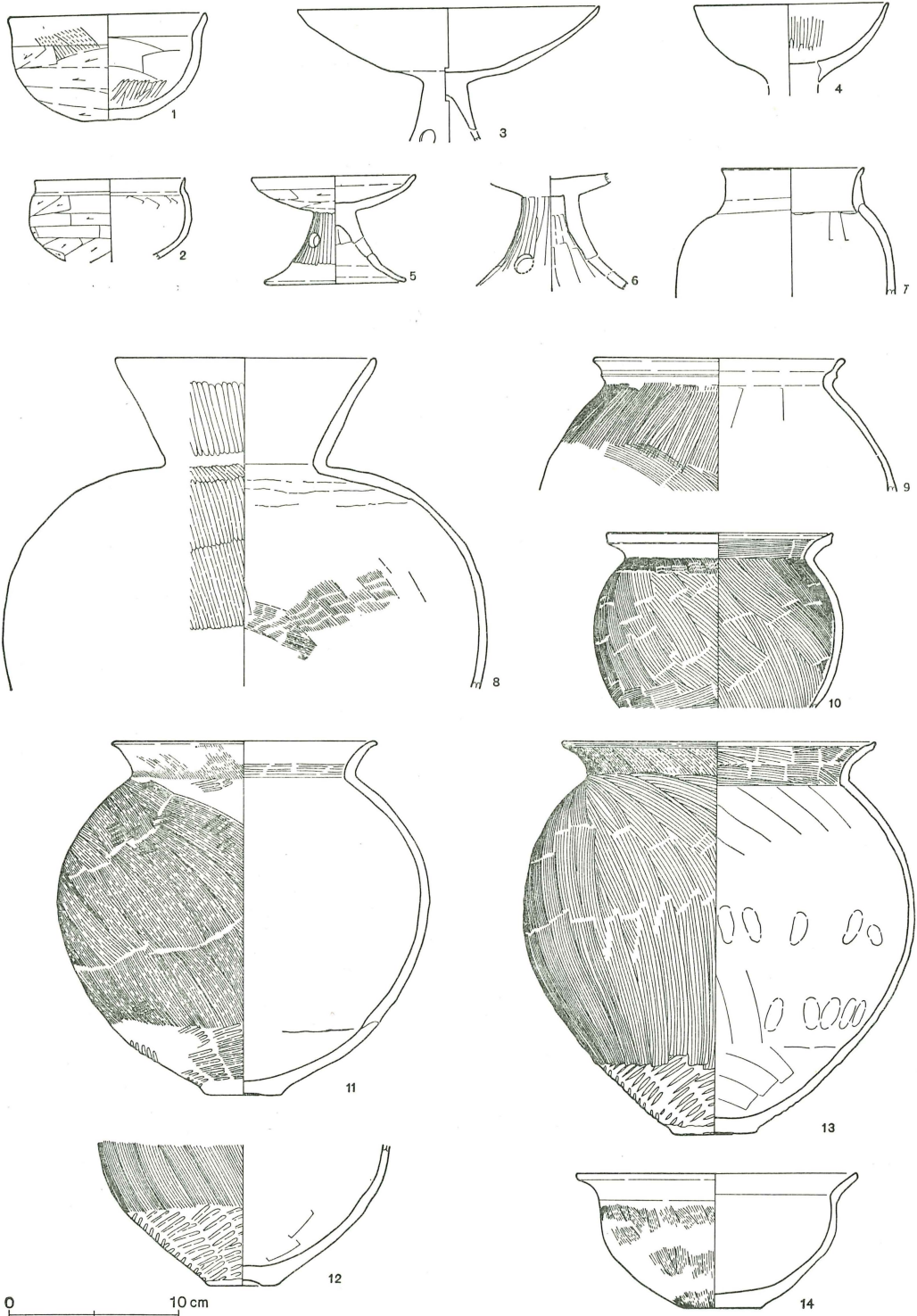
出土土器は点数にして約200片を数え、接合資料も多い。特に胴部に叩き目を施す甕（11～13）が注目される。何れも胴部下位に顕著に残るが、11は胴部上位のハケ目の下に観察される。



第234図 24号住居跡

24号住居跡出土遺物（第235図）

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師壺	1	11.8	3.2	6.4	BCDEF	赤褐色 2	体部外面ハケ目後窺削り後ナデ。口縁部横ナデ。	№.20、24、34、185。2/30。
壺	2	(9.0)		(5.3)	BCE	黄褐色 2	体部外面窺削り。口縁部横ナデ。	№.29。1/40。
高環	3	(18.2)		(7.9)	BC	橙褐色 2	坏部内面窺磨き。	№.38、150。2/30。磨滅著しい。
高環	4	11.7		(4.7)	BCDE	橙褐色 2	坏部内面窺磨き。	№.70、123、124、127。 坏部ほぼ完。磨滅著しい。
器台	5	(10.4)		(4.6)	ABCDEF	赤褐色 2	坏部外面窺削り後ナデ。脚部外面窺磨き。透し孔3ヶ所。口縁部横ナデ。	№.150。器受部2/50。脚部1/2 全体1/20。
高環	6			(7.0)	BCDEF	淡褐色	脚部外面窺磨き。透し孔3ヶ所。	№.131。1/30。
小型壺	7	(8.4)		(7.7)	B	赤褐色 2	口縁部横ナデ。胴部外面ナデ、内面窺ナデ。	№.10。1/20。



第235图 24号住居跡出土遺物

川越田

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調		手 法 の 特 徴	出 土 位 置 ・ 残 存 率
		口径	底径	器高		焼 成			
壺	8	(15.7)		(19.8)	B C D E F	褐色 1	口頸部・胴部外面上位縦篋磨き、内面ハケ目後ナデ。	№129。1/3。	
S字甕	9	(14.9)		8.0	A B C D E	灰褐色 2	胴部外面ハケ目、内面篋ナデ。口縁部横ナデ、内面下位にハケ目若干残る。	№73、96、98、174、176、181、196。2/5。	
小型甕	10	13.6		(10.5)	B F (少) 5mm 小石(多) A C D	暗褐色 1	胴部内外面・口縁部内面下位ハケ目。口縁部内面上位、外面横ナデ。	№76、172。口縁部3/5。頸部外面ハケ目後ナデ。	
甕	11	(15.6)	5.5	21.25	B D ・ 砂粒	茶褐色 1	胴部外面中位以上叩き目後ハケ整形、下位叩き目。口縁部ハケ目後横ナデ。	№124、146、156、157、158、159、160。2/5。	
甕	12		4.2	(8.5)	B C D E F	橙褐色 2	胴部外面ハケ目、下位叩き目。内面篋ナデ。	№110、121、173。2/3。	
甕	13	18.9	5.0	23.6	A B C F ・ 小石 粒	褐色 1	胴部外面下位叩き目。口縁部内面ハケ目、外面横ナデ。	№108、112、128、139、140、149、187、198、195、191。4/5。	
鉢	14	17.0	4.6		B C D E	赤褐色 2	胴部外面ハケ目後ナデ。口縁部横ナデ。底部外面篋削り。	№46、72。2/3。	

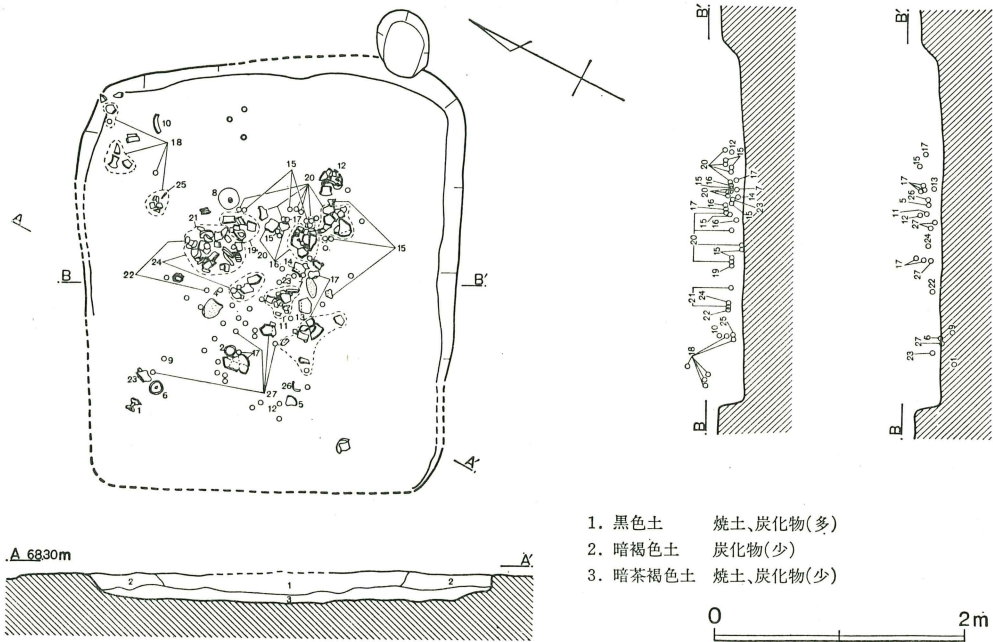
25号住居跡 (第236図)

調査区東部の11E・11F区に位置し、4・5・23・26号土壇と重複するがその何れよりも古い。プランが極めて不鮮明であったためにサブトレンチを設け確認に努めたが、西壁部は検出できなかった。南北長3.18m、東西長3.5m前後の方形プランの住居跡と推定され、床面までの深さは20cmを測る。床面は軟かく一定しない。主軸方位N-67°-E。炉跡・ピットは検出されなかった。

遺物は住居中央部に集中するが、床面より浮いて検出されたものが殆どである。器種としては甕が最も多く、破片の接合関係も顕著に認められる。特筆すべき遺物として、胴部外面のハケ目の下に叩き目痕を残す甕(18)があげられる。なお、本住居跡直上に位置する4・5号土壇の出土遺物は、本住居跡出土土器と接合関係にあり、レベルも一致するため、本住居跡に属するものとして取扱った。

25号住居跡出土遺物 (第237・238図)

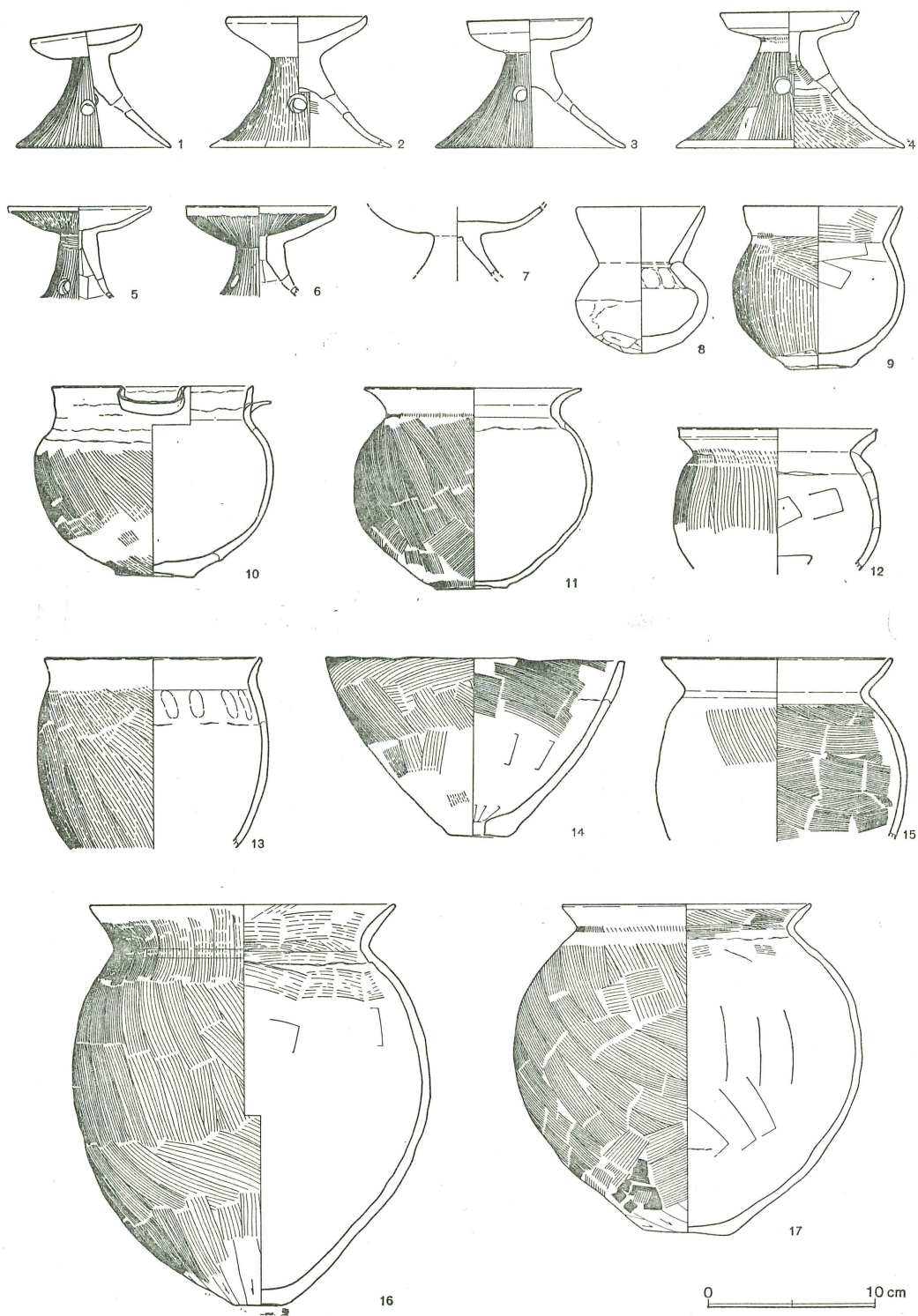
器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調		手 法 の 特 徴	出 土 位 置 ・ 残 存 率
		口径	底径	器高		焼 成			
土器 師台	1	6.7	9.4	7.1	A B C F	灰褐色 2	4孔を有す。脚部外面篋磨き。他は調整不明瞭だが、器面は平滑な仕上げ。	№134。4/5。器肉褐色。	
器台	2	8.5		(8.0)	5mm 大片岩粒 (多) A B C D	褐色 3	4孔を有す。脚部外面篋磨き、内面上位ハケ目。他は調整不明瞭。	№88。2/5。	
器台	3	7.6	11.6	7.8	C (多) B (少) A	灰色 1	4孔と思われる(残存3孔)。脚部外面篋磨き。他は調整不明瞭。器面平滑。	覆土、土拡4 覆土。土拡29 №30。3/4。器肉褐色。	
器台	4	8.5	(13.9)	8.3	A B C D E ・ 1 mm 大片岩粒	褐色 2	3孔を有す。脚部ハケ目の後、外面篋磨き。口縁~器受部及び裾部横ナデ。	土拡4 №18。3/5。	
器台	5	8.6		(5.6)	B (少) A C D F	褐色 2	3孔と思われる。脚部外面ハケ目後脚部上位・器受部篋磨き。接合部横ナデ。	№150。3/5。	
器台	6	9.2		5.5	A B C F	褐色 1	3孔と思われる。脚部外面、器受部篋磨き。口唇部横ナデ。脚部内面篋ナデ。	№135。3/5。	
高 環	7			(4.2)	A B C F	橙褐色 4	脚部内面篋ナデか。全体に磨減が著しく調整不明瞭。	№51。2/5。器肉灰色。	



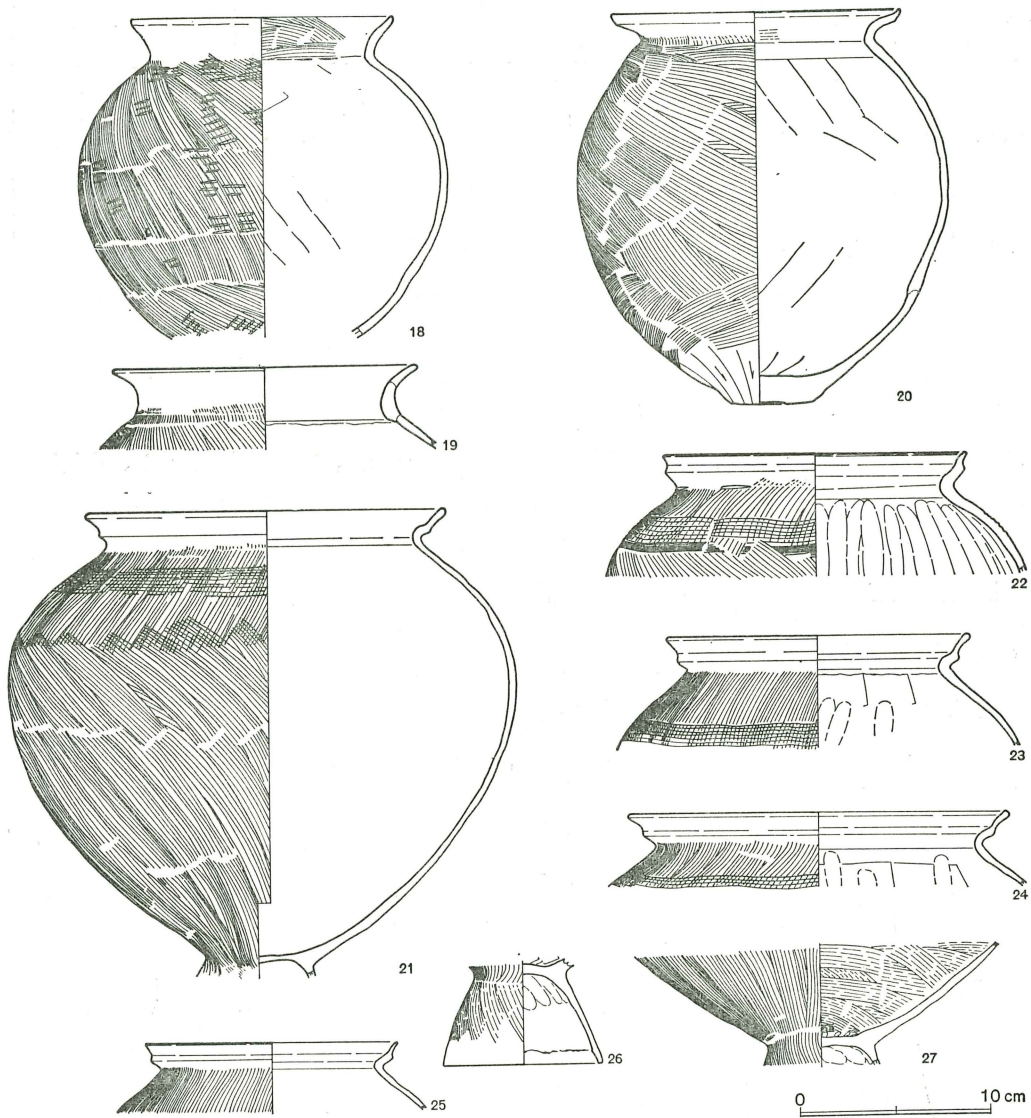
- 1. 黒色土 焼土、炭化物(多)
- 2. 暗褐色土 炭化物(少)
- 3. 暗茶褐色土 焼土、炭化物(少)

第236図 25号住居跡

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
罎	8	(7.8)		8.9	ABC F	褐色 2	口縁部横ナデと思われる。体部ナデ、内面上位指ナデ。底部外面篋削り。	Na141。4/50
鉢	9	(9.7)	3.8	9.9	A (多) B C F	褐色 3	口縁及び胴外面ハケ目後ナデ。外面下位及び底部ナデ。内面篋ナデ及びナデ。	土拡5 Na5、土拡4 Na16。2/50。口縁部1/50
片口鉢	10	12.2	4.8	11.5	ABC D F・2mm大小石。	褐色 2	胴外面ハケ目後下位はナデ。口縁及び胴内面ナデ。底部篋削り、中央はナデ。	Na71。4/50。口縁部に接合痕、粘土ナデツケ痕有り。
鉢	11	13.3	4.4	12.2	ABC D F	淡褐色 3	胴部外面ハケ目、内面ナデ及び篋ナデ。口縁部横ナデ。底部磨滅により不明瞭。	Na231、26。2/50。内面茶褐色。
鉢	12	(12.1)		(8.7)	B (多) F (少) A C・片岩粒子	褐色 1	胴部外面ハケ目の後口縁部横ナデ、胴部外面下位はナデ。内面篋ナデ。	Na52。1/50。器内・内面赤褐色。
鉢	13	(13.2)		(11.6)	B (少) C D E F 8mm大小石粒	褐色 2	胴部外面ハケ目の後ナデ、内面ナデ。上位指押え。口縁部ナデ。	Na70。1/50
鉢型甔	14	18.2	3.5	10.9	ABC F	橙褐色 3	胴部上半ハケ目。外面下半ハケ目後ナデ。内面下半篋ナデ。	土拡4 Na15。完存。
小型甔	15	14.1		11.2	B (少) C D・片岩粒子	橙褐色 3	口縁部横ナデ。胴部内面ハケ目、外面ハケ目及びナデ。磨滅により不明瞭。	Na13、16、19、28、43、58、145。土拡4 Na12。2/50
甔	16	18.6	2.9	24.3	F (少) A B C D E・片岩粒子	褐色 1	口縁、胴部外面ハケ目、下位は篋削り残す。口縁・胴部内面木口調整。	Na15、41、42、46。4/50。内面下半黒色。
甔	17	15.2	5.1	20.2	A C F (少) D 1mm大小石(多)	茶褐色 2	口縁内面、胴外面ハケ目(下位は粗)後、口縁横ナデ。底部篋削り。内面擦痕有。	Na41、59、61、79、158他。土拡32覆土。4/50。内面黒色。
甔	18	(14.0)		17.2	E (少) C、緻密。	橙褐色 1	胴部叩き後ハケ目。口縁部横ナデ、内面ハケ目。胴部内面篋ナデ。	Na7、土拡4 Na14、土拡5 Na2、3、7、8。2/50
甔	19	(16.4)		(4.4)	ABC F・片岩粒・2mm大小石	褐色 1	胴部外面ハケ目の後、口縁部横ナデ。胴部内面ナデ。	覆土、土拡4 Na12。口縁部2/50



第237图 25号住居跡出土遺物(1)



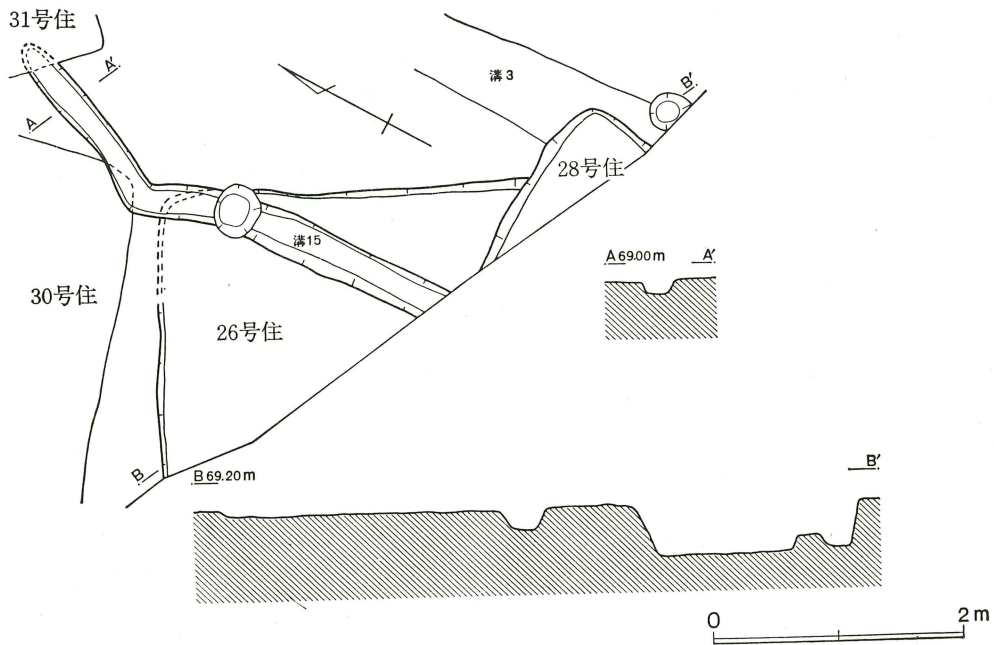
第238図 25号住居跡出土遺物(2)

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
甗	20	(15.5)	4.4	21.2	AC・2mm大小石・片岩粒子	褐色 2	胴外面ハケ目、下位ナデ。口縁横ナデ。底部周辺篋削り。内面下位暗褐色。	No.13、14、21、22他。土拵4 No.12。 ⁴ / ₅ 。内面擦痕有。
S字甗	21	18.9		25.0	ABC F	淡褐色 1	口縁部横ナデ。胴部外面斜・縦・横位ハケ目。胴部内面篋ナデ。	土拵4 No.1、No.11。 ² / ₅ 。台部欠失。
S字甗	22	16.2		(6.6)	ABCDEF	褐色 1	胴部外面斜位・縦位・横位ハケ目、内指ナデ。口縁部横ナデ。	No.109、土拵4 No.1。口縁部 ⁴ / ₅ 。器肉中央灰色。
S字甗	23	16.2		5.9	ABCDF	淡褐色 1	胴部外面縦位・横位ハケ目、内面指頭痕及び篋ナデ。口縁部横ナデ。	No.136、143。口縁部 ² / ₅ 。器肉黒色。

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調		手 法 の 特 徴	出 土 位 置 ・ 残 存 率
		口径	底径	器高		焼 成			
S字甕	24	(20.2)		(3.9)	BD (少) AC 1mm大小石粒子	淡褐色 1		口縁部横ナデ。胴部外面縦位・横位ハケ目。内面篋ナデ及び指頭痕。	覆土、土抔4 №1、13。口縁部 ¹ / ₄ 。器肉黒色。
S字甕	25	(13.5)		(3.7)	F (少) ACD ・片岩粒子	褐色 3		口縁部横ナデ。胴部外面縦位ハケ目。内面磨滅により不明瞭。	土抔4 №14。口縁部 ² / ₅ 。器肉灰色。
台付甕	26		4.9	(5.5)	片岩粒・D(多) E	褐色 2		脚台部外面ハケ目の後、内外面ナデ。内面に折り返し有り。	№152。脚台部 ³ / ₅ 。器肉黒色。
台付甕	27			(5.6)	C(多) ABD F	淡褐色 2		外面ハケ目。胴部内面ハケ目後ナデ。脚部内面指頭痕。	№74、87、137、他。胴部下半 ² / ₅ 。器肉黒色。

26号住居跡 (第239図)

調査区西域の9N区に位置し、調査区域外にかかる。28号住居跡、15号溝跡と重複し、本住居跡の方が古い。北壁2.2m、東壁3mが残存するが全体の規模は明らかにし得ない。確認面から床面までの深さは北壁で5cmと非常に浅い。主軸方位はN-61°-Eを指す。床面はほぼ平坦である。出土遺物は殆どなく、所属時期は不明である。



第239図 26・28号 住居跡, 15号溝跡

27号住居跡 (第185図)

7N区に位置し、1号住居跡及び13号溝跡と重複するが、本住居跡が古い。特に1号住居跡によ

り大半が破壊され、北壁と東壁の一部の検出に留まった。北壁2.3m、東壁0.7mが残存し、床面までの深さは16cmを測る。

出土遺物としては少量の土師器甕片があるだけで時期は明確にできない。

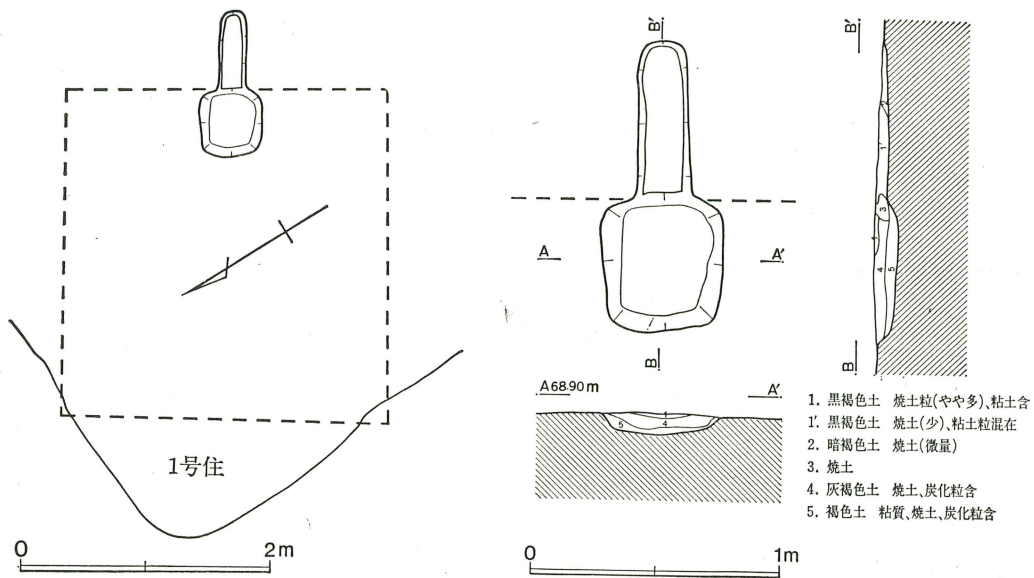
28号住居跡（第239図）

9 N区に位置するが、住居跡の大半が調査区外にかかるため規模等の詳細は明らかにできない。北壁1.8m、東壁0.6mが残存し、床面までの深さは40cmを測る。重複関係は26号住居跡よりも新しく、3号溝跡よりも古い。出土遺物は少量の土師器甕片があるのみで、時期は不明である。

29号住居跡（第240図）

調査区西域の7 N区に位置する。1号住居跡の直上にあり、1号住居跡確認面でカマドが検出されたが、床面は明瞭に把握されなかった。規模・形態も不明とせざるを得ない。

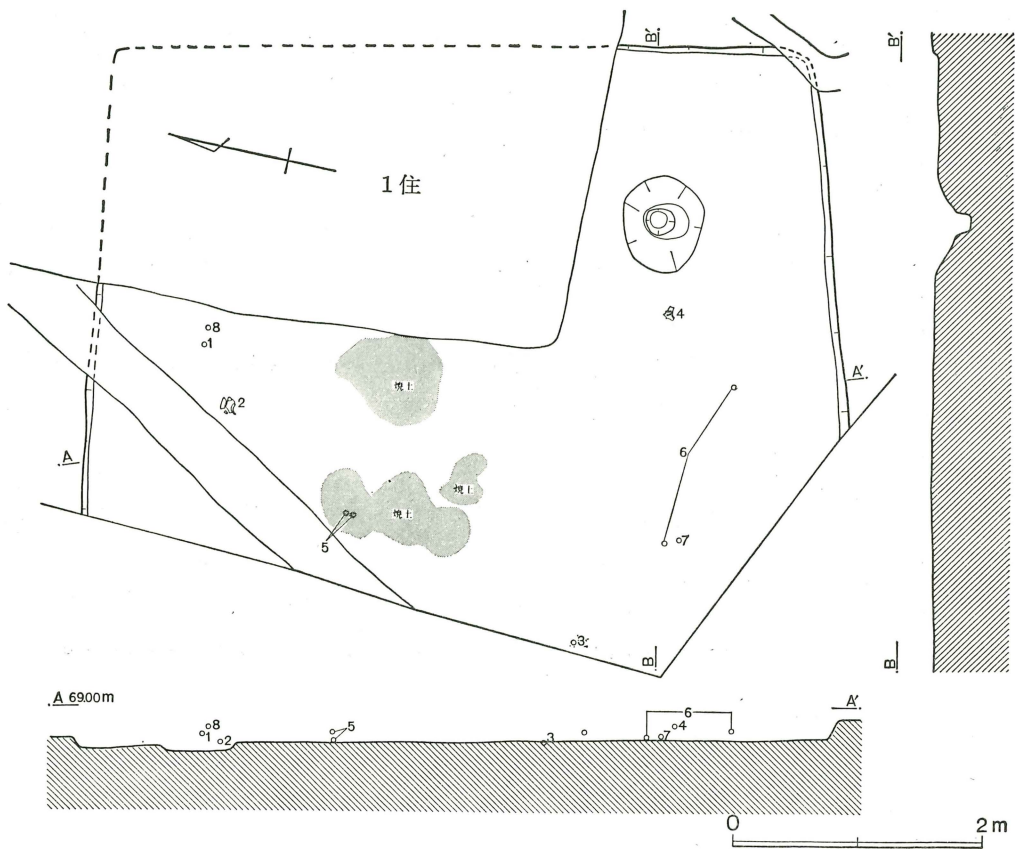
カマドは燃焼部掘り方と煙道部が確認された。煙道部は幅20cmで60cm延び、燃焼部掘り方は方形を呈し約7cm掘り込まれる。カマド内の出土遺物はないため、時期は明らかにできない。



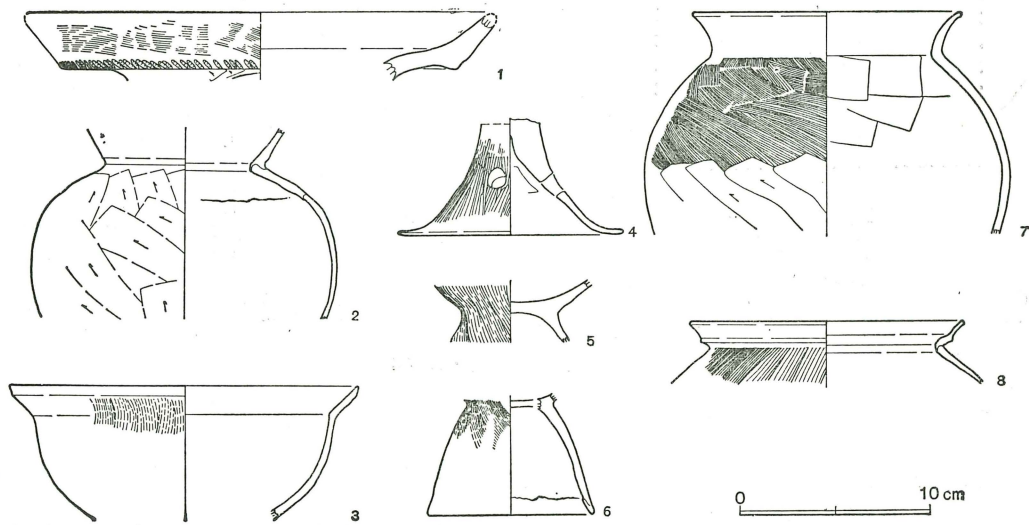
第240図 29号住居跡・カマド

30号住居跡（第241図）

8—O区。調査区南西端に位置する。溝14、15号跡と重複関係をもつ。北壁から東壁部にかけては、1号住居跡により切り込まれる。西壁は調査区外である。主軸方位は、N—16°—Wを指す。



第241図 30号住居跡



第242図 30号住居跡出土遺物

規模は、南北6.24m、東西5.11m+ α 、深さは確認面から17cmを測る。平面プランは、方形を呈し、床面は、平坦であり住居跡中央部に焼土ブロックが認められる。住居跡南東部分からピットが検出された。床面で長径70cm、底面径13cm、深さ28cmを測る。

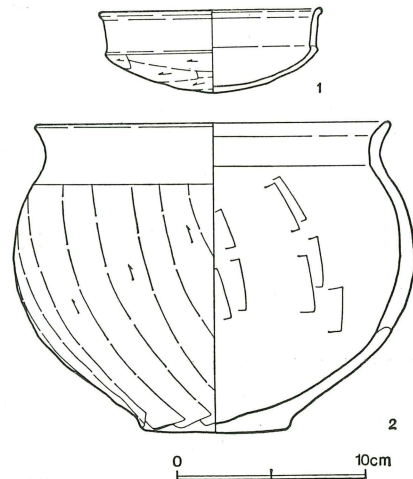
出土遺物は、1の有段口縁壺や8のS字甕、5、6の台付甕台部は床面上から検出された。

30号住居跡出土遺物（第242図）

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師壺	1	(25.0)		(3.5)	ABCD	橙褐色 2	口縁部外面ハケ目後横ナデ、下端に櫛 歯状工具による刺突文。頸部篋ナデ。	№.2。口縁部 $1/5$ 。
小型壺	2			(10.3)	ABCDF	橙褐色 1	口縁部横ナデ。胴部外面篋削りの後、 ナデ。	№.5。 $1/4$ 。
鉢	3	(14.6)		(7.2)	ABCDF	橙褐色 1	胴部外面ハケ目の後、ナデ。口縁部横 ナデ。	№.14。 $1/5$ 。
高坏	4		(11.0)	(5.4)	ABCDE	橙褐色 1	3孔と思われる。外面篋磨き、上位横 ナデ。内面上位篋ナデ。	№.26。脚部 $1/2$ 。
台付甕	5			(3.3)	ABCDF	褐色 1	外面ハケ目後、ナデ。脚台部内面ナ デ。	№.7、10。 $3/5$ 。
台付甕	6		(8.8)	(6.5)	ABCDF	淡橙褐 色1	脚部上位ハケ目後、ナデ。内面に折り 返しをもつ。	№.21、25。脚台部 $1/4$ 。
甕	7	(24.2)		(12.0)	ABCDEF	褐色 3	胴部外面上位ハケ目、下位篋削り。内 面上位篋ナデ。口縁部横ナデ。	№.22。胴部上半 $1/4$ 。内面黒 色
甕	8	(14.6)		(3.5)	ABCDF	淡褐色 1	胴部外面ハケ目。口縁部横ナデ。	№.1。口縁部 $1/4$ 。

31号住居跡（第185図）

8N区に位置し、1号住居跡によって切られる。住居跡南側コーナー部分のみ検出された。規模は、南壁1.15m、西壁1.15mを残存させ、深さ32cmを測る。床面は、平坦でローム土を基盤とし1号住居跡に比しややレベルを高くする。覆土は、上面に焼土粒子を混在させる。出土遺物は、床面直上から図示した1の坏が検出された。



31号住居跡出土遺物（第243図）

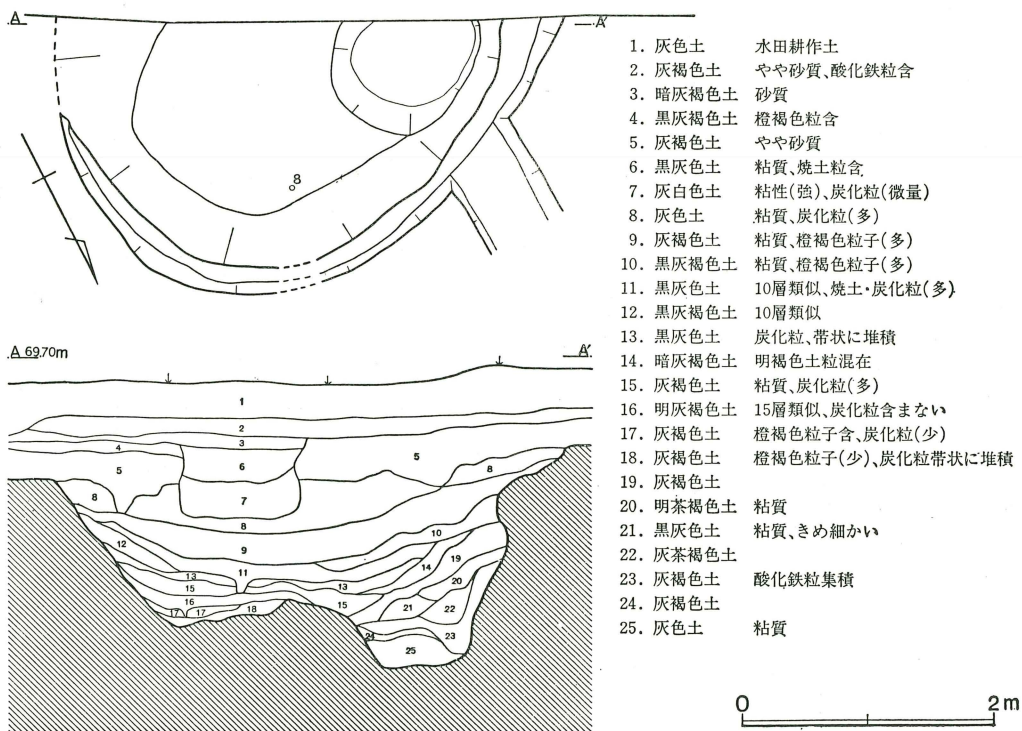
1は、土師器坏。口径11.6cm、器高4.4cmを測る。口縁部横ナデ、体部外面篋削りの後ナデ。胎土はABCDFを含み橙褐色を呈す。焼成良好。 $3/4$ 残存。2は、土師器鉢。推定口径

18.4cm、器高15.7cmを測る。胎土はABCDEFを含み橙褐色を呈す。焼成良好。 $1/4$ 残存。

第243図 31号住居跡出土遺物

1号井戸跡 (第244図)

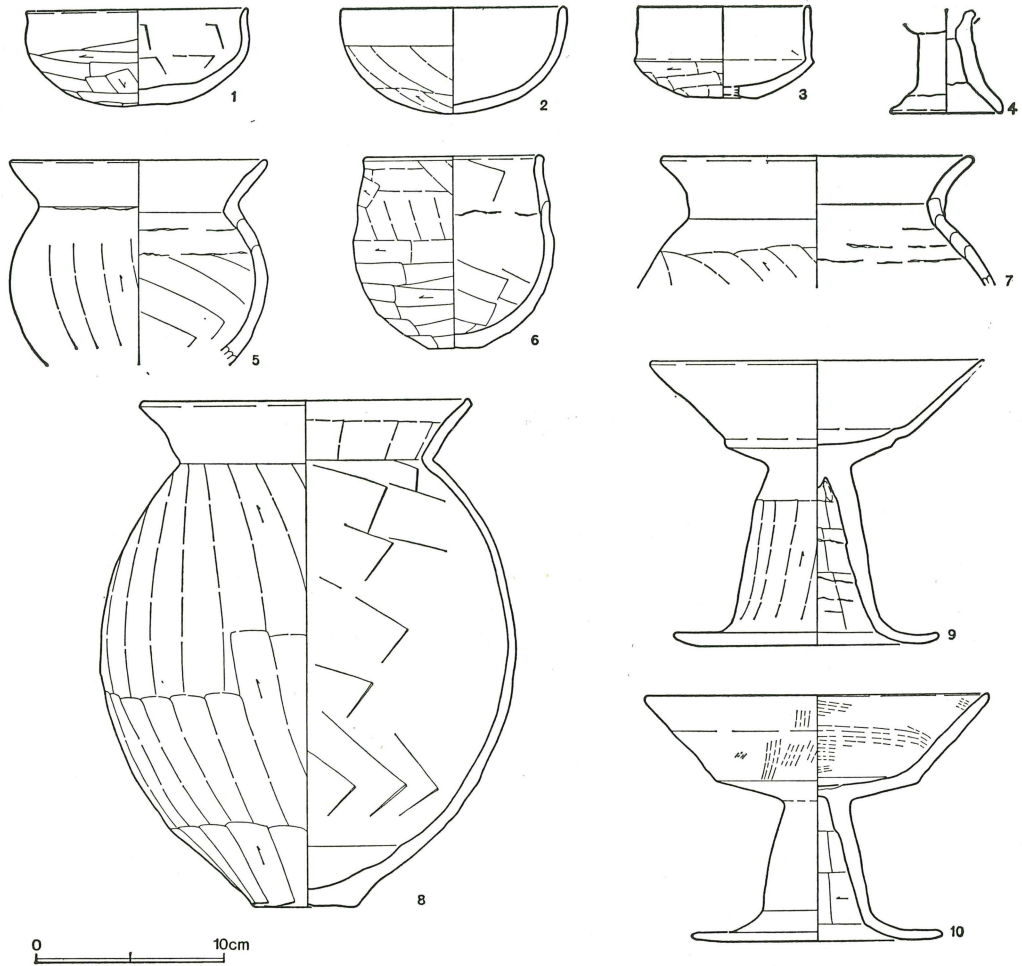
12H・I区。調査区中央南壁に位置する。本跡は、北東半分を検出し南西部分は調査区外である。覆土上面には袋状を呈す土壌が切り込み重複関係が認められる。規模は、上面で径4.15m、底は二面存在し、西側の深く掘り込まれた底で深さ1.8m、幅55cm、やや浅い東側の底は深さ1.10m、幅90cmを測る。出土遺物は、図示1の平底気味の土師器坏、3の口縁部やや内傾し直立する模倣坏、8の胴部球形状を呈す甕等が検出された。覆土は自然堆積の様相を示す。本跡の住居跡群とも時期的に一致し和泉から鬼高期にかけて使用されたと考えられる。



第244図 1号井戸跡

1号井戸跡出土遺物 (第245図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師坏	1	11.7	2.5	5.2	BCDE	茶褐色 1	口縁部横ナデ。体部外面篋削り、内面篋ナデ後ナデ。平滑。	覆土。1/8。
坏	2	11.9		5.6	ABCDE	橙褐色 2	体部外面篋削り後ナデか磨減著しく不明瞭、内面ナデ。口縁部横ナデ。	覆土。3/4。
坏	3	9.0	3.8	4.9	BDE	茶褐色 1	底・体部外面篋削り後ナデ、内面ナデ。口縁部横ナデ。底部はくぼむ。	覆土。2/8。



第245図 1号井戸跡出土遺物

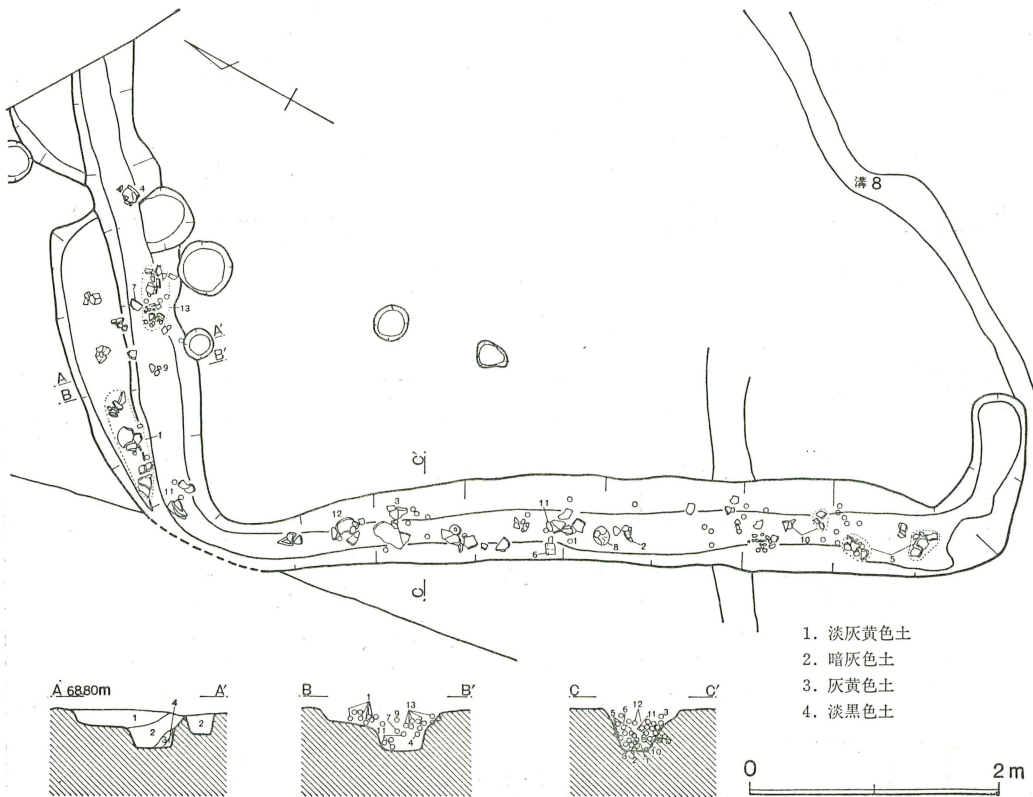
器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調		手 法 の 特 徴	出 土 位 置 ・ 残 存 率
		口径	底径	器高		焼 成			
高 环	4		5.5	(2.7)	A B C D E	褐 色 2	脚部外面ナデ、一部篋削り。内面上位未調整、下位ナデ。	覆土。脚部 ² / ₃ 。ミニチュアの 高环と思われる。	
小型壺	5	(13.5)		(11.0)	A B C D E	橙褐色 2	胴部外面篋削り後ナデ、内面篋ナデ上位後ナデ。口縁部横ナデ。磨減著しい。	覆土。 ³ / ₁₀ 。内面褐色。	
小型甗	6	(9.2)	2.8	10.3	A B C D E	茶褐色 2	底・体部外面篋削り上位後ナデ、内面篋ナデ。口唇部指ナデ。	覆土。 ² / ₁₀ 。	
甗	7	16.4		(7.0)	A B (多) C D E	淡褐色 2	胴部外面篋削り後ナデ、内面ナデ。口縁部横ナデ。	覆土。口縁部 ² / ₃ 。	
甗	8	17.5	5.3	27.3	A B C D F ・ 砂粒	淡褐色 1	胴部外面篋削り下位以外は後ナデ、内面篋ナデ下位指ナデ。口縁部横ナデ。	N.58。覆土下層。ほぼ完。	
高 环	9	18.8	14.2	15.3	A B C D E F	茶褐色 2	柱状部外面篋削り後ナデ、内面篋削り。环・裾部横ナデ。接合部外面ナデ。	覆土。 ⁴ / ₁₀ 。	
高 环	10	18.4	13.5	16.3	A (少) B C D E	褐 色 1	环部ハケ目後ナデ。柱状部外面ナデ、内面篋削り。口縁・裾部横ナデ。	覆土。 ⁴ / ₁₀ 。环部内面中央剥落。	

溝状遺構

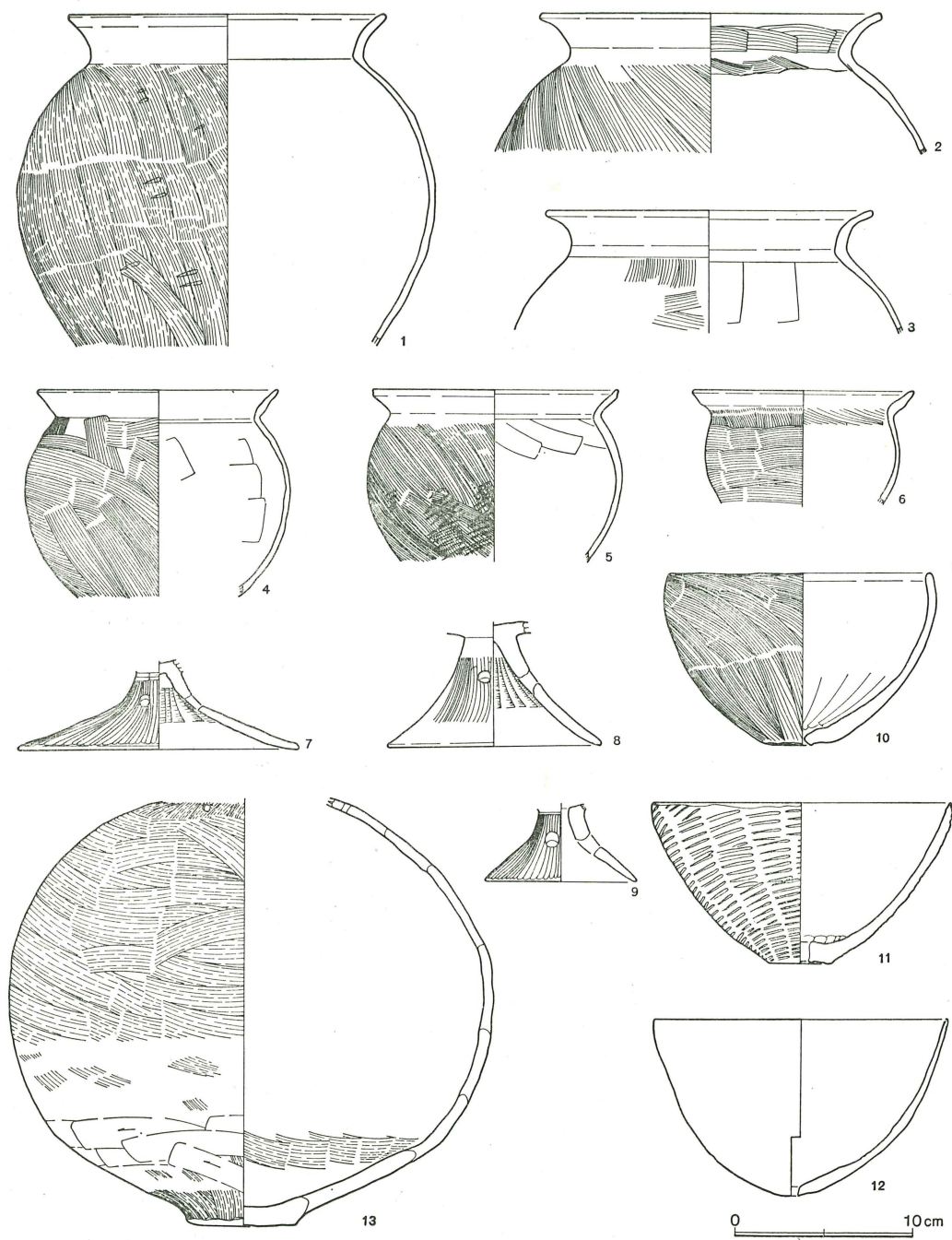
溝状遺構は、14条が検出された。このうち古墳時代のものとしては、4条である。7号溝跡は鉤の手状に溝が廻り五領期の遺物を多量に出土する。11号溝跡は、調査区東端の自然堤防裾部に存在し鬼高Ⅰ期の遺物を出土する。また、5、16号溝跡は、その規模・形態において、特殊遺構の可能性が考えられる。古墳時代以降の溝としては、調査区西側に3、13~15号溝跡が検出されている。この他、1、2号溝跡は、現在の水田面方向とほぼ一致し水田遺構に伴う水路及び畦の可能性がある。

7号溝跡 (第246図)

8 G区から10 G区にかけて位置し、鉤の手状に検出された。本跡は北側調査区外に伸び、18号住居跡と重複関係にあり、ここで直角に曲がり南東に直線的に伸び8号溝と近接し再び直角に短かく曲がる。規模は、南北4.10m + α 、東西7.00mを測る。深さはほぼ一定し確認面から34cm。出土遺物は、刷け目を施す甕や図示5の平行叩きの後刷け目を施す甕、図示11は全面平行叩き調整による鉢型甕で溝跡西側コーナー部の底面付近より検出された。いずれも五領期に比定され溝跡全域にわたり遺物が検出された。方形周溝墓の可能性もあるが確証は得られなかった。



第246図 7号溝跡



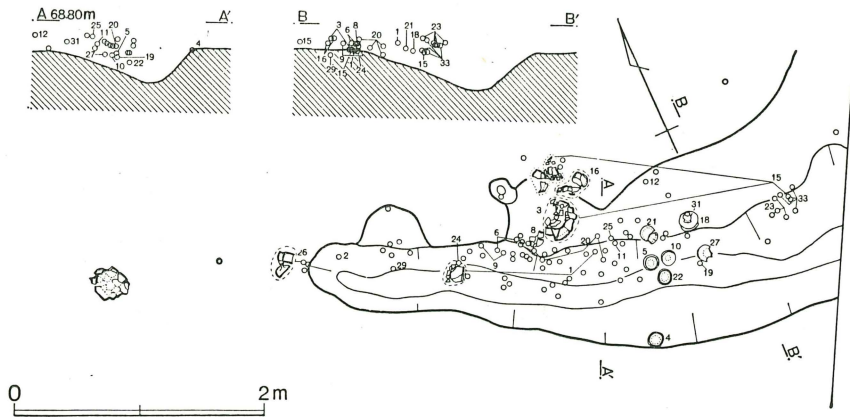
第247图 7号溝跡出土遺物

7号溝跡出土遺物（第247図）

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調 焼 成	手 法 の 特 徴	出 土 位 置 ・ 残 存 率
		口径	底径	器高				
土師甕	1	18.4		(19.5)	A C D E F	褐色 2	胴部外面叩き後ハケ目。口縁部横ナデ。	No.49、80、81、82、83、87 ² / ₅ 。
甕	2	19.6		(8.1)	A C D E F	橙褐色 1	胴部外面・口縁部内面下位ハケ目。口縁部内面上位・外面横ナデ。	No.41。口縁部 ¹ / ₃ 。
甕	3	13.8		(7.1)	A C E ・ 小石粒	橙褐色 3	胴部外面ハケ目、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	No.65。口縁部 ¹ / ₄ 。
甕	4	13.9		(12.1)	A B C D E F	茶褐色 2	胴部外面ハケ目、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	No.101。 ¹ / ₃ 。
甕	5	(14.1)		(10.0)	A B C D E F	褐色 2	胴部外面中位まで叩き後全面にハケ目。内面上位篋削りか。口縁部横ナデ。	No.3、4、11。 ¹ / ₂ 。
甕	6	12.8		(6.6)	C D E F	茶褐色 1	胴部外面ハケ目。口縁部横ナデ、内面下位ハケ目。	No.48。 ¹ / ₃ 。
高 坏	7		(16.3)	(5.2)	B C D E F	暗褐色 1	脚部外面篋磨き。内面上位蜘蛛の巣状のハケ目。下位ナデ。透孔3孔。	No.92。 ¹ / ₃ 。
器 台	8		12.4	(7.2)	A B C D E F	橙褐色 1	胴部外面篋磨き。内面上位蜘蛛の巣状のハケ目。下位ナデ。透孔3孔。	No.45。脚部完存。
器 台	9		8.8	(4.5)	A B C D E F	褐色 2	脚部外面篋磨き。内面ナデ。透孔3孔。	No.85。脚部 ² / ₃ 。
甌	10	(15.2)		10.0	A C D E F	橙褐色 1	胴部外面ハケ目を下位を先に2段に施す。内面下位篋削り、上位ナデ。	No.18、21。 ¹ / ₂ 。
甌	11	(17.2)	(3.6)	9.3	A C D E F	茶褐色 3	胴部外面平行叩き目。内面ナデ。内面下位篋ナデ。	No.52、76、79、130。 ¹ / ₃ 。
甌	12	17.0		10.4	A C D E F	橙褐色 1	磨滅により不明瞭だが、ナデと思われる。	No.71、72。 ² / ₃ 。
壺	13		6.0	(24.8)	A D E F	赤褐色 1	胴部外面ハケ目後ナデ、下位のみ後篋削り後ナデ。内面下位ハケ目。	No.95、96、97、98、100。 ³ / ₄ 。 肩部に1箇所、孔あり。

11号溝跡（第248図）

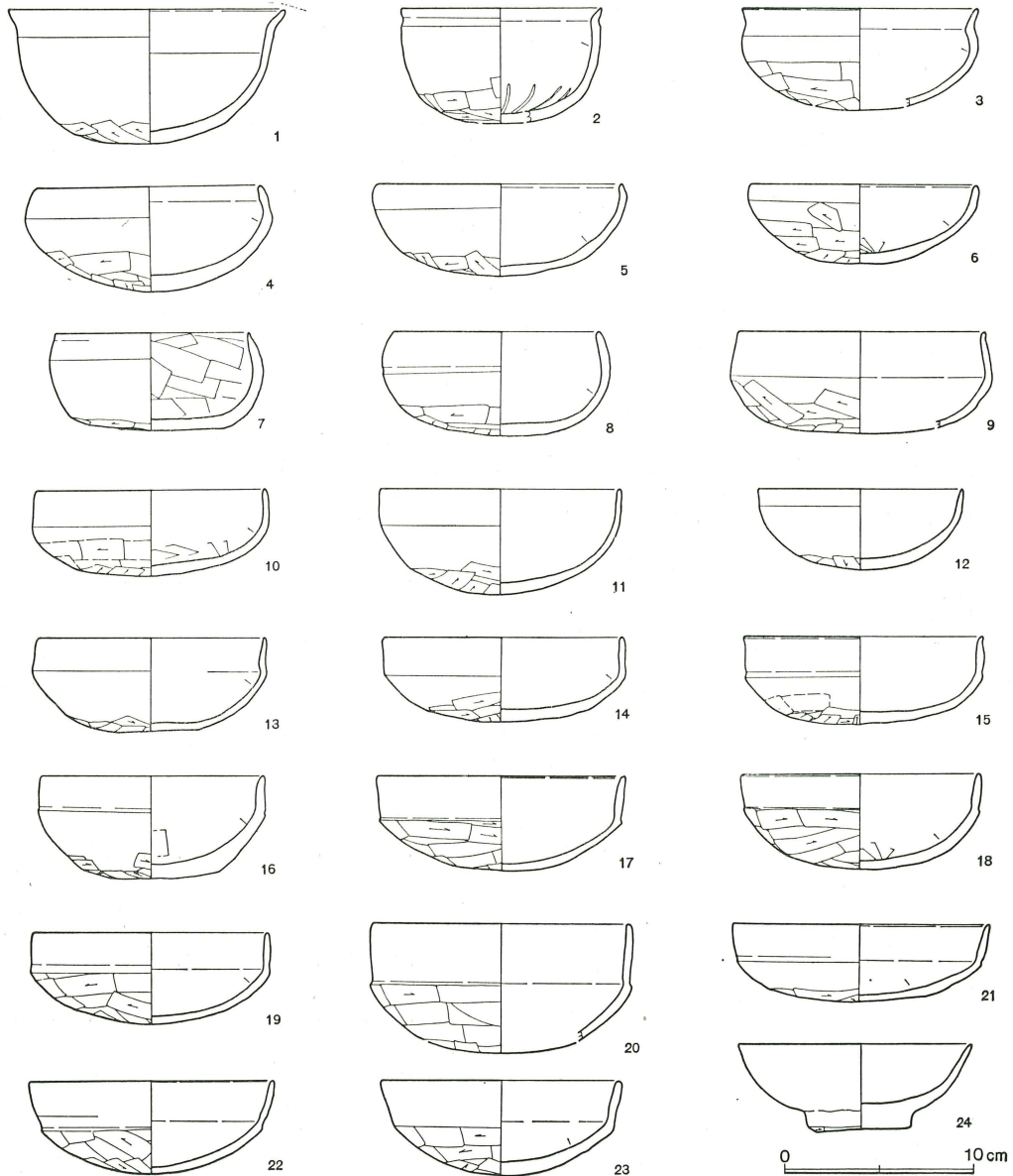
13D・E区に跨がり、調査区南東に位置する。溝の西端部分が検出され東側調査区外に伸びる。



第248図 11号溝跡

走向はN-67°-Wを指す。規模は、西端幅50cmを測り徐々に増幅させ調査区東壁で2mを越える。最深部は南側に偏り31cmを測る。出土遺物は、図示1~3の口縁部が外反する土師器碗や口縁部直立の模倣坏の他、胴部のひしゃげる壺32~34が検出されている。遺物はいずれも溝覆土および周辺で点在しており溝底部よりも北側肩部に集中して分布する。

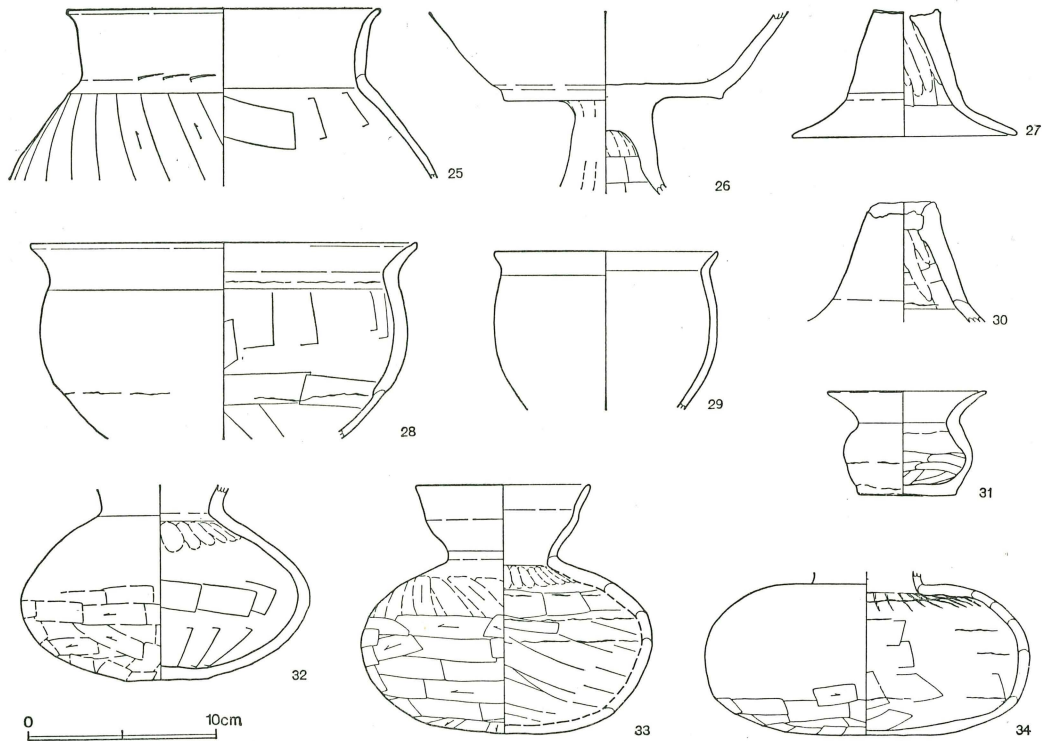
本跡が検出された地区は、自然堤防上の住居跡が重複関係をもつ地点とは画され肩部の土壌集中区より一段落ちた部分であり、比高差20cm前後である。



第249図 11号溝跡出土遺物(1)

11号溝跡出土遺物(第249・250図)

器種	番号	大きさ(cm)			胎 土	色 調		手 法 の 特 徴	出 土 位 置 ・ 残 存 率
		口径	底径	器高		焼 成			
土師環	1	(15.0)		7.3	ABC F	褐色	2	体部外面下位篋削り、上位未調整。口縁部横ナデ。	№57、100。1/2。
環	2	(10.9)		(6.2)	B(少)AC F、 比較的緻密。	褐色	1	体部外面下位篋削り、内面ナデ後暗文。口縁部横ナデ。	№114、砂利層下E-13区。1/2。
環	3	(12.6)		(5.5)	A C D F	褐色	3	体部外面下位篋削り、内面ナデ。口縁部横ナデ。	№54、56。2/5。
環	4	12.1		5.7	A C D F・3mm 大片岩粒子	褐色	3	体部外面下位篋削り、内面ナデ。口縁部横ナデ。磨滅著しい。	№15。完存。
環	5	13.3	5.0	9.7	D(少)ABC	褐色	2	体部外面下位篋削り、内面ナデ。口縁部横ナデ。	№17。完存。
環	6	12.4		4.3	A C D F・片岩 粒子	褐色	2	体部外面篋削り上位未調整、内面ナデ又は篋ナデ。口縁部弱い横ナデ。	覆土、№92、125。ほぼ完。
環	7	10.5	5.3	8.8	A B C D E F	褐色	2	底部外面篋削り。体部外面未調整、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	覆土。ほぼ完。形態に歪みあり。
環	8	11.2		5.7	A B C F	褐色	2	体部外面下位篋削り、内面ナデ。口縁部横ナデ。	覆土、№80。2/3。内面色調は淡褐色。
環	9	(13.4)		(5.5)	A B C F	褐色	2	体部外面篋削り、上位一部ナデ指頭痕あり。内面磨滅。口縁部横ナデ。	覆土、№93、95。1/3。
環	10	12.4		4.7	B(少)AC F、 片岩粒子。	褐色	2	体部外面篋削り後ナデ、上位未調整、内面篋ナデ又はナデ。口縁部横ナデ。	№18。完存。
環	11	(13.0)		5.8	A B C D E	褐色	4	体部外面下位篋削り。内面ナデ磨滅著しい。口縁部横ナデ。	№124。1/2。
環	12	(11.1)		4.4	A C F	褐色	3	体部外面下位篋削り。内面ナデ磨滅著しい。口縁部横ナデ。	№31。1/5。
環	13	(12.3)	(5.7)	5.1	A C F、緻密。	褐色	2	体部外面ナデ、底部外面篋削り、内面ナデ。口縁部横ナデ。	覆土。1/3。内面色調茶褐色。
環	14	13.1	8.9	4.6	C(少)A F、 緻密。	暗褐色	2	体部外面ナデ、底部外面篋削り、内面ナデ。口縁部横ナデ。	覆土。ほぼ完。器肉色調茶褐色。
環	15	(12.9)	9.1	4.7	A(少)B C F	褐色	4	体部外面篋削り、内面ナデ。磨滅著しい。口縁部横ナデ。	覆土、№53、156、28。4/5。
環	16	12.0	7.4	5.5	F(多)A B C D	褐色	2	体部外面下位篋削り、内面篋ナデ又はナデ。口縁部横ナデ。	覆土、№54、55。2/3。器肉色調茶褐色。
環	17	13.5		5.1	B(少)C F、 緻密。	橙褐色	3	体部外面篋削り、内面ナデか磨滅著しい。口縁部横ナデ。	覆土。ほぼ完。
環	18	13.0		5.2	F(多)A C D	橙褐色	2	体部外面篋削り、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	№21。完存。
環	19	12.6		5.0	A B C F	褐色	3	体部外面篋削り、内面ナデ。口縁部横ナデ。	№25。1/2。
環	20	(14.0)		(7.0)	A B C D F	褐色	3	体部外面篋削り、内面ナデ、両面とも磨滅著しい。口縁部横ナデ。	№36、59、83、89、126。1/2。
環	21	14.0		4.2	A B C F	橙褐色	2	体部外面下位篋削り、内面ナデ。縁口部横ナデ。	№19。ほぼ完。
環	22	13.2		5.0	C(多)B(少) A F	橙褐色	4	体部外面篋削り、内面ナデ。口縁部横ナデ。磨滅著しい。	№16。完存。
環	23	13.1		5.1	A B D F	褐色	3	体部外面篋削り、内面ナデ。口縁部横ナデ。	覆土、№5、7、10、11、12。4/5。
鉢	24	12.7	5.6	4.6	F(多)B(少) A C	褐色	2	底部外面篋削り。体部内外面ナデ。口縁部の調整は丁寧。	№100。ほぼ完。
壺	25	(16.5)		(9.2)	A B C D F	褐色	2	胴部外面篋削り、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	№37。1/3。器肉色調淡褐色。
高 環	26			(9.6)	F(多)A B C D	褐色	1	柱状部外面篋削り後ナデ、内面指ナデ後下位篋ナデ。坏部横ナデ及びナデ。	№115、116、117。3/5。内面磨滅。



第250図 11号溝跡出土遺物(2)

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調 焼 成	手 法 の 特 徴	出 土 位 置 ・ 残 存 率
		口径	底径	器高				
高 坏	27		11.9	(6.6)	CF (多) AB D	褐色 2	柱状部外面ナデ、内面篋ナデ後ナデ。 裾部横ナデ。	№22。脚部 $\frac{1}{5}$ 。
鉢	28	(20.8)		(10.5)	F (多) ACD 片岩粒子	褐色 2	胴部外面ナデ、内面篋ナデ。口縁部横 ナデ。	覆土。 $\frac{1}{3}$ 。器肉色調淡褐 色。
小型鉢	29	12.0		(8.5)	B (少) AC	褐色 3	胴部内外面ナデ。口縁部横ナデ。	№105。 $\frac{2}{5}$ 。
高 坏	30			(6.4)	AB C D F	褐色 3	柱状部外面ナデ、内面篋ナデ後、上位 指ナデ。裾部横ナデ。	覆土。脚部 $\frac{2}{5}$ 。器肉色調淡 褐色。
小型壺	31	8.5	5.3	5.6	AB C D F	褐色 2	底・胴部外面ナデ、内面下位棒状工具 ナデ上位指ナデ後ナデ。口縁部横ナデ。	№20。完存。
埴	32		4.5	(10.5)	AB C F	橙褐色 2	底・胴部外面下位篋削り後ナデ、内面 篋ナデ上位指ナデ。口縁部横ナデ。	覆土。 $\frac{2}{3}$ 。外底部は円環状 に盛り上がる。
埴	33	9.4	10.8	13.3	AC D F、比較 的緻密。	赤褐色 2	底・胴部外面篋削り後上位ナデ、内面 篋ナデ上位指ナデ。口縁部横ナデ。	№7、6、128、129。ほぼ 完。底部篋削り後磨滅。
埴	34		10.3	(8.7)	F (多) ACD	褐色 2	胴部外面下位篋削り、内面篋ナデ上位 しぼり痕あり。口縁部横ナデ。	覆土。胴部 $\frac{1}{2}$ 。

16号溝跡 (第251図)

7 L区を中心として、調査区北西側に位置する。溝は半円弧状に掘られ、周辺にはピット34基が確認された。規模は、径17.5m、幅22~30cm、深さ8cm前後を測り浅い。覆土は淡黒褐色土で多量の黄褐色土を混入させ微量の白色細砂粒および炭化物を含み粘性をもつ。これと近似した覆土をもつピットにはスクリントーンを貼り示した。ピットは径15~20cm前後で深さ38~50cmを測り、いずれも細長い。ミカド遺跡において円形特殊遺構が4基検出され、本跡と類似する。両者とも覆土は有機質土である点が注目され集落と密接な関係にあると考えられる。



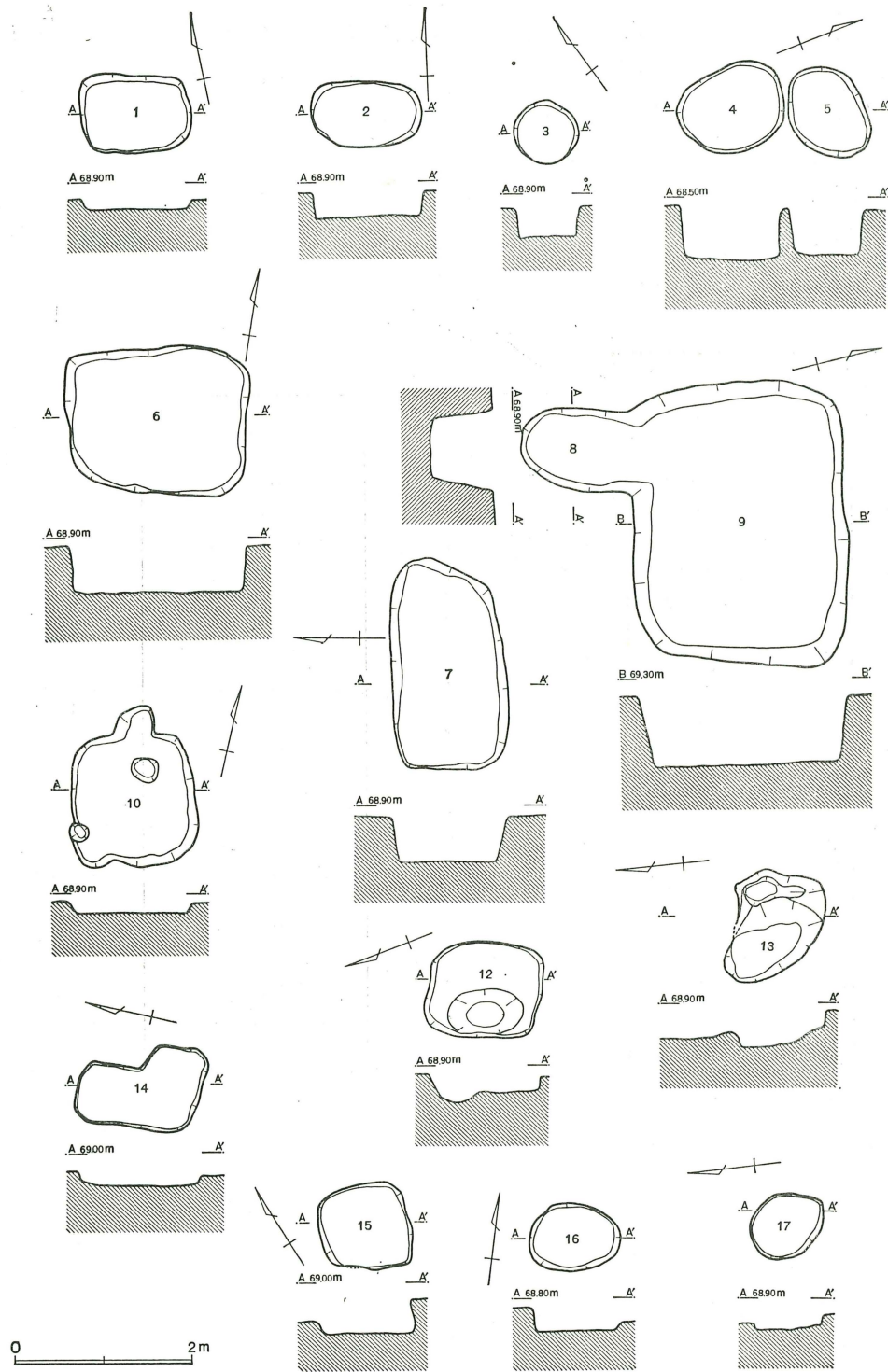
第251図 16号溝跡

土壙 (第252図～第254図)

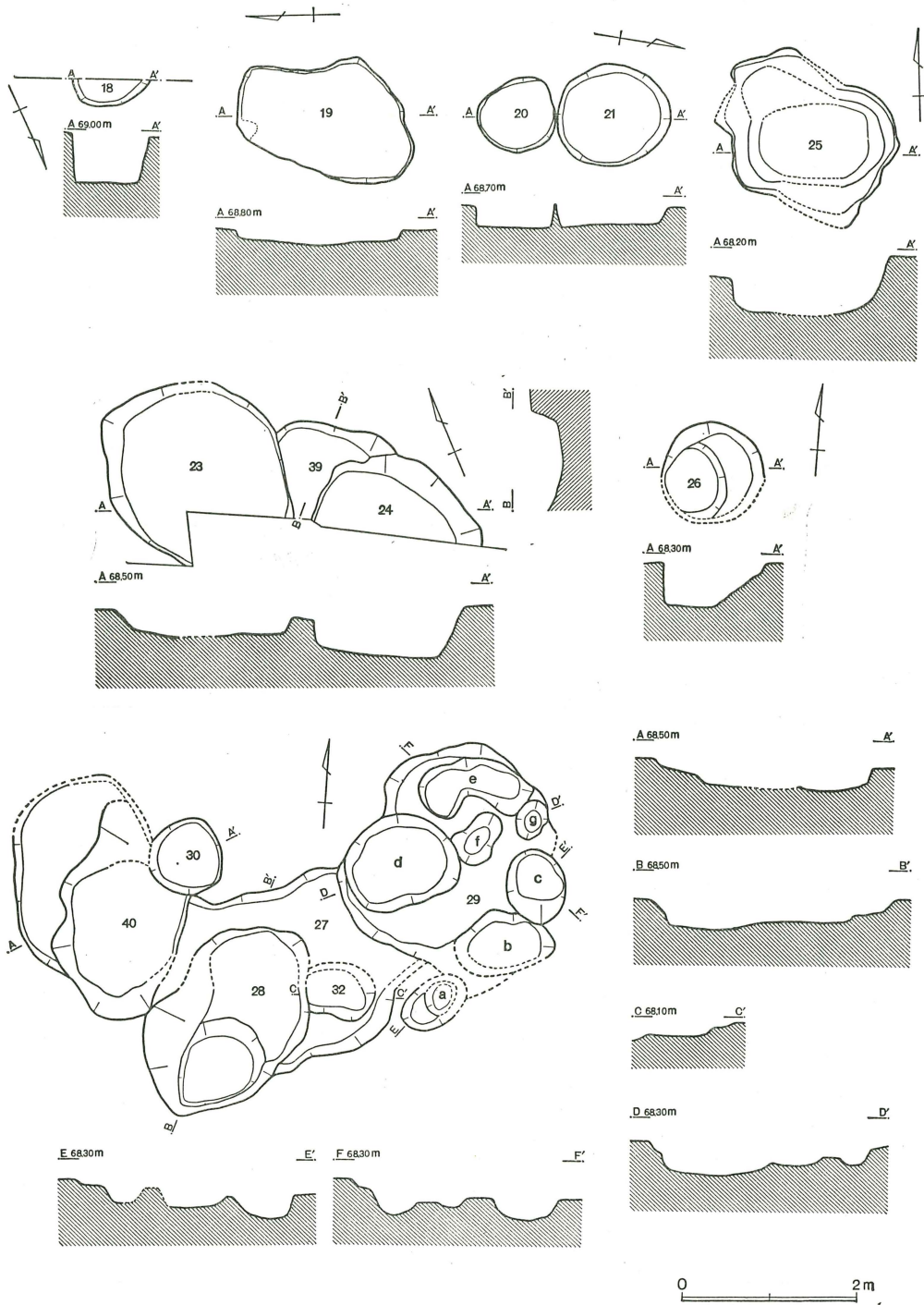
土壙は、調査区全体から検出されたが、住居跡が希薄になる東側にやや多く認められる。平面形態は円形、方形、隅丸長方形や不整形等様々である。これらのうち、4・5号土壙は25号住居跡と重複関係にあり、調査時に土壙出土として扱った遺物は住居跡の遺物と接合するため25号住居跡の遺物とする。23号土壙からは勾玉の上半が検出された。29号土壙は複雑に重複関係が認められa～Gに分かれるが全体が落ち込み状に窪む。39号土壙からは無蓋の短脚一段透し高坏が検出された。規模は、6、7、9号土壙がやや大きく掘り方も深くしっかりしている。浅く円形型を呈す土壙とは性格が異なると考えられる。

第4表 川越田遺跡土壙計測表

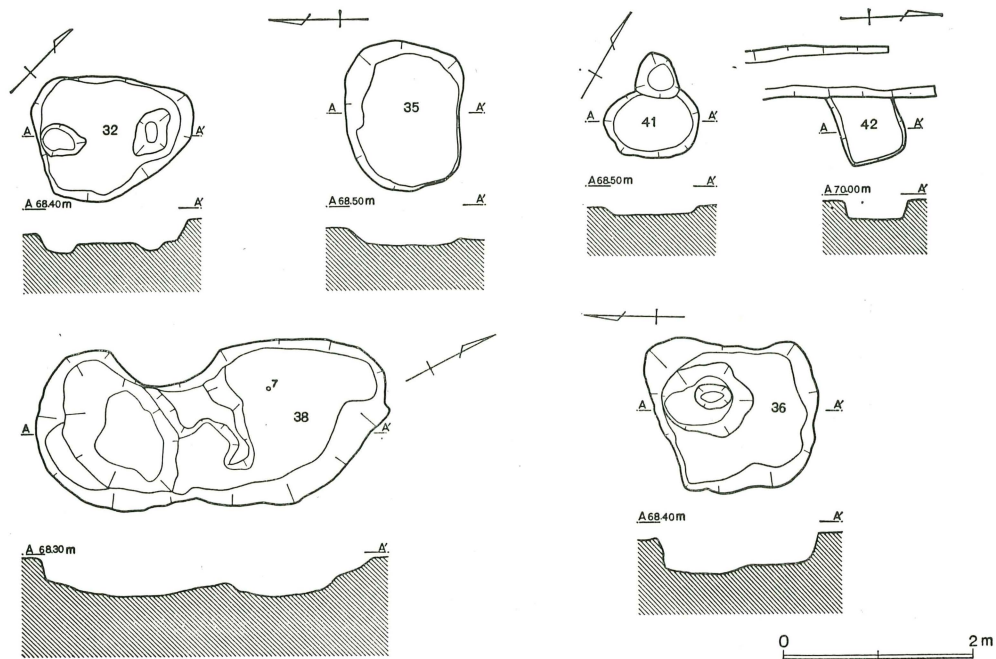
番号	長軸×短軸×深さ	長軸方位	番号	長軸×短軸×深さ	長軸方位
1	128 × 88 × 13	N-76°-W	22		
2	127 × 75 × 28	N-88°-W	23	250 × 200 × 32	N-38°-W
3	76 × 74 × 36	N-60°-W	24	186 × (94) × 60	N-59°-W
4	123 × 104 × 63	N-19°-E	25	224 × 188 × 68	N-31°-W
5	100 × 90 × 54	N-76°-E	26	120 × 116 × 52	N-88°-E
6	206 × 165 × 52	N-80°-E	27		
7	242 × 132 × 52	N-85°-E	28	248 × 144 × 36	N-31°-E
8	(140) × 94 × 70	N-18°-E	29		
9	324 × 244 × 76	N-77°-W	30	86 × 84 × 28	N-5°-W
10	152 × 140 × 10	N-22°-W	31		
11			32	173 × 134 × 34	N-33°-E
12	130 × 110 × 34	N-27°-E	33		
13	128 × 98 × 42	N-61°-W	34		
14	144 × 68 × 18	N-6°-W	35	160 × 122 × 20	N-70°-E
15	108 × 94 × 40	N-62°-W	36	208 × 192 × 27	N-32°-E
16	106 × 78 × 28	N-74°-E	37		
17	84 × 74 × 18	N-39°-W	38	380 × 168 × 50	N-24°-E
18	88 × (30) × 58	N-64°-W	39		
19	192 × 118 × 20	N-21°-E	40	284 × 168 × 32	N-12°-W
20	92 × 86 × 28	N-81°-W	41	102 × 76 × 11	N-61°-E
21	132 × 118 × 27	N-15°-W	42	70 × (69) × 22	



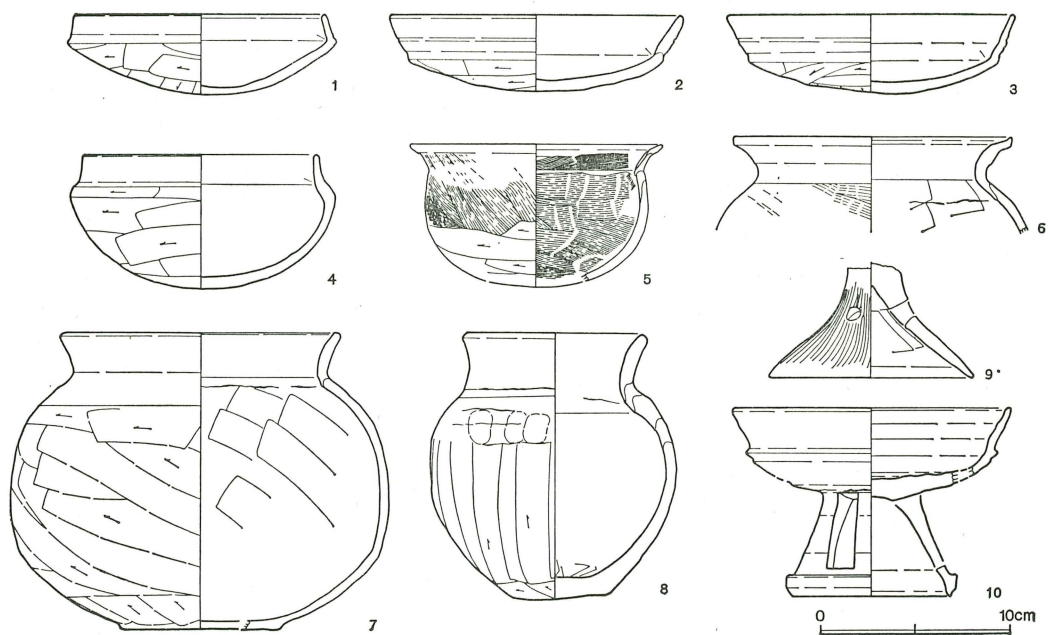
第252図 土坑(1)



第253図 土壇(2)



第254図 土坑(3)



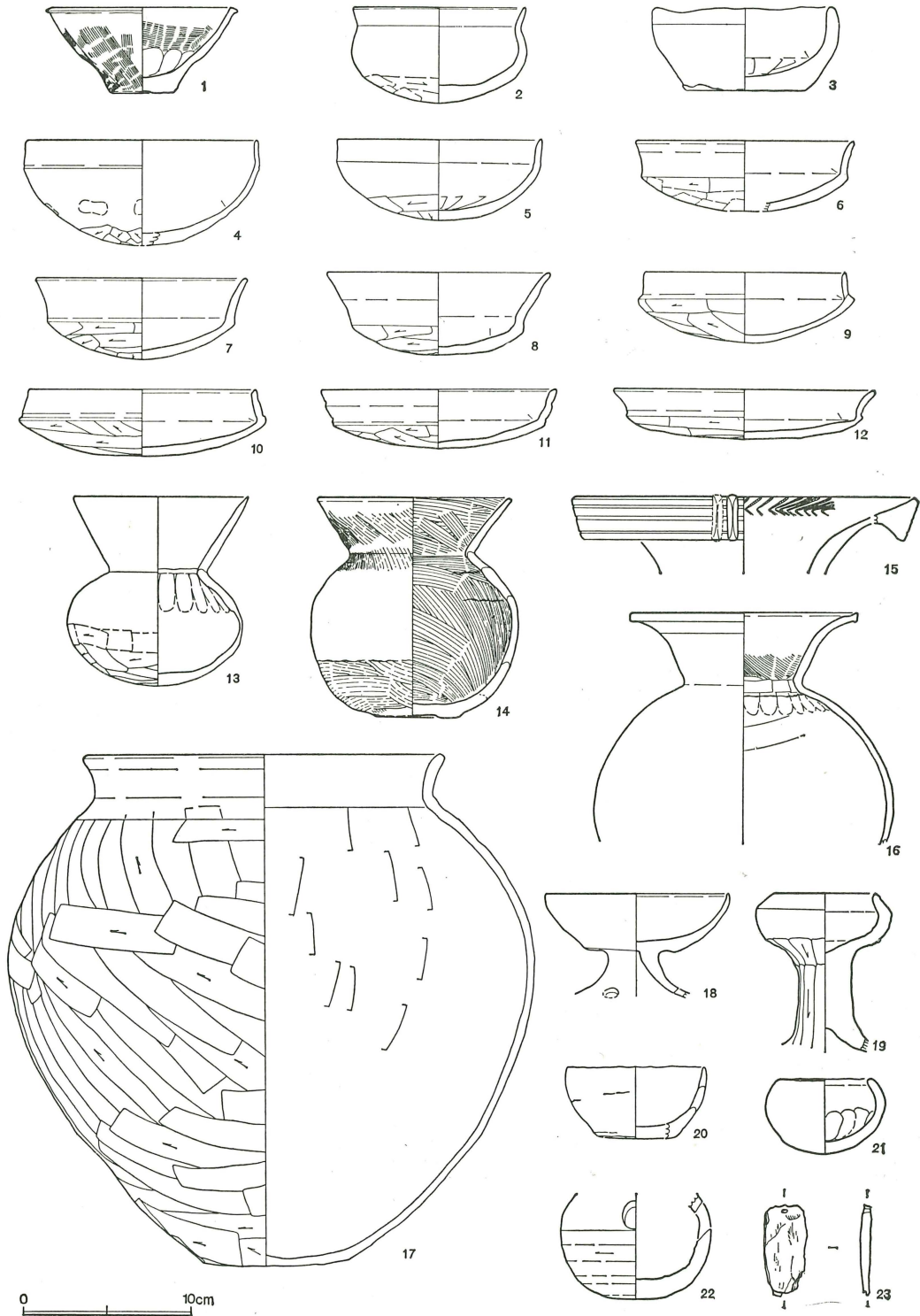
第255図 土坑出土遺物

土壌出土遺物 (第255図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調		手 法 の 特 徴	出 土 位 置 ・ 残 存 率
		口径	底径	器高		焼 成			
土師環	1	13.3		4.3	A B C F	茶褐色 1	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	土壙28覆土。土壙29No. 5。 4/5。	
環	2	(15.6)		4.1	A B C	茶褐色 1	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	土壙28覆土。土壙29No. 7。 2/5。	
環	3	15.2		4.2	A B C	赤褐色 1	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	土壙29No. 9、10、29。3/4。	
壺	4	12.4		7.2	A B C F	茶褐色 1	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	土壙28覆土。土壙29No. 6、 7。2/3。	
壺	5	(13.5)		(7.3)	A B C D F	橙褐色 2	胴部内外面ハケ目後ナデ、外面下位後 篋削り。	土壙29No. 17。1/4。	
甕	6	14.9		(5.1)	A B C D E F	茶褐色 1	胴部外面ハケ目後ナデ、内面篋ナデ。 口縁部横ナデ。	土壙29No. 16。土壙4覆土。	
壺	7	14.2	(8.2)	15.9	A B C D (少) F	橙褐色 1	胴部外面篋削り後ナデ、内面篋ナデ。 口縁部横ナデ。底部外面篋削り。	土壙38No. 15。3/4。	
壺	8	9.4	5.3	14.4	A B C D F	橙褐色 2	胴部外面下位篋削り、上位指頭痕。内 面篋ナデ。	土壙29No. 1。ほぼ完。	
器台	9		10.8	6.2	A B C D E F	橙褐色 1	脚部外面篋磨き、内面篋削り。裾部横 ナデ。3孔透し。	土壙29No. 2。2/3。	
須恵高環	10	(14.7)	(8.5)	(10.05)	D E F ・ 砂粒子	青灰色 1	短脚。三方透し。 底部はG-9G・第1トレンチ出土。	脚部土壙39覆土。坏部G- 9、F-11、H-10G。1/5。	

グリッド出土遺物 (第256図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調		手 法 の 特 徴	出 土 位 置 ・ 残 存 率
		口径	底径	器高		焼 成			
土師鉢	1	(10.8)	5.4	5.2	A B C D E	褐色 2	胴部外面・内面上位ハケ目後ナデ、下 位指ナデ。口縁部横ナデ。	F-10GNo. 3。	
鉢	2	10.4		5.8	A B C D E F	橙褐色 1	胴部外面下位篋削り、上位ナデ。口縁 部横ナデ。	G-12GNo. 9。4/5。	
鉢	3	5.5	7.0	5.1	A B C D E F	茶褐色 1	胴部外面ナデ、内面下位篋ナデ。底部 篋削り。口縁部横ナデ。	F-14・25G。ほぼ完。	
環	4	(13.9)		6.3	B (少) A C F	橙褐色 3	体部外面下位篋削り、上位ナデ。口縁 部横ナデ。	I-9GNo. 25、26。1/4。	
環	5	12.3		4.8	A B C D E F	茶褐色 1	体部外面下位篋削り、上位ナデ。内面 下位篋ナデ。口縁部横ナデ。	K-7GNo. 5。完存。	
環	6	(13.1)		(4.3)	A (多) B (少) C D E	橙褐色 3	体部外面篋削り後ナデ。口縁部横ナ デ。	F-10G。1/5。	
環	7	12.8		4.9	A B C E F	淡褐色 2	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	F-14G砂利層下。2/3。	
環	8	13.5		5.0	A F	赤褐色 1	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	F-13G砂利層上。ほぼ完。	
環	9	12.1		4.3	A B C	淡褐色 1	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	F-15G。2/3。	
環	10	13.6		4.0	A C D E	褐色 2	体部外面篋削り。口縁部横ナデ、下位 に沈線状工具痕。	F-10G。4/5。	
環	11	14.1		3.05	A (少) B C D E	褐色 2	体部外面篋削り。口縁部横ナデ、外面 中位、下位に沈線状工具痕。	F-10G。2/3。	



第256図 グリッド出土遺物

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調 焼 成	手 法 の 特 徴	出 土 位 置 ・ 残 存 率
		口径	底径	器高				
坏	12	(15.5)		3.0	B C D E	褐 色 2	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	F-10 G。2/3。口縁部1/5。 体部4/5。
埴	13	10.6		11.4	A B C E F	褐 色 2	体部外面下位篋削り後、上位ナデ。口 頸部内面下位指ナデ。	I-9 G No.46、71。ほぼ 完。
小型壺	14	11.4	5.0	13.2	A B C D E F	褐 色 2	口縁部内面・胴部内面ハケ目。胴部外 面下位・口縁部外面ハケ目後ナデ。	I-9 G No.21。ほぼ完。
壺	15	(20.4)		(2.6)	B C D E	橙褐色 2	口縁部外面 2 本一対の棒状浮文をもち 内面に齒櫛刺突文を綾杉状に施す。	表探。1/9。
壺	16	13.7		(13.9)	A B C F	橙褐色 1	口縁部横ナデ。口頸部内面上位ハケ目、 中位篋削り、下位指ナデ。内面篋ナデ。	I-9 G No. 17、18、19、 20。1/3。
甗	17	(22.0)	9.5	30.95	A B C D E F	赤褐色 2	胴部外面篋削り、内面篋ナデ。口縁部 横ナデ。	F-15 G。1/2。
高 坏	18	(11.05)		(8.3)	A B C D E ・ 粗 い砂粒	橙褐色 2	口縁部横ナデと思われる。調整不明。 3孔である。	F-10 G。3/5。
器 台	19	6.1		(9.5)	A B C D E F	橙褐色 3	柱状部篋削り。受部外面ナデ。口縁部 横ナデ。	J-10 G No. 2-A・B。3/5。
手捏ね	20	(8.3)	4.7	4.4	A B C F	赤褐色	体部内面ナデ。底部外面篋削り。	I-9 G No.58。3/5。
手捏ね	21	5.5		4.5	A C E F	褐 色 2	外面ナデ。内面下位指ナデ。	F-14 G 砂利層上。2/5。
須恵甗	22			(6.4)	D E F	青灰色 1	体部外面下位回転篋削り。ロクロナデ。	F-13 G 砂利層。2/5。
石 製 模造品	23	幅 2.6	厚さ 0.65	残長 5.5			器面は滑らか、縦方向の細かい磨痕が 見られる。上端中央に孔有り。	I-10 G。

Ⅸ 梅沢遺跡の調査

1. 遺跡の概観

梅沢遺跡は、児玉町大字高関字梅沢151-1他に所在し、川越田遺跡の南側100mの地点である。本跡は女堀川右岸の自然堤防上に位置し、標高約70mを測る。調査対象区は、水田・桑園として利用され、道路拡幅によって削平される500㎡でありA・B区に分かれる。

発掘調査は、昭和57年1月から3月にかけて実施された。水田の水位が最も低い冬期を選んで行なわれたが、今年は例年になく水位が高く、遺構確認面で水が湧き出し、住居跡の重複が激しく平面プランの確認もままならず調査は非常に困難を極めた。調査方法は、グリッド方式に基づき、全域を5×5mを単位とするグリッド網を被せた。川越田遺跡と同一のグリッド網による。

発掘調査により検出された遺構は、和泉期から鬼高期にかけてのものである。調査時において、平面的遺構の検出も困難を極め、出土遺物の集中範囲やカマドの検出によって住居跡26軒を数えたが、整理作業を通して、比較的遺存状態の良好であった1～5号住居跡および6・8・9・14・18号住居跡カマドの10軒は住居跡平面プランを調査区全域の遺物分布図に記載する。

2 遺構と出土遺物

A区は住居跡2軒・土壇1基が検出された。調査範囲は狭く、南側に1号住居跡、北側に2号住居跡が存在し近接した位置にある。いずれも西側コーナー部および西壁だけの検出で、東側調査区外に広がる。主軸方位はN-29°-Eを指し、方形プランを呈すると推測される。床面は平坦だが中央がやや落ち込み軟質である。住居跡南側を1号土壇によって切られる。2号住居跡はN-27°-Eを指し、方形プランを呈すると考えられる。床面は壁周辺に比べ、中央部がやや凹む。

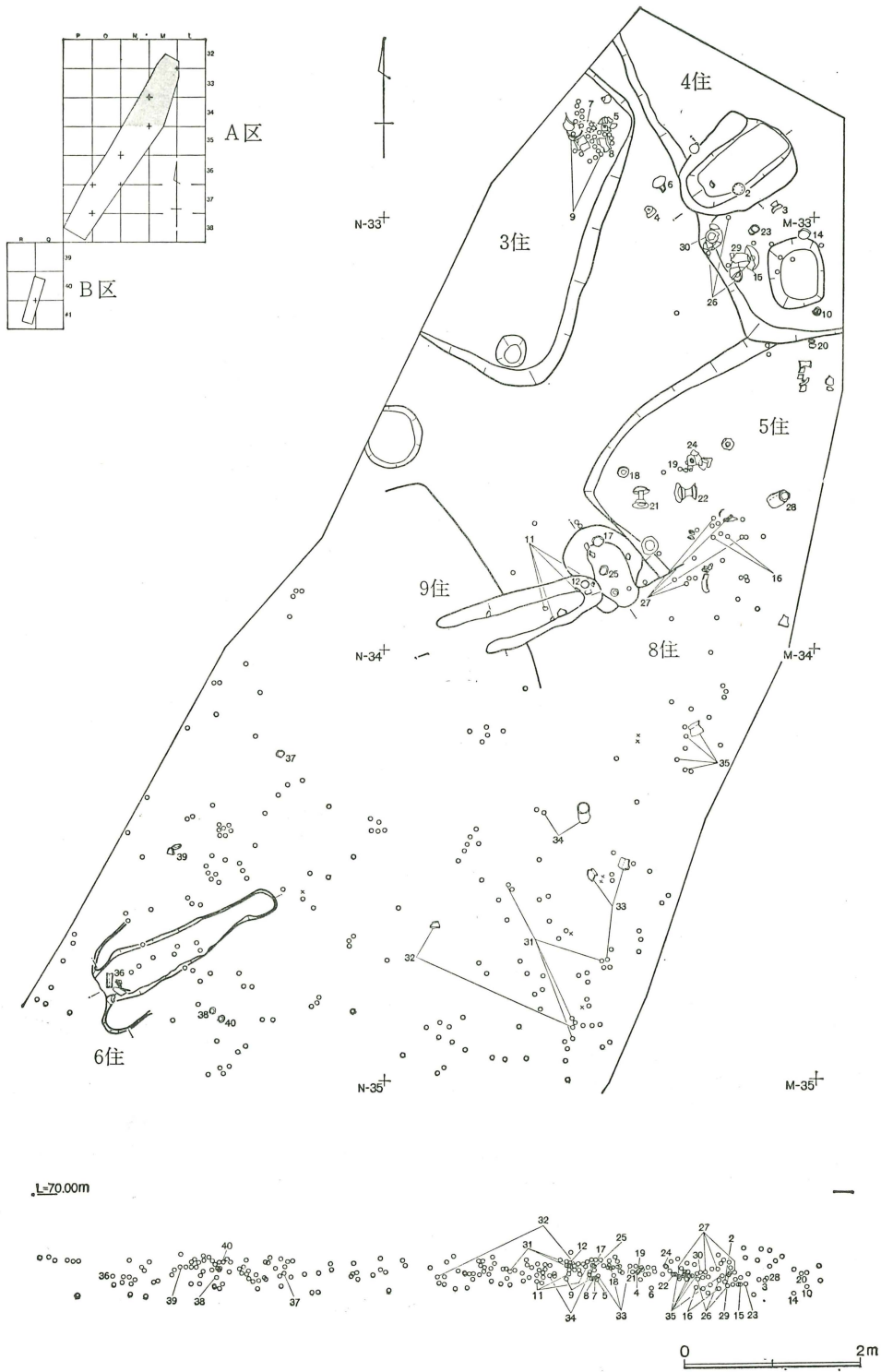
B区は調査区全域が黒褐色を呈し、時折り焼土・灰色粘土部分が認められ、カマドの存在が確認される。住居跡は重複関係が激しく、また調査区が狭いため、一軒単位の完全な検出はされなかった。明確に検出された遺構は、住居跡8軒・土壇1基に留まる。調査区北端にわずかに地山の黄褐色土が残存し、この地点で3・4・5号住居跡の検出が明確になされた。3号住居跡は東側半分が調査区内に位置する。N-30°-Eを指し、東西1.63m+ α 、南北3.62m、深さ13cm(南壁側)を測る。出土遺物は東壁コーナー部から集中して、5・7～9が検出された。高坏は短脚化傾向が見られ、甕は球形状を呈する。4号住居跡はカマドの構築された西壁を中心に検出され、北側調査区外に広がる。規模は東西4.07m+ α 、南北2.18m+ α 、深さ39cmを測る。カマドは主軸方位S-56°-Wを指し、西壁内に構築され、煙道は壁をほとんど切り込まない。舟底型を呈し、掘り方は先端が凹む。幅は47cm、深さ24cmを測る。袖部は粘土質ロームにより構築されるが、右袖に比べ左袖が30cmほど長い。カマド東側には、貯蔵穴が位置する。床面より深さ27cm、幅80cmを測り隅丸方形を呈する。出土遺物は、カマド内より2、貯蔵穴より15が検出され、他に3・4・6・10・

13・14等がある。5号住居跡は、北側を4号住居跡、南側を8号住居跡によって切られ、南東コーナー部を中心として検出された。床面はローム面を利用しているが軟質である。出土遺物は17～22および、24、27、28が検出され有段高坏・埴の他に籠目圧痕を胴部に残す鉢が検出された。

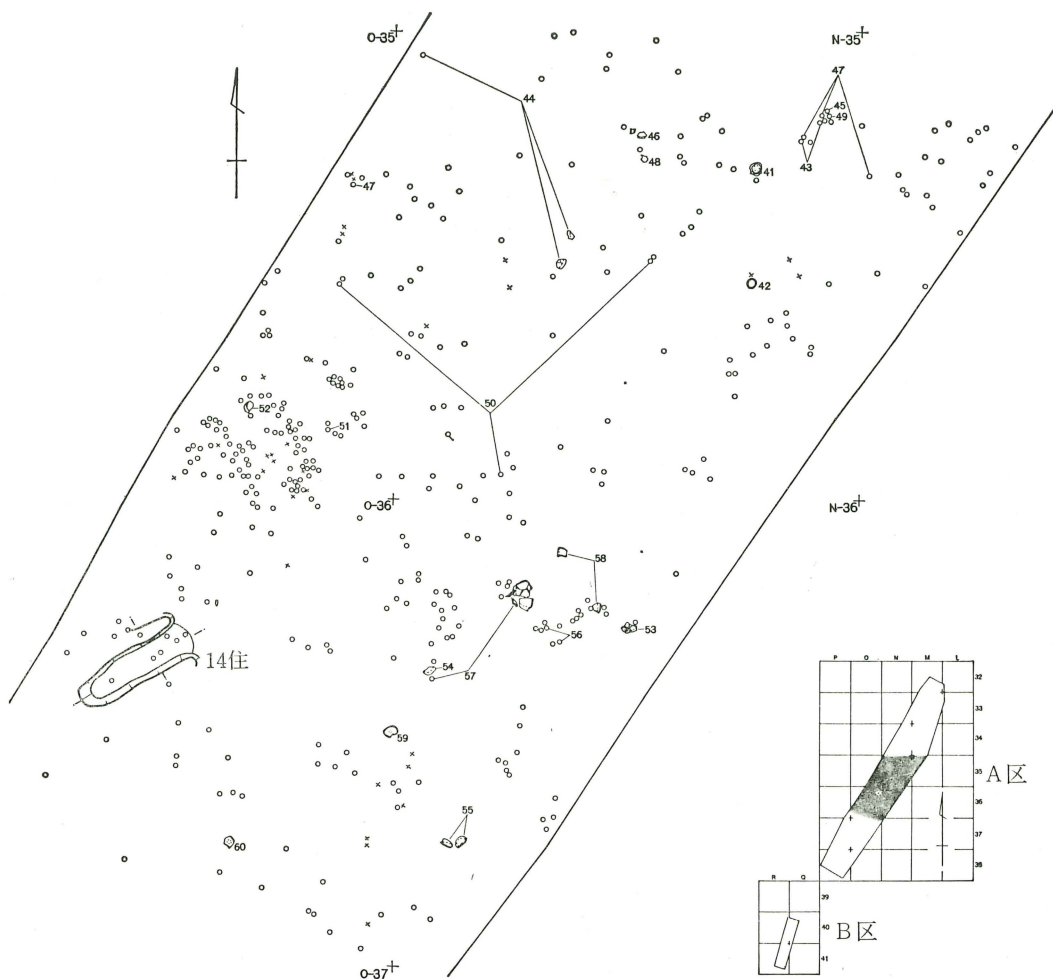
調査区において、住居跡平面プランの検出は不明確であるがカマドの検出が認められた。6号住居跡カマドは、N-34グリッドに位置する。主軸方位はN-62°-Eを指す。規模は、全長2.25m、焚口部幅26cm。袖部は粘土で構築されていた。底は舟底型を呈し、燃焼部幅40cm、深さ41cmを測る。煙道部は階段状に3段のテラスをもつ。出土遺物は、覆土中より図示36の長胴甕が検出された。8号住居跡カマドは、M-33グリッドに位置し9号住居跡カマドに一部切られる。主軸方位はN-34°-Wを指す。北壁外に95cm掘り込んで構築されている。底は舟底型を呈し燃焼部幅37cm、深さ22cmを測る。カマド覆土内より逆位の状態で胴部球形に脹らむ甕の破片が検出された。9号住居跡カマドは、M-33グリッド、8号住居跡カマドを切り込み西側に位置し、主軸方位はN-70°-Eを指す。住居跡北壁外に130cmほど掘り込んで構築される。規模は、燃焼部幅28cmと狭く深さ20cm、煙道部は上面で20～30cmを測り細長い。底は平坦で緩やかに立ち上がる。袖部は、右袖がほとんど検出されず左袖が壁から6.5cm張り出している。出土遺物は、図示11・12でいずれも模倣坏である。14号住居跡は、O-36グリッド中央で検出された。主軸はS-60°-Wを指す。規模は焚口部幅25cm、燃焼部幅27cm、深さ28cmを測り、舟底型を呈し煙道部にテラスをもって立ち上がる。煙道部先端から土製支脚が検出された。カマド袖部は、左袖は遺存状態が悪く不明瞭であるが、右袖は粘性の強いローム土で構築され、芯に甕が逆位の状態で検出された。18号住居跡は、P-37・38グリッドに位置し、主軸方位はS-45°-Wを指す。南壁外に1.57m掘り込み構築される。規模は、焚口部幅36cm、燃焼部幅49cm、深さ27cmを測り楕円形に一段掘り窪められる。煙道は長く緩やかに立ち上がる。

遺構として明確に認められるものは以上であるが、この他遺物の検出は調査区全域にわたり認められる。接合関係や遺物集中度から見ると、M-34グリッド南側に集中区が認められ、図示31～33が出土し鬼高Ⅱ期でも新しい要素をもつ模倣坏である。N-34グリッドは、37・38・40等の和泉期の遺物が認められる。N-36グリッドは、14号住居跡とは明確に分割され接合関係も集中して見られるが、出土遺物は、53～58とやや時間差をもつ。P-38グリッドは、南西コーナー部分に68・71が、中央東側部分に66・67・72・74が検出され、これらを切って18号住居跡が存在している。須恵器は、46の蓋、50の壘口縁部、61の長脚二段透かしの高坏が検出された。

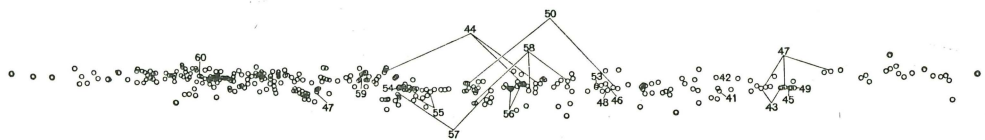
梅沢遺跡は、近接する後張遺跡・川越田遺跡に見られる和泉期から鬼高期にかけての集落跡である。細部の時期的変遷は遺跡ごと様相は異なるが、本跡は、特に鬼高Ⅰ期は非常に少なくむしろ和泉Ⅱ、鬼高Ⅱ期新段階の順で多く認められ、該期の居住域として考えられる。巨視的にとらえると古墳時代を通して、女堀川右岸の自然堤防上を占地する集落の動態をとらえる上で3遺跡を同一視して分析する必要がある。



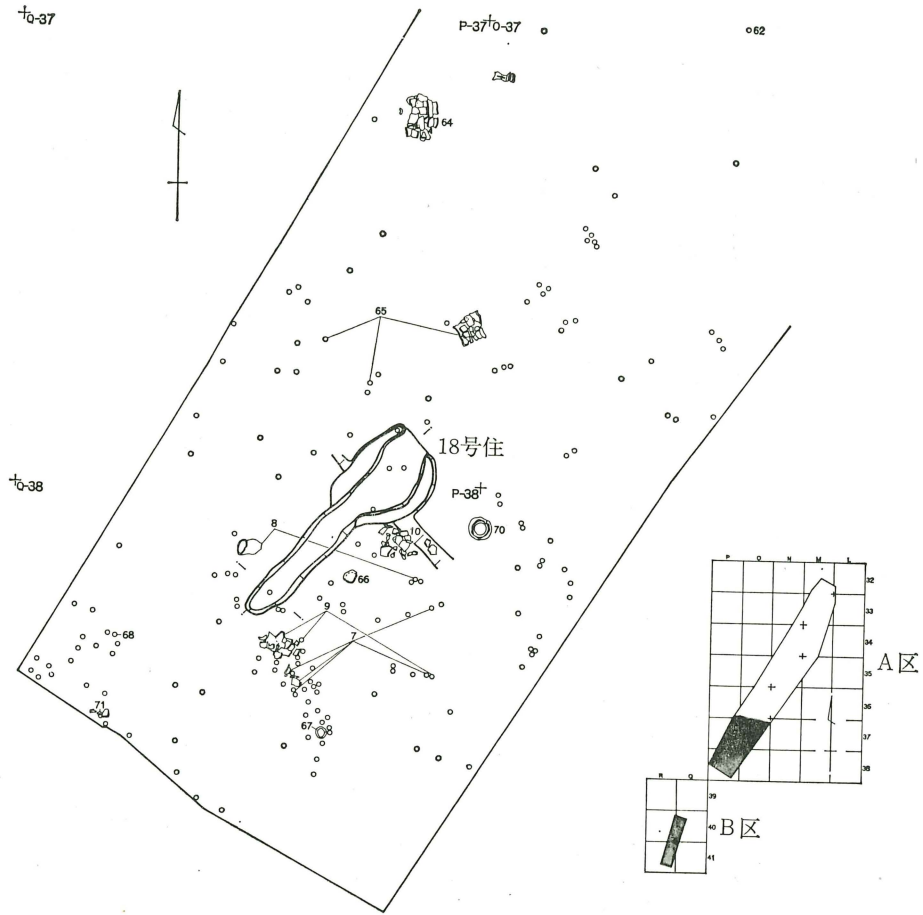
第257図 B区遺物分布図(1)



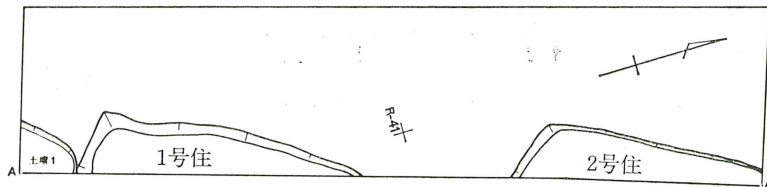
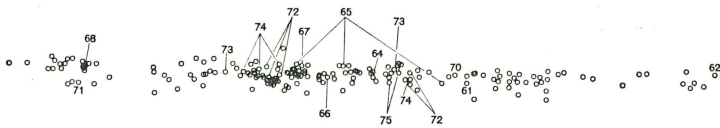
7000m



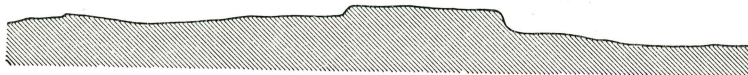
第258図 B区遺物分布図(2)



L-7000m

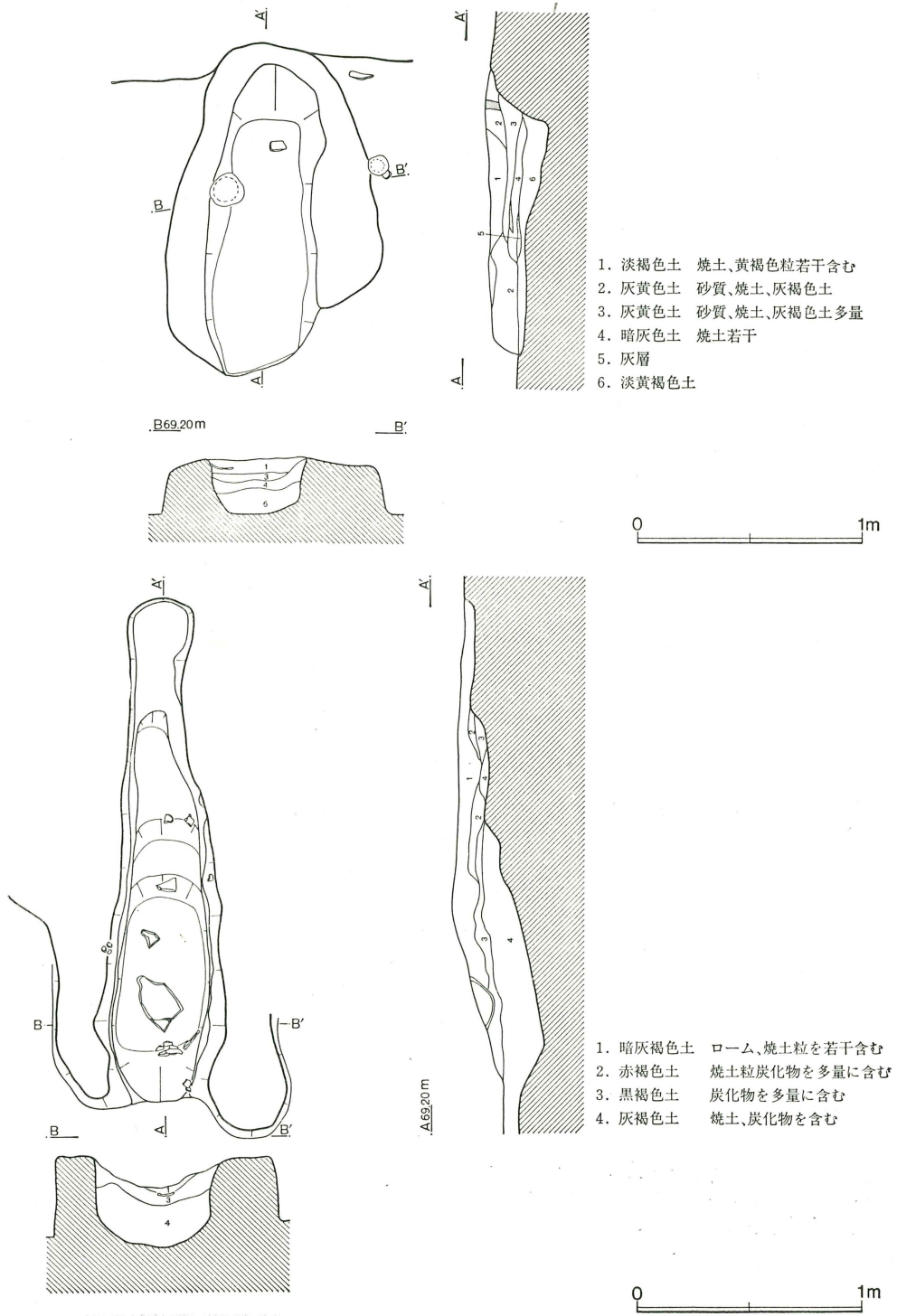


A 70.00m

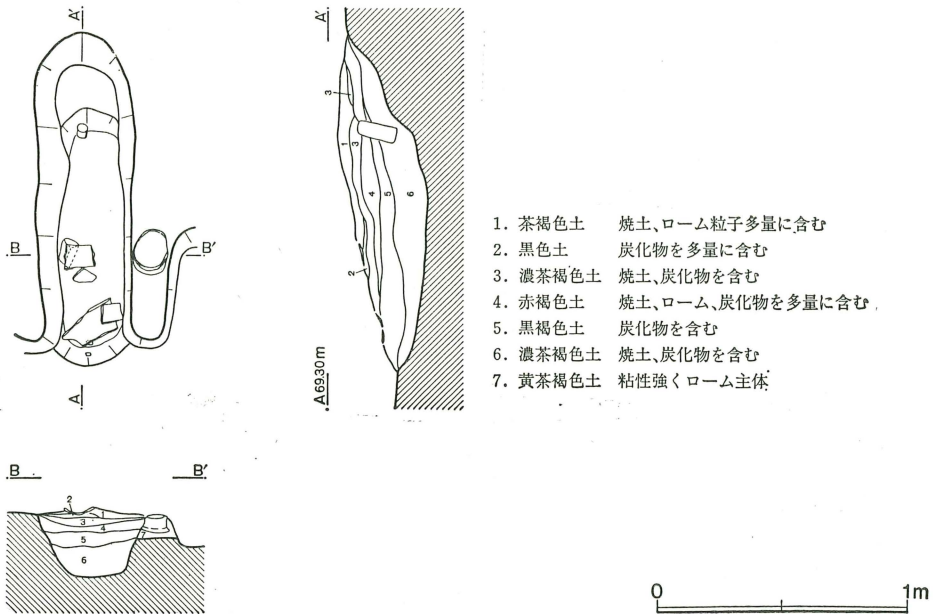
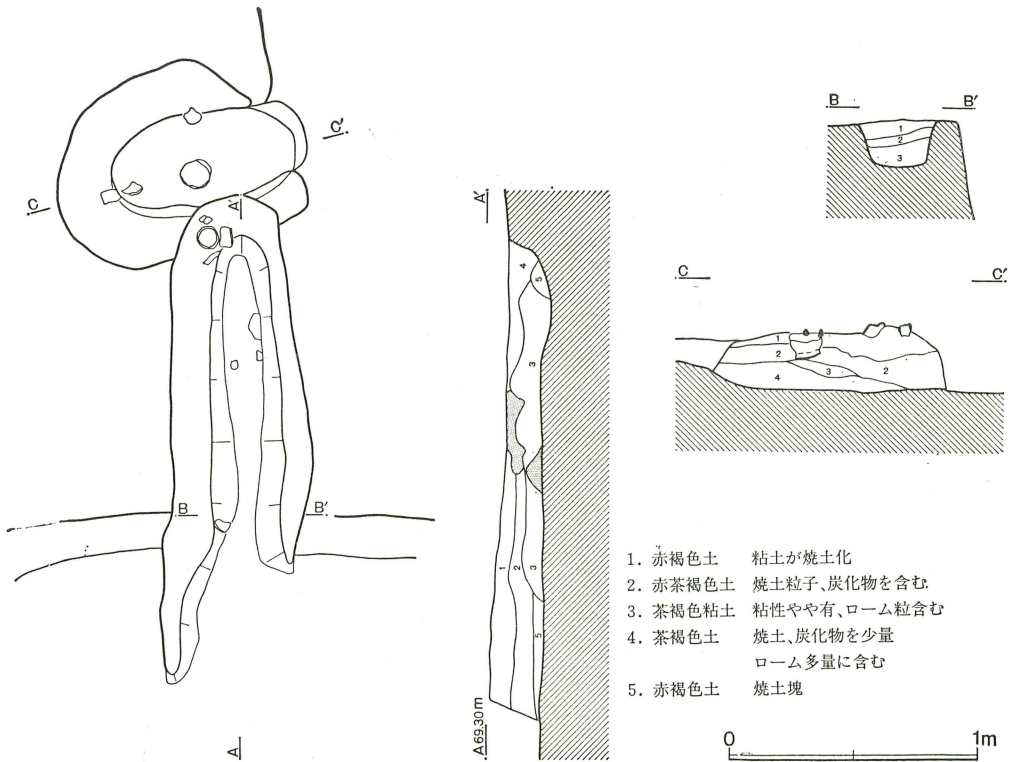


0 2m

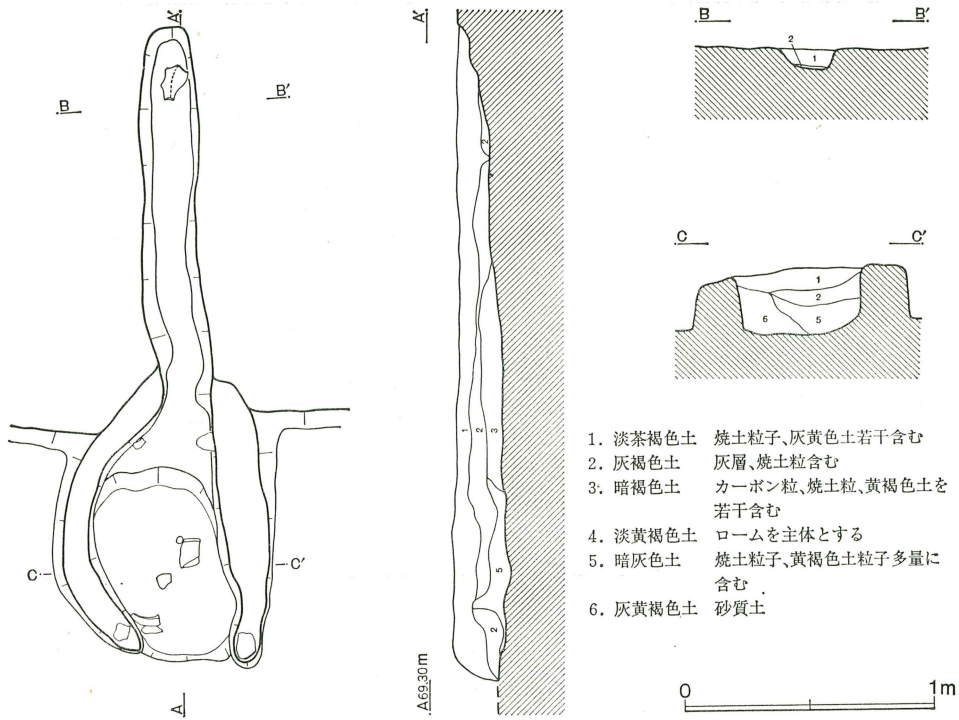
第259图 B区遺物分布図(3)、A区1・2号住居跡



第260図 4・6号住居跡カマド

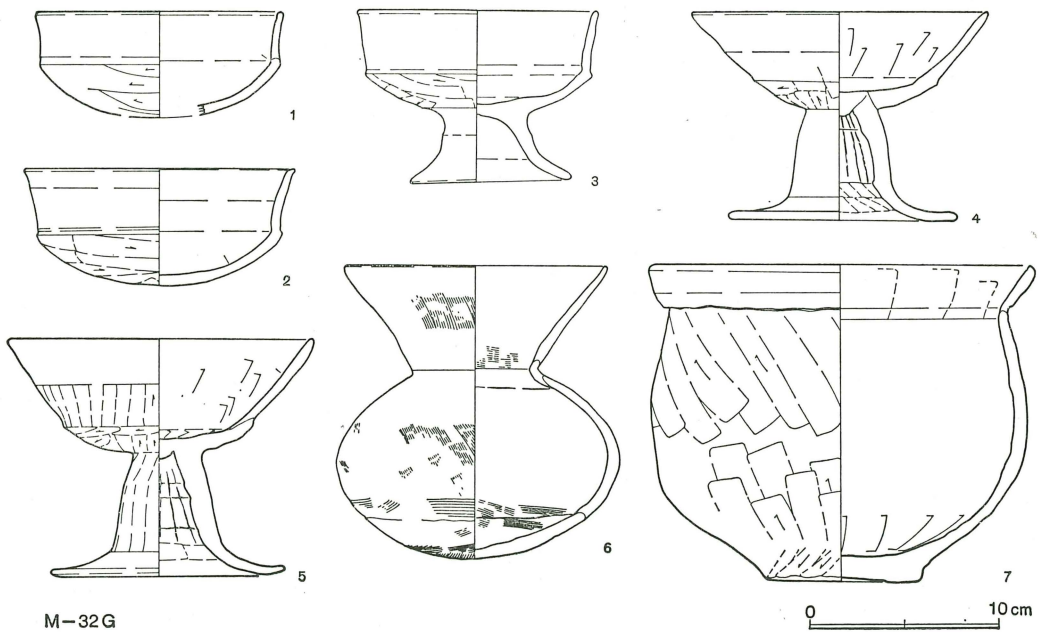


第261図 8・9・14号住居跡カマド



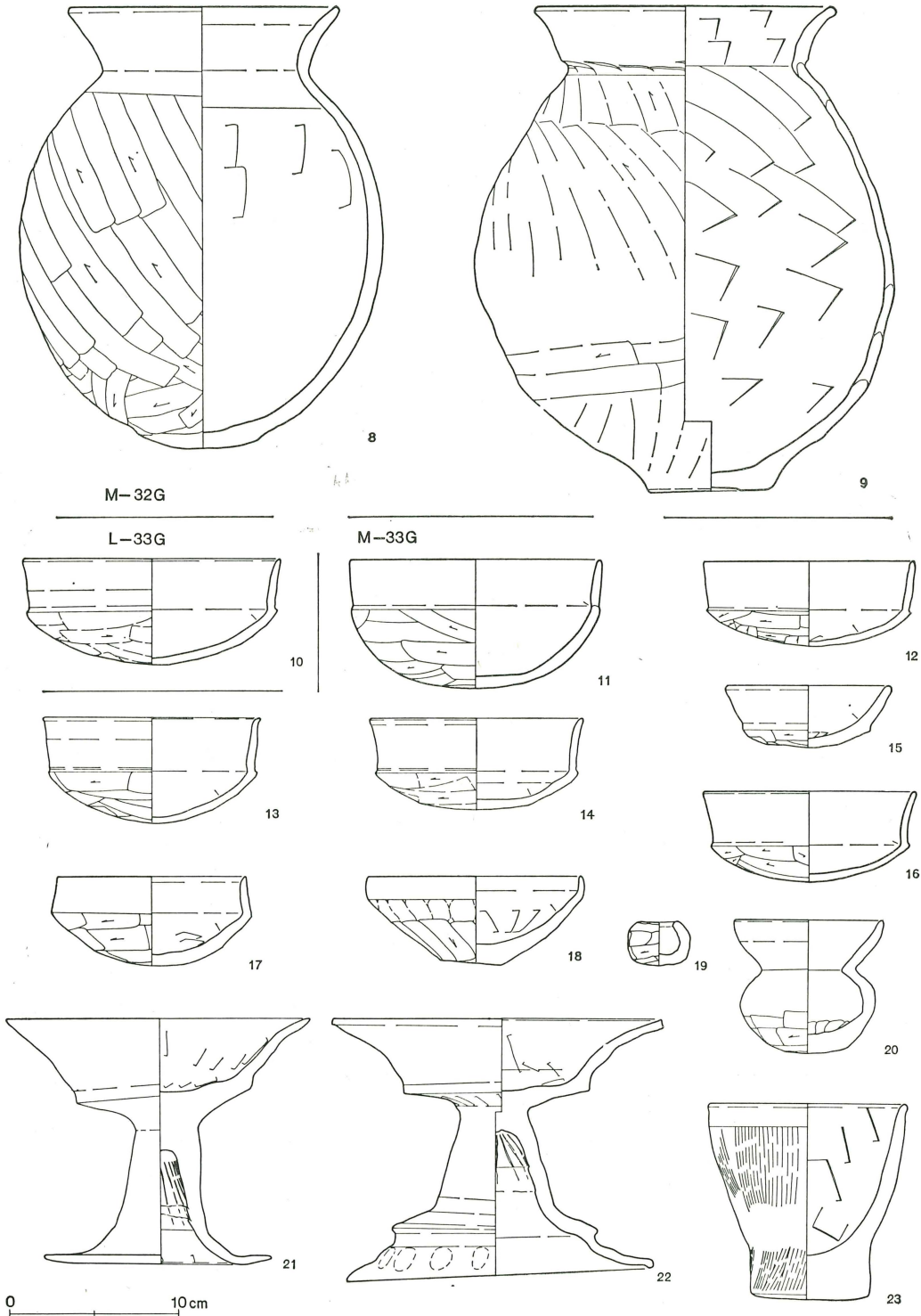
1. 淡茶褐色土 焼土粒子、灰黄色土若干含む
2. 灰褐色土 灰層、焼土粒含む
3. 暗褐色土 カーボン粒、焼土粒、黄褐色土を若干含む
4. 淡黄褐色土 ロームを主体とする
5. 暗灰色土 焼土粒子、黄褐色土粒子多量に含む
6. 灰黄褐色土 砂質土

第262図 18号住居跡カマド

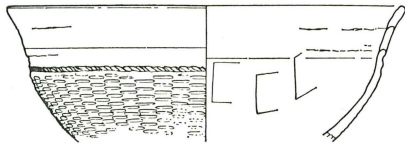


M-32G

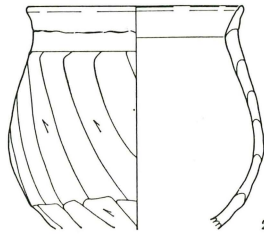
第263図 B区出土遺物(1)



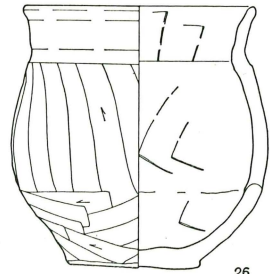
第264图 B区出土遺物(2)



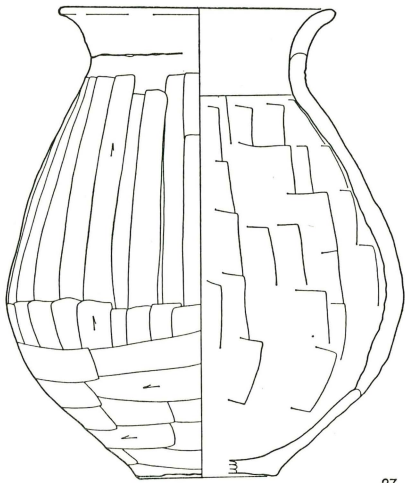
24



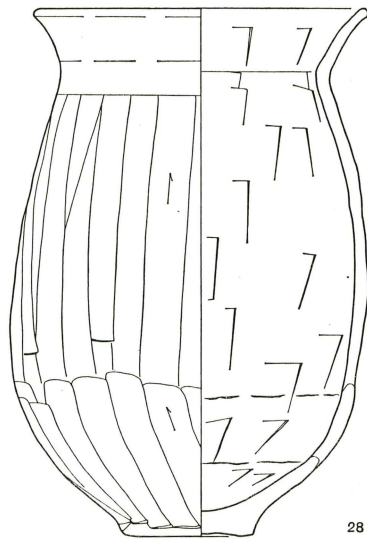
25



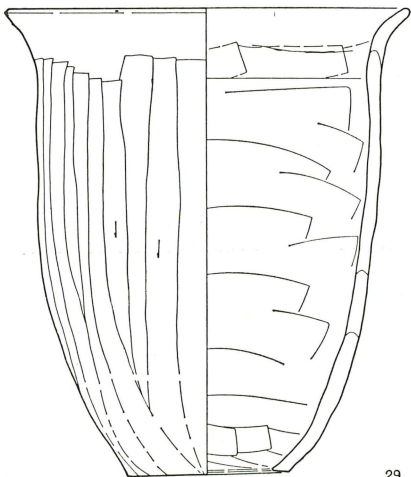
26



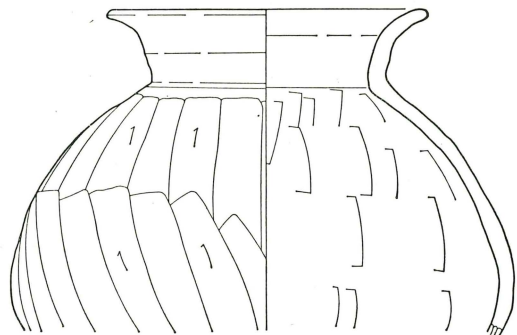
27



28



29



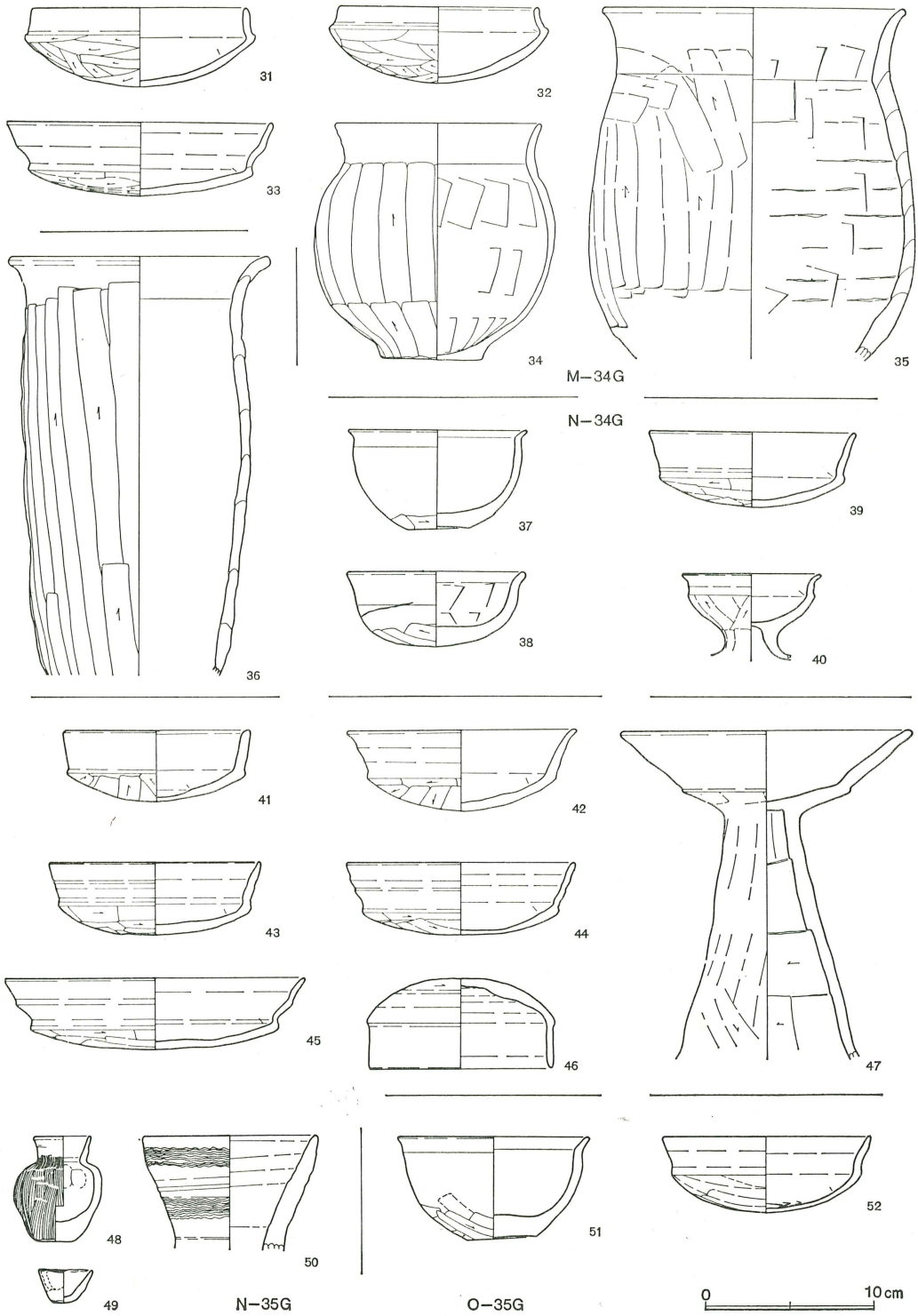
30

M-33G

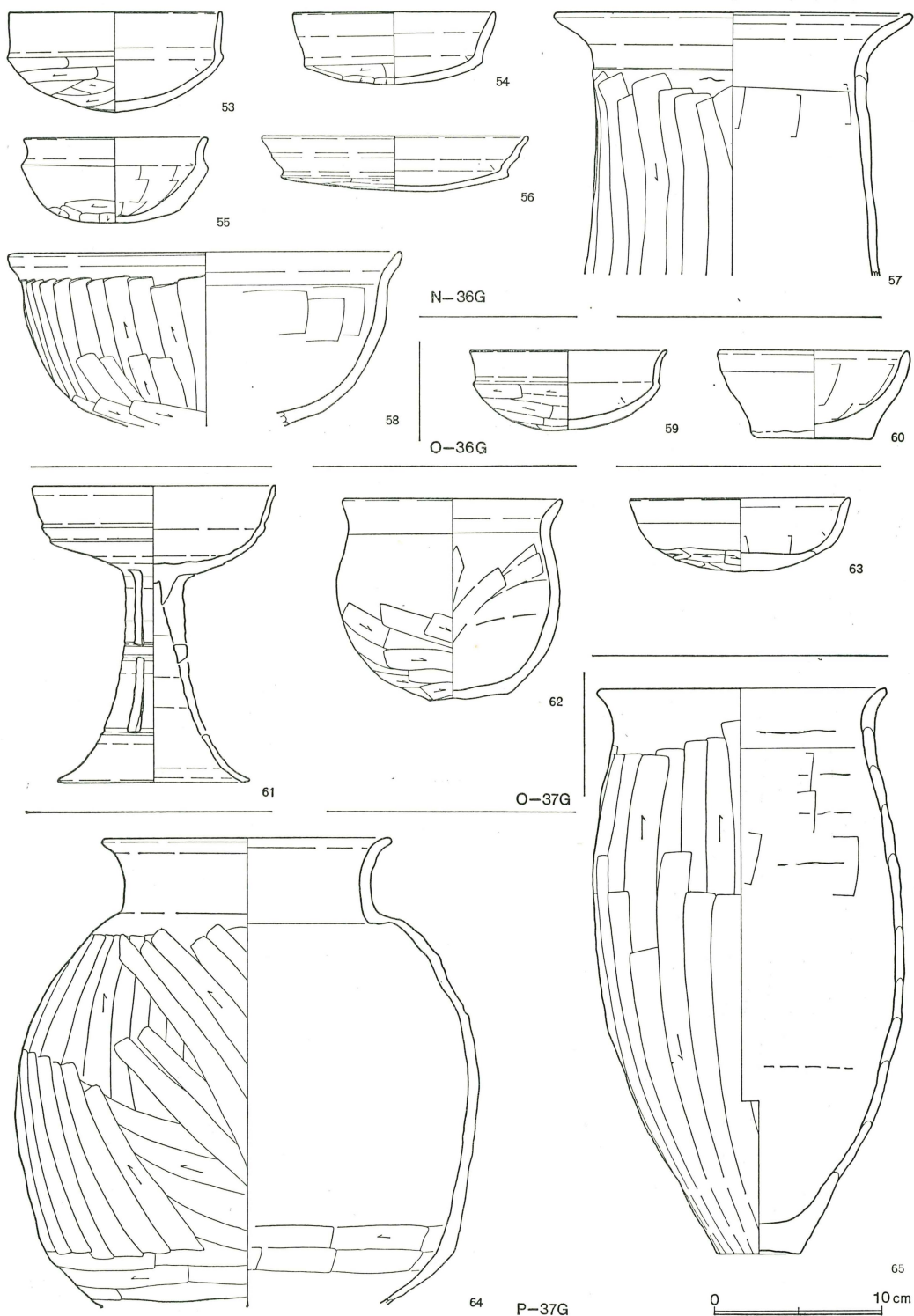


第265图 B区出土遺物(3)

梅沢

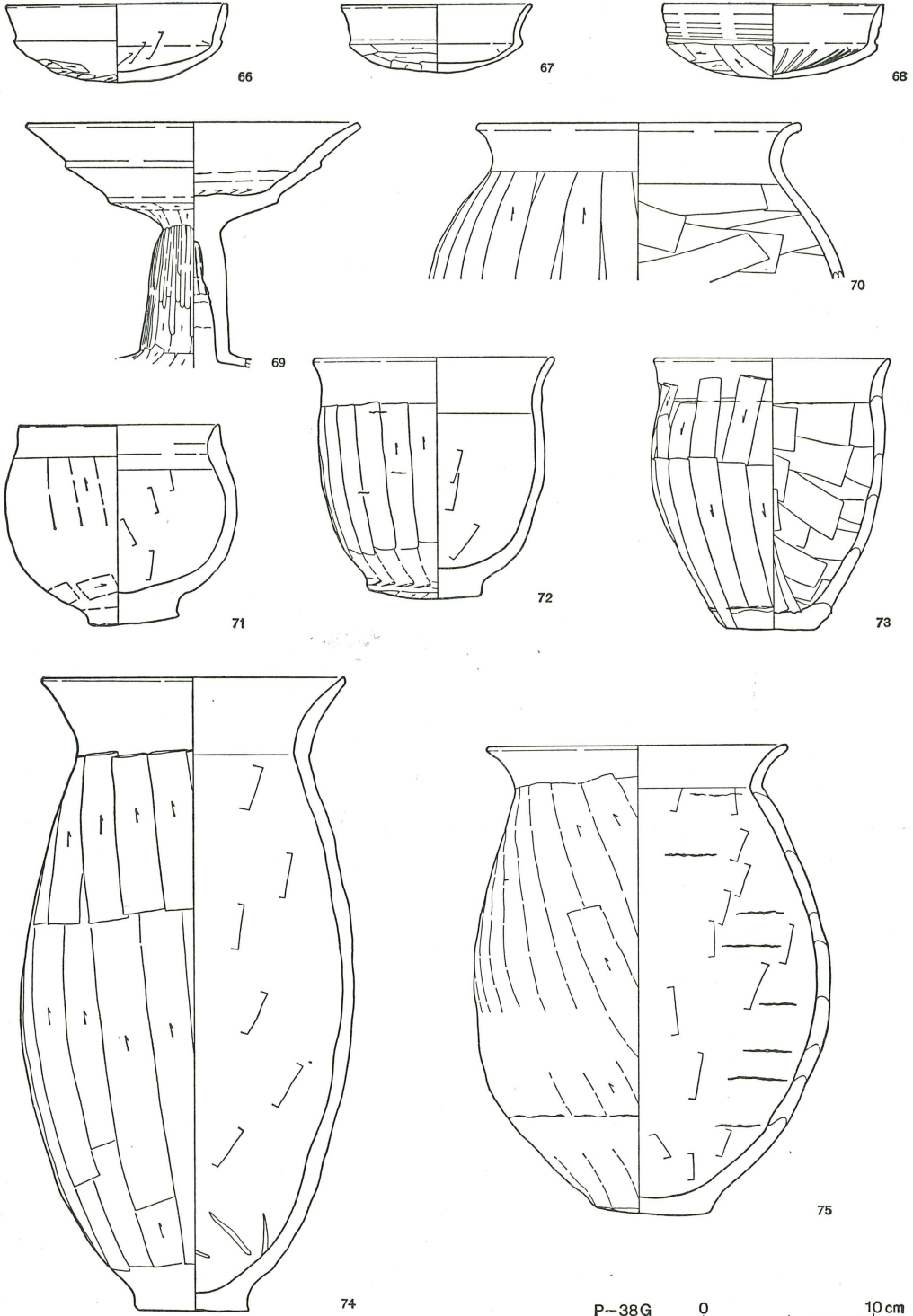


第266图 B区出土遺物(4)

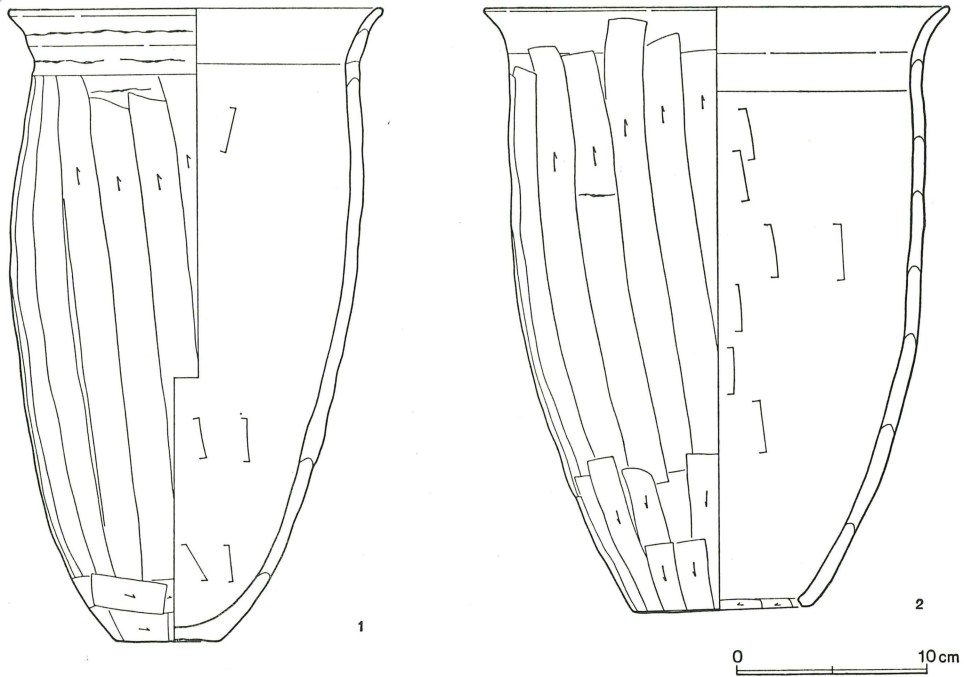


第267図 B区出土遺物(5)

梅沢



第268図 B区出土遺物(6)



第269図 A区出土遺物

B区出土遺物 (第263~268図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師坏	1	13.0		5.65	ABC F	橙褐色 1	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。口唇部内側に弱い稜あり。	3号住。2/5。
坏	2	14.4		6.3	AC F	橙褐色 3	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。口唇部内側に面あり。	4号住カマド内No.1。4/5。
高坏	3	12.7	8.15	9.25	F (多) B (少) AB	橙褐色 3	坏底部篋削り後ナデ。脚部ナデ。内面磨滅著しく調整不明瞭。	4号住No.7。完存。
高坏	4	15.7	11.8	11.1	ABC DE	橙褐色 1	口縁部外面篋削り後横ナデか。裾部内面篋ナデ後ナデ。柱状部内面絞り。	4号住No.1。3/4。
高坏	5	16.2	12.5	12.7	BC D	赤褐色 2	口縁部中位・柱状部外面削り後ナデ。柱状部内面工具ナデ。	3号住No.3。4/5。
大型埴鉢	6	13.9		15.7	ABCDEF、 精選胎土。	橙褐色 1	口縁部ハケ後横ナデ。胴部外面ハケ後ナデ、上半のハケは細かく下半は粗い。	4号住No.2。
鉢	7	20.0	8.3	16.9	ACDEF	褐色 3	胴部外面篋削り後ナデ、内面篋ナデ。口縁部横ナデ、肥厚。	3号住No.1、2、15。3/4。
甕	8	15.9	6.0	25.4	ADEF・砂粒子	茶褐色 3	胴部外面削り。内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	3号住No.2。ほぼ完。
甕	9	17.5	6.8	28.9	ABC DE	褐色 1	口縁部内面篋ナデ後ナデ。胴部外面ナデ下半は丁寧、内面ナデ。	3号住No.1、2。3/5。歪み著しい。
坏	10	15.4		6.3	ABCDEF	橙褐色 1	体部外面篋削り後ナデ上位未調整。口縁部横ナデ。内面ナデ。	4号住No.23。3/5。
坏	11	15.0		7.7	ABCDF	橙褐色 1	体部外面篋削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	6号住覆土。9号住カマドNo.2、3、5、8。3/5。

梅沢

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調 焼 成	手 法 の 特 徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師環	12	12.6		5.1	BCDEF	橙褐色 1	体部外面篋削り、内面下半篋ナデ。口縁部横ナデ。	9号住カマド№6。完存。
環	13	13.0		6.4	ABCDEF、 胎土精選。	橙褐色 1	体部外面篋削り、内面上半・口縁部横ナデ、内面下半ナデ。	4号住覆土。ほぼ完。
環	14	12.6		5.5	ADEF、胎土 精選。	橙褐色 1	体部外面篋削り後ナデ。口縁部横ナデ、内面ナデ。	4号住№8。完存。
環	15	9.7		3.7	ABCDE	橙褐色 1	体部外面篋削り、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	4号住貯蔵穴№16。 ² / ₅ 。
環	16	12.6		5.4	ABC	橙褐色 1	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	5号住№15、18。 ² / ₅ 。 (7号住)
環	17	12.3		5.3	ABCDEF	橙褐色 1	体部外面篋削り、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	5号住№3。完存。 (7号住)
鉢	18	12.8		5.1	ABCDEF	茶褐色 2	体部外面下半篋削り、上半未調整指頭痕残る。内面篋ナデ。	5号住№1。ほぼ完。
手捏ね	19	2.2		2.6	ABCDEF	褐色 3	外面篋削り。口縁部付近にナデを施す。	5号住№5。完存。
罎	20	8.8		8.0	AEF	茶褐色 2	胴部外面下位篋削り、上位・内面ナデ。口縁部横ナデ。	5号住№12。 ⁴ / ₅ 。
高環	21	18.2	13.7	14.8	BCDEF	茶褐色 1	坏部内面横ヘラ後横ナデ。柱状部内面絞り、外面丁寧なナデ。	5号住№2。ほぼ完。
高環	22	19.6	18.5	15.4	BCDF	赤褐色 1	坏部外面底部篋ナデ後ナデ。柱状部内面絞り、外面篋削り後ナデ。	5号住№3。ほぼ完。
すり鉢	23	11.6	7.0	11.8	ABCDEF	橙褐色 1	体部外面粗いハケ目後ナデ、内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	4号住№10。ほぼ完。
鉢	24	21.0		7.3	ACDE	橙褐色 1	体部外面籠目圧痕、内面篋ナデ。	5号住№6。 ¹ / ₄ 。
小型甗	25	12.5		11.9	ACDE	褐色 3	体部外面篋削り。	8号住カマド№1。 ¹ / ₂ 。
小型甗	26	12.2	6.9	14.1	ABCDF	茶褐色 1	体部外面篋削り内面篋ナデ。底部内面ナデ。口縁部横ナデ。	4号住№11、13、24。 ³ / ₅ 。
甗	27	14.3	7.4	25.2	ACDEF	茶褐色 3	口縁部横ナデ後胴部外面篋削り。胴部内面篋ナデ。	5号住№8、17、21、23、 覆土。 ² / ₅ 。(7号住)
甗	28	17.5	6.7	28.1	ABCDE	茶褐色 1	胴部外面下→上篋削り、内面丁寧な篋ナデ。	5号住№26。ほぼ完。 (7号住)
甗	29	21.2	8.5	25.0	ABCDEF	茶褐色 1	胴部外面篋削り内面篋ナデ。口縁部横ナデ。	4号住№5、15。ほぼ完。
壺	30	16.8		17.1	ACDEF	茶褐色 1	胴部外面下→上篋削り、内面右→左の篋ナデ。	4号住№12。 ¹ / ₅ 。
環	31	12.8		4.7	ABCF	茶褐色 1	体部外面細かい篋削り、内面横方向のナデ。口縁部横ナデ。	M-34№13、22、24、50。 ¹ / ₂ 。
環	32	11.9		4.6	ABC	茶褐色 1	体部外面細かい篋削り、内面ナデ。口縁部横ナデ。	M-34№23、62。 ² / ₅ 。
環	33	16.0		4.4	ABCF	黒褐色 1	外部外面篋削り後ナデ。口縁部後をつくりだす横ナデ。	M-34№1、8、13。ほぼ 完。内面色調茶褐色。
甗	34	12.3	6.0	14.3	ABCDEF	褐色 2	口縁部横ナデ後、胴部外面に2段の篋削り。内面篋ナデ。	8号住№15、16。 ⁴ / ₅ 。
甗	35	18.9		21.2	ABCDEF	褐色 1	胴部外面篋削り後ナデ、下位はナデのみ、内面篋ナデ。	8号住№3、4、11、12。 胴部以上 ¹ / ₄ 。
甗	36	15.3		25.3	ACDEF	橙褐色 1	口縁部横ナデ後、体部外面篋削り。	6号住カマド№3、O-36 №2、7、22。 ² / ₅ 。
埴	37	10.6	3.6	5.05	ABCDE	褐色 2	体部外面ナデ、下位篋削り。底部外面篋削り。	N-34№51。口縁部 ² / ₅ 。
埴	38	10.5		4.5	ABCD	橙褐色 1	体部外面下位篋削り、上位ナデ。内面篋ナデ。	N-34№8。完存。

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調 焼 成	手 法 の 特 徴	出 土 位 置 ・ 残 存 率
		口径	底径	器高				
高 坏	39	12.3		4.5	A B C D E	橙褐色 3	体部外面篋削り後ナデ。口縁部横ナデ。	N-34No.32。3/4。
高 坏	40	8.1		5.1	A B C D E F	褐色 1	体部外面・脚部内外面篋削り後ナデ。体部・裾部内面ナデ。	N-34No.9。口縁部1/3。
坏	41	11.1		4.3	F (多) A C E	橙褐色 1	体部外面篋削り、内面横方向のナデ。口縁部横ナデ。	N-35No.3。完存。
坏	42	13.8		4.9	A C D E	橙褐色 2	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	N-35No.83。4/5。
坏	43	12.6		4.3	A B C D E	褐色 2	体部外面篋削り。口縁部横ナデ。	N-35No.1、2・北辺S・B。3/4。
坏	44	13.7		4.35	A B C D E F	褐色 2	体部外面篋削り後ナデ、内面ナデ。口縁部横ナデ。	N-35No.26、27、34。4/5。
坏	45	18.0		4.35	A B C D E	褐色 2	体部外面篋削り後ナデ。口縁部横ナデ。	N-35No.1、2。2/5。
須惠蓋	46	11.0		5.4	D E F (砂質)	淡灰色 3	天井部外面上位回転篋削り、下位ナデ。	N-35No.20。1/5。
土 師 高 坏 埴	47	17.2		19.8	A B C D E F	橙褐色 1	坏部・脚部外面篋削り後ナデ。坏部内面ナデ。脚部内面篋削り。	N-35No.1、2、M-35No.10、O-35No.3。1/2。
手捏ね	48	3.3	1.9	6.3	A C E F	茶褐色 3	胴部外面ハケ目。肩部内面に指頭痕。	N-35No.22。3/4。
手捏ね	49	3.2		2.0	C D E F	褐色 3	体部外面に指頭痕。	N-35No.1。3/4。
須惠甕	50	10.4		6.9	D E	淡灰色 2	11本1単位の櫛描波状文を2段に施す。	N-35No.25、50、N-36No.1、46他。口縁部4/5。
土師埴	51	11.4	4.1	6.2	B C D E	茶褐色	体部外面ナデ後、下半と底部篋削り。口縁部横ナデ。	O-35No.26。4/5。
坏	52	(12.4)		4.6	B D E F	橙褐色	体部外面篋削り後ナデ。内面一部篋削り後ナデ。口縁部横ナデ。	O-35No.33。口縁部2/5。
坏	53	12.8		6.0	A B D E F	茶褐色 2	口縁部横ナデ。体部外面篋削り、内面横方向のナデ。	N-36No.29。3/5。
坏	54	12.1		4.3	A C D F	橙褐色 1	口縁部横ナデ。体部外面篋削り、内面横方向のナデ。	N-36No.15。4/5。
坏	55	10.8		5.1	A D E F	褐色 3	体部外面ナデ、下位篋削り、内面ナデ。	N-36No.42、43。
坏	56	16.0		3.4	A B C D E F	褐色 1	口縁部横ナデ、体部外面篋削り後ナデ。内面ナデ。	N-36No.21、22、N-35No.47。2/5。
甕	57	21.3		15.9	A B C D E F	橙褐色 1	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り、内面篋削り。	N-36No.16、20。上半部2/5。
鉢	58	23.8		10.3	A D E F	赤褐色 4	胴部内面篋削り。口縁部横ナデ後、外面篋削り。	N-36No.5、19、28、O-35No.106。2/5。
坏	59	11.9		4.8	A C F	橙褐色 1	体部外面篋削り後、ナデ。口縁部横ナデ。	O-36No.52。完存。
鉢	60	11.4	6.9	5.3	A C D E F	茶褐色 2	口縁部横ナデ。体部外面ナデ、内面篋削り後ナデ。口唇部内側にゆるい綾。	O-31No.31。3/5。
須 惠 高 坏 土師甕	61	14.6	11.6	18.0	A B C D F	灰白色 1	脚部2段3方透かし。	O-37。3/4。
土師甕	62	13.2	4.7	12.1	B C D	橙褐色 2	胴部外面ナデ後、下半篋削り、内面下半篋削り後ナデ、上半篋削り。	O-37No.26。2/5。
坏	63	13.2	4.5	10.7	A B C D F、片岩粒子、2mm小石	赤褐色 2	口縁部横ナデ、体部ナデ、底部外面篋削り、内面篋削り。	P-37No.14。
甕	64	17.2		28.3	A B C D E F	茶褐色 1	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り、内面ナデ、下位篋削り。	P-37No.1。4/5。
甕	65	17.3	5.0	34.3	A B C D E F	茶褐色 2	胴部外面上半ナデ後部分的篋削り、内面篋削り。	P-37No.8、10、22。4/5。

梅沢

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調		手 法 の 特 徴	出 土 位 置 ・ 残 存 率
		口径	底径	器高		焼 成			
環	66	13.1		4.15	C D E F	黒褐色	2	体部外面篋削り上位未調整、内面篋ナデ後ナデ。	P-38N.78。4/5。内面色調 橙色。
環	67	11.1		4.0	A C D E F	橙褐色	2	体部外面篋削り、内面ナデ。	P-38N.52。完存。器面は 粉っぽい。
環	68	13.0		4.5	A B C F	茶褐色	1	口縁部横ナデ後、体部外面篋削り一部未調整。内面ナデ後逆時計廻りの暗文。	P-38N.38。4/5。
高 環	69	19.6		14.5	B C D E	橙褐色	1	環底部外面篋削り後ナデ。その後脚部外面篋削り後篋ミガキ、内面ナデ。	P-38N.80。1/2。
壺	70	19.1		9.3	A B (微) C D F・片岩粒子	褐色	2	胴部外面篋削り、内面篋ナデ。	P-38N.85。1/4。口縁部ほ ぼ完。
小型甕	71	11.9	5.3	14.1	A B C F・光沢 珩石粒(3~8mm)	褐色	3	胴部外面篋削り後ナデ、下位ナデのみ。底部外面篋削り、内面篋ナデ。	P-38N.93。4/5。
小型甕	72	14.1	6.5	15.3	A B C F・片岩 粒子	赤褐色	2	胴・底部外面篋削り後ナデ、胴部のみ篋削り、内面篋ナデ。	P-38N.6、12、64、69。 ほぼ完。内面色調茶褐色。
小型甕	73	13.8	5.4	16.2	A B C D F・1 cm大の砂岩粒	茶褐色	1	底部外面篋削り、内面棒状工具整形後篋ナデ。	P-38N.3、33。ほぼ完。
甕	74	17.9	6.6	37.8	A B C F・2mm 大の小石	褐色	1	底部外面篋削り後ナデ。胴部外面篋削り、内面篋ナデ。	P-38N.12、19、22、77。 口縁部3/4。内面橙褐色。
甕	75	17.6	6.8	27.8	A B C F	褐色	2	胴部外面篋削り後ナデ、内面篋ナデ。底部外面篋削り。	P-38N.1。3/4。内面下半 色調黒褐色。

A区出土遺物 (第269図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調		手 法 の 特 徴	出 土 位 置 ・ 残 存 率
		口径	底径	器高		焼 成			
土師甕	1	19.9	5.5	34.1	F (少) A B C D E	褐色	2	胴部外面タテ篋削り、下位ヨコ篋削り、内面篋ナデ。	拡張区A包含層。4/5。底部 外面に本葉痕。
甗	2	24.8	8.8	31.7	A B C D F	褐色	1	口縁部横ナデ後、胴部外面篋削り、内面篋ナデ。孔端部篋削り。	拡張区A包含層。3/4。

X 瓦・金属製品・石製品

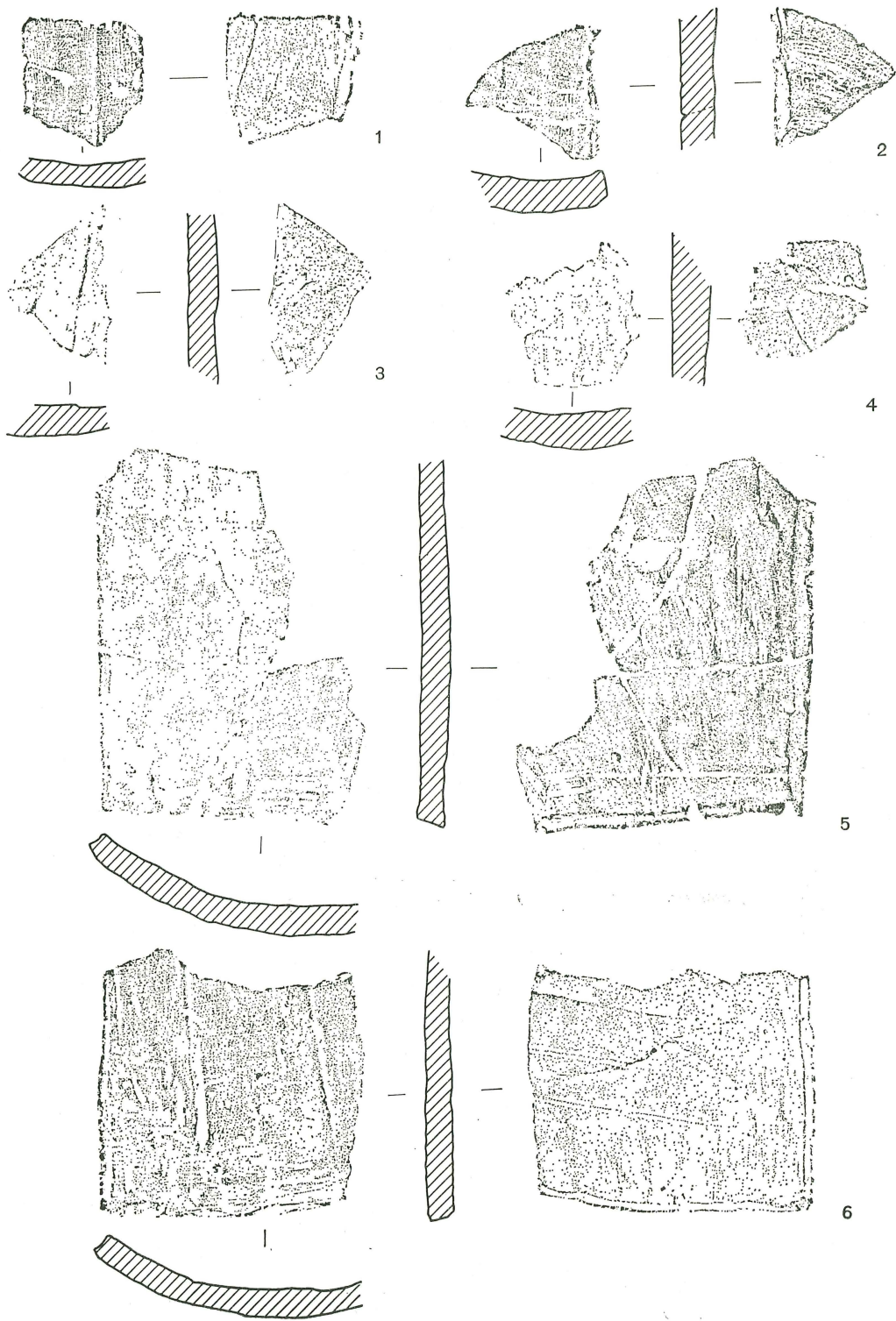
1 瓦 (第270図)

瓦は、立野南、八幡太神南、熊野太神南遺跡から検出された。総て平瓦で模骨痕が認められ3の環元焰焼成を除いては酸化焰焼成である。1は厚さ1.5cm凸面に縦方向の篋削り凹面に3cm単位あたり26本の細かい布目痕を残す。褐色でABEを含む。八幡太神南1号住出土。2は厚さ2cm凸面に細かい平行叩きを施し後軽いナデ凹面は細かい布目痕をナデ消している。粘土接合痕が認められる。茶褐色でDEを含む。八幡太神南出土。3は厚さ1.9cm凸面は縦方向のナデ凹面は3cm単位26本の布目痕をナデ消す。黒灰色でABDEを含む。立野南2号住出土。4は厚さ2.2cm凹面は布目痕をナデ消す。褐色でABDを含む。八幡太神南出土。5は厚さ2.0cm凸面は細かい平行叩き後軽いナデを施し狭端部は横篋削り凹面は布目痕をナデ消す。褐色でABDを含む。熊野太神南出土。6は厚さ1.6cm凸面は細かい平行叩き後横方向のシャープな篋削り凹面は3cm単位26本の布目痕をナデ消し広端部幅5cmを横ナデする。模骨幅9cmを測る。褐色でABDを含む。熊野太神南1号土壙出土。

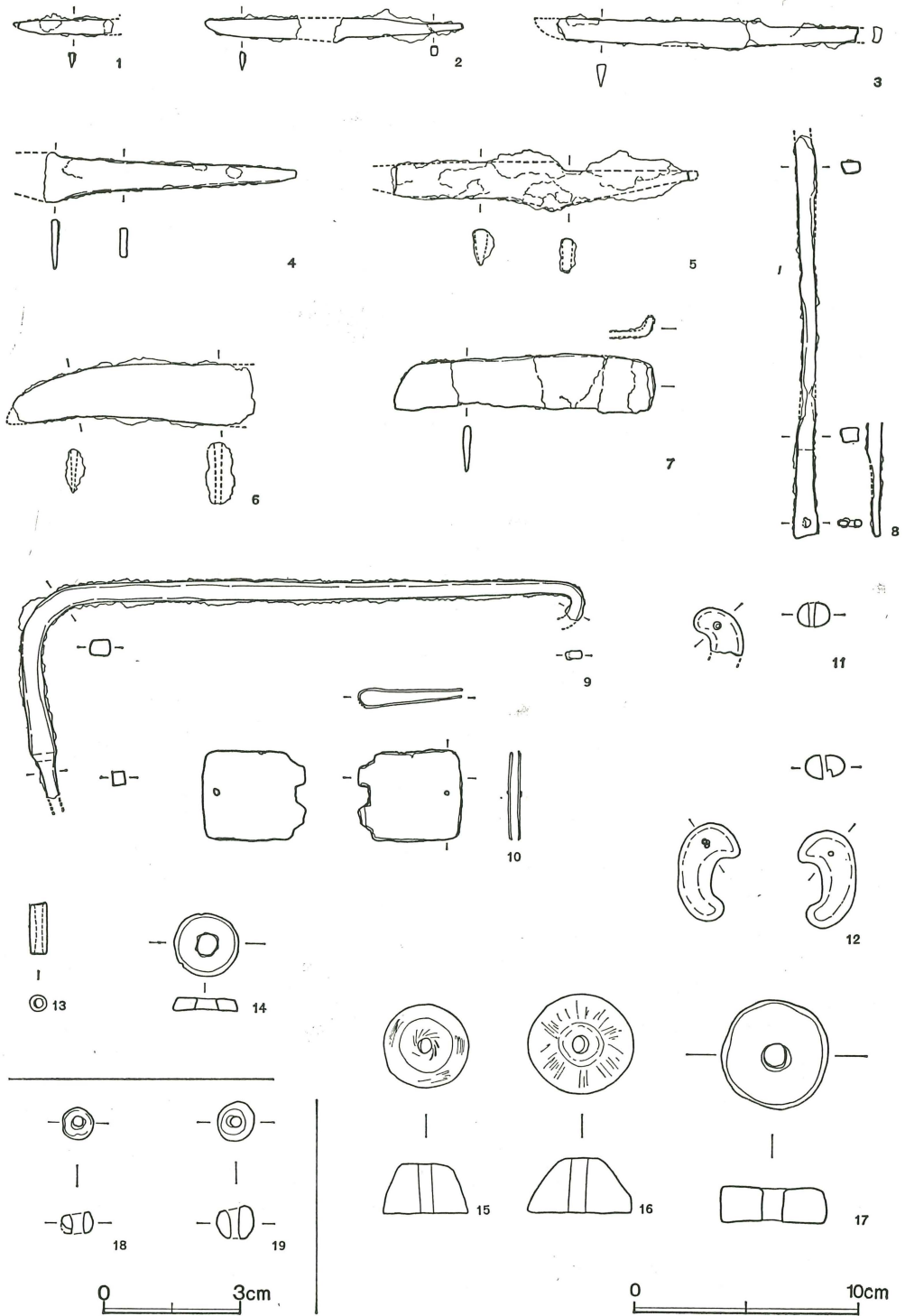
2 金属製品・石製品 (第271図)

1・2は立野南2号住居跡出土。2本接して検出された。鉄製刀子。1は残存長4.2cm。刃部先端及び柄部欠失。2は2片が接合しないものの同一個体であろう。刃部に緩い関をもつ。3は八幡太神南A地点1号住居跡出土。鉄製刀子。鋒及び柄部先端欠失。残存長13.5cm。直角に折れたものを復元実測。棟関有角造り。4は今井C地点4号住居跡No.6。鉄製刀子。刃部欠失し、柄部のみ完存。残存長10.8cm。5は北廓2号住居跡出土。鋒、柄部先端欠失。銹化著しいが棟関有角か。6は北廓2号住居跡出土鉄製鎌。銹化著しい。残長11cm。鋒、柄部欠失。7は川越田1号住居跡No.219。鉄製鎌ではほぼ完存。全長11.7cm、基部屈曲(折り返し)。8は今井G地点5号住居跡No.60。不明鉄製品。残存長18cm。基部に穿孔。9は今井D地点4号住居跡No.20。鉄製鍵。基部及び先端部欠失。断面方形。基部に段をもつ。10は今井B地点1号住居跡覆土出土。青銅製帯金具と考えられる。縦幅4.0cm、横幅4.6cmで表裏各1個の小突起あり。黒い付着物あり、黒漆塗彩痕か。

11は川越田23号土壙出土勾玉。瑪瑙製。下部欠失。厚さ1.1cm。片面穿孔。12は梅沢遺跡P-37グリッド出土勾玉。滑石片岩製。長さ4.4cm、厚さ1cm。片面に2ヶ所の穿孔痕が残る。13は梅沢遺跡P-37グリッド出土管玉。滑石製。全長2.3cm、径0.7cm。孔径0.4cm。完存。14は北廓遺跡12号溝跡出土。円板状土製品。径2.8cm、厚さ0.6cm、孔径0.9~1.1cm。用途不明。15は川越田8号住居跡No.1。滑石製紡錘車。径2.4~3.8cm。厚さ2.2cm。孔径0.6cm。16は川越田8号住居跡No.2。滑石製紡錘車。断面截頭円錐形。下底径4.2cm、厚さ2.4cm。孔径0.7cm。17は今井D地点2号住居跡出土。凝灰岩製紡錘車。径4.6~4.7cm、厚さ1.6cm、孔径1.0cm。断面長方形。18は川越田31号住居跡出土白玉。径0.7cm、厚さ0.5cm。孔径0.2~0.3cm。一部欠失。滑石製。稜はにぶく雑なつくり。形態崩れている。19は川越田11-I区出土土玉。最大径0.8cm、厚さ0.7cm、孔径0.2~0.3cm。



第270图 瓦实测图



第271図 金属製品・石製品

XI 附 編

以下に記す報告は、第四紀地質研究所、井上巖氏に委託した児玉工業団地取付道路関係遺跡より出土した土器の胎土分析結果であるが、紙幅の都合上、実験及び実験結果の取り扱いの項を省略させて頂いた。当事業団刊行の他の報告書を御参照願いたい。

児玉工業団地取付道路関係遺跡胎土分析結果報告書

(株) 第四紀研究所 井 上 巖

3 実験結果

3-1 タイプ分類

土器胎土は胎土性状表に示すように、三角ダイヤグラム、菱形ダイヤグラムの位置分類、焼成ランクに基づいてA～Gの7タイプに分類される。土器胎土はガラスの生成状況によって大きく二分される。Ko-1～13は全体にガラスは細粒で原土の組成を残すが、Ko-14～23はガラスが葉状、発泡し、焼成温度に大きな差がある。Ko-14～23は高温焼成の際に生成するムライト (Mullite) が多く検出され、さらにクリストバーライト (Cristobalite) も同時に検出され、高温焼成を示している。土器胎土は全体に細粒の石英 (Qt)、斜長石 (Pl) を混入する粒径のそろった均質なローム質粘土あるいは碎屑性の粘土によって構成される。

Aタイプ……Ko-2、6、12、13、17 (原土-1、4、6、7)

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の4成分よりなる。児玉工業団地および周辺の露頭より採取した原土のうち、原土-1、4、6、7と鉱物組成が一致し、在地性の可能性が高い。Ko-2、6、12、13のガラスは細粒で、焼成ランクはⅢ～Ⅳであるが、Ko-17は発泡ガラスが生成し、焼成ランクはⅠ～Ⅱと高い。

Bタイプ……Ko-4、16

モンモリロナイト、雲母類、角閃石の3成分を含み、緑泥石に欠ける。Ko-4は細粒ガラスで焼成ランクはⅢ～Ⅳであるが、Ko-16はムライト、クリストバーライトが生成し、ガラスは発泡し、焼成ランクはⅠ～Ⅱと高い。

Cタイプ……Ko-3

モンモリロナイト、雲母類、角閃石、緑泥石の4成分よりなる。Aタイプと同じ鉱物組成であるが強度比が異なるためタイプ分類上違ったタイプに入るが、Aタイプと同様に在地性の可能性は高い。ガラスは細粒で焼成ランクはⅢ～Ⅳと低い。

Dタイプ……Ko-7、14

モンモリロナイト、雲母類の2成分を含み、角閃石、緑泥石の2成分に欠ける。Ko-7は細粒ガラスで、焼成ランクはⅢと低い。Ko-14はムライト、クリストバーライトが生成し、発泡ガラスで焼成ランクはⅠ～Ⅱと高い。

Eタイプ……Ko-9、10、15、18、21 (E'タイプ……9、18)

第5表 胎土性状表（児玉工業団地）

試料 No.	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物 (mm)										ガラス量 (mm ²)	備 考			
			Mo-Mi- Hb	Mo-Ch Mi-Hb	Mo	Mi	Hb	Ch	Ka(Ha)	Au	Hy	Qt	Pl	Cr(Mu)					
Ko-1	F	I~II	㊸	㊹	2		4								55	8		細粒Qt、Pl、 ローム質粘土、 発泡ガラス	
2	A	III~IV	①	①-2	3	2	4	3							52	5		中~細粒Qt、Pl、 細粒ガラス	
3	C	III~IV	②	①-2	2	2	6	4							53	181		細粒Qt、Pl 〃 〃	
4	B	III~IV	①	⑮	2	4	4								62	14		〃 粒径のそろったローム質粘土	
5	F	III~IV	③	⑭	2		5								55	22	Maghe 5	〃 ローム質粘土	
6	A	III~IV	⑩	①-1	4	4	5	6						4	62	46		中粒Qt、Pl 〃 〃	
7	D	II	⑨	⑰	2	3									108	68		〃 ローム質粘土	
8	F	I~II	⑬	⑱	3		7								48	17	Pyrite 3	細粒Qt、Pl 粒径のそろった均質なローム質粘土、 発泡ガラス	
9	E'	III~IV	⑪	⑳	4			4							56	29		〃 細粒ガラス	
10	E	III~IV	⑫	㉑	3									4	64	11	Ceino 5	〃 〃 〃	
11	F	III~IV	⑮	⑭	4		6								82	12		〃 〃	
12	A	III~IV	①	①-2	5	3	3	3							78	23		〃 粒径のそろった均質な碎屑性粘土、 〃	
13	A	III~IV	①	①-1	3	5	4	3							81	22		〃 〃	
14	D	I~I	⑩	⑰	2	3									76	4	12(4)	〃 〃 発泡ガラス	
15	E	I~I	⑪	⑳	2									4	45	4	7(4)	Pyrite 6	〃 〃 〃
16	B	I~I	①	⑮	2	3	3							8	71	0	30(7)	4	〃 〃 〃
17	A	I~I	①	①-2	3	2	4	3						4	36	0	38(5)	8	〃 〃 〃
18	E'	I~I	⑩	㉑	2			4	(5)					4	56	7	25(3)	6	粗粒Qt、Pl、 〃 〃
19	F	I~I	⑮	⑭	3		5								45	6	51(3)	7	細粒Qt、Pl、 粒径のそろった均質なローム質粘土、 〃
20	G	II	⑭	㉒										5	40	8	18		〃 粒径のそろった均質な碎屑性粘土、 〃
21	E	II	⑮	㉑	3										95	3	4		中粒Qt、Pl、 粒径のそろった均質なローム質粘土、 〃
22	F	I~III	⑬	⑭	2		5								109	3	3		〃 〃 〃
23	F	I~III	⑮	⑭	2		3								118	6	3		〃 〃 〃
原土-1	A		①	①-1	6	3	3	7	(5)					3	95	80		古井戸	
2			③	②	4	15	3	20						5	140	55		〃 fine pumice	
3			③	②	3	9	4	17						2	180	64		〃 hard loam	
4	A		①	①-2	5	4	7	5						3	81	51		〃 立川 loam	
5			④	⑮	10	3	4		7					2	60	40		〃 〃	
6	A		①	①-2	8	4	4	8						4	98	34		〃 炉端・焼土	
7	A		①	①-2	15	10	7	8						4	250 ⁽⁺⁾	75		将監塚一粘土採取トレンチ	
8			⑤	⑥		7		6							157	36		〃	
9			⑮	⑱	6		5	11	(4)						123	40		〃	
10			③	②	7	12	2	18						5	300 ⁽⁺⁾	82		〃	
11			④	①-2	21	12	8	12						3	300 ⁽⁺⁾	65		〃	
12			①	③	4	11	7	24						5	168	68		〃 一住居跡底面	

モンモリロナイト1成分を含み、雲母類、角閃石、緑泥石の3成分に欠けるものをEタイプ、モンモリロナイト、緑泥石の2成分を含むものをE'タイプとする。両者が同じタイプに入ったのは菱形ダイヤグラムにおける記載不能の②にあたるため、本来は区分されるべきものである。Ko—9、10は細粒ガラスで焼成ランクⅣと低いが、Ko—15、18'、21はムライト、クリストバーライトが生成し、発泡ガラスを多く生成し、焼成ランクはⅠ～Ⅱと高い。

Fタイプ……Ko—1、5、8、11、19、22、23

モンモリロナイト、角閃石の2成分を含み、雲母類、緑泥石の2成分に欠ける。Ko—1、5、8、11は細粒ガラスが生成し、焼成ランクはⅢ～Ⅳと低い。Ko—1、19、22、23はムライト、あるいはクリストバーライトが生成し、発泡ガラスで焼成ランクはⅠ～Ⅱ、Ⅱ～Ⅲと高い。

Gタイプ……Ko—20

モンモリロナイト、雲母類、角閃石、緑泥石の4成分に欠ける。細粒の石英、斜長石を混入する粒径のそろった均質な碎屑性粘土で、その主体は $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$ であろう。クリストバーライトが生成し、焼成ランクはⅡと高い。

3—2 石英 (Qt) —斜長石 (Pl) の相関について

Qt・Plの相関図は、X線回折試験によって得られた石英と斜長石の強度高を単純にグラフ化したものである。実験は Fullscale zoo count に条件設定したものであり、この条件下におけるチャート上の強度高をミリメートル単位であらわしてある。石英、斜長石は砂の主成分であり、土器製作過程で粘土中に混入される。砂における石英、斜長石の量比は、後背地の地質および運搬過程における流速などの条件によって、ある地域においては大まかにある一定の比率を有するものと推察される。ある地域におけるある比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは、各集団における技術上の問題である。例えば、同一集団において使用する粘土は若干異なっても、砂の粘土に対する混合比はある一定の量比にあると考えられる。すなわち、各集団における土器焼成温度は燃料の相違、燃焼のさせ方など異なっていたであろうし、燃料の原材料となる木材の相違、いかえれば植生によっても異なったであろう。

粘土に対する砂の混合比は、各集団が維持し得た土器焼成温度と密接な相関をもったであろうと推察される。すなわち、維持し得た土器焼成温度において良質の土器を焼きあげるために、粘土の材質と砂の混合比を経験的に決定したものであり、砂の混合比は純然たる土器焼成上の問題であると推察される。

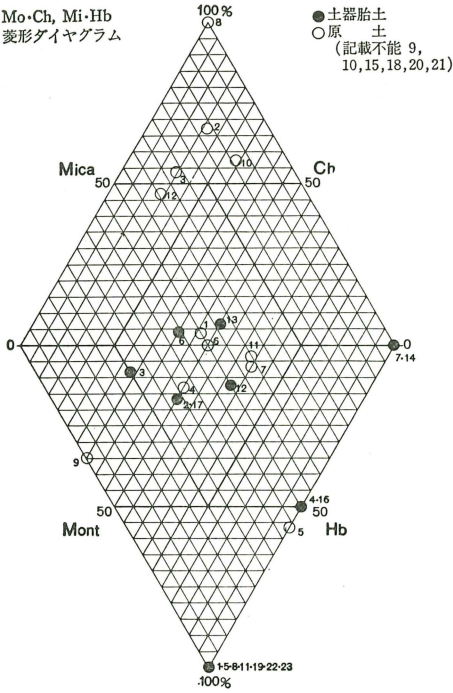
児玉工業団地より出土土器の石英 (Qt) —斜長石 (Pl) の相関は図に示すとおりである。土器は大きく分けてⅠ～Ⅵの6グループとその他に区分される。

Ⅰグループ……Ko—15、17、19、20

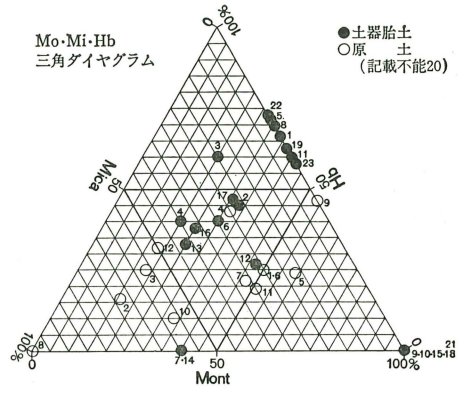
石英は35～45、斜長石は0—10の範囲にある。これらはいずれも高温焼成であり、斜長石が分解してガラス化しており、斜長石の量は若干低くなっている可能性がある。石英はその影響をほとんど受けていないものと推察される。

Ⅱグループ……Ko—5、8、9

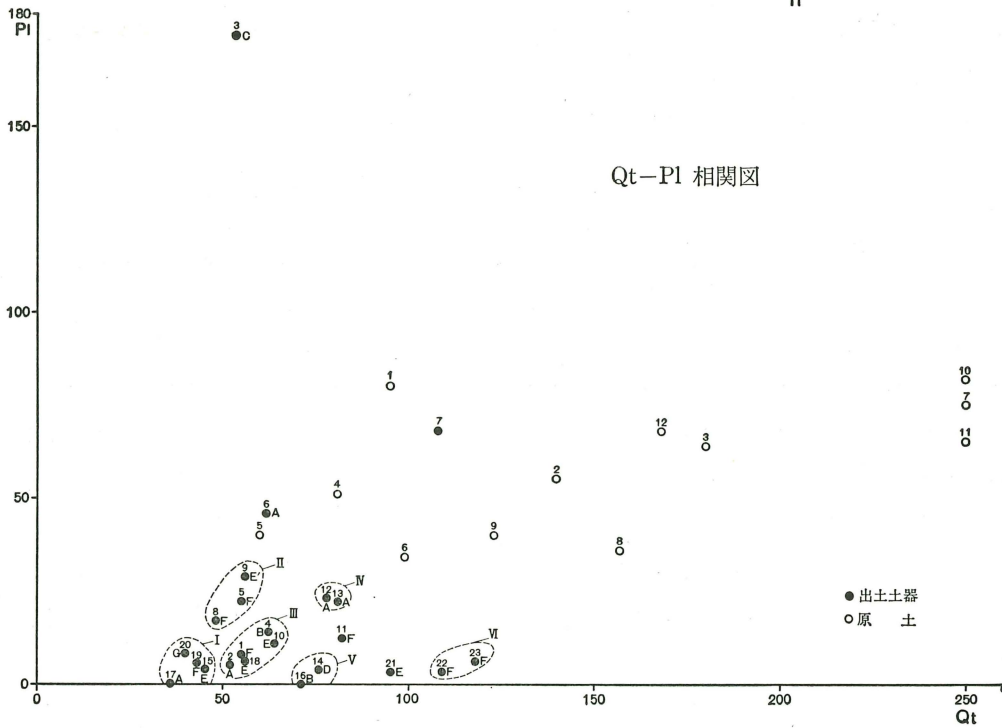
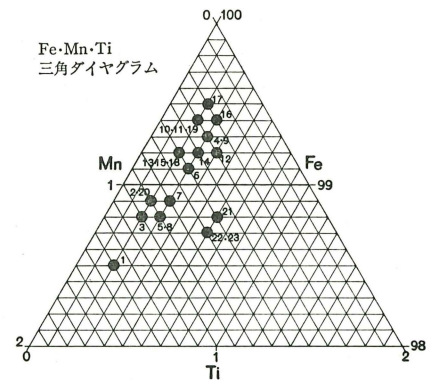
Mo·Ch, Mi·Hb
菱形ダイアグラム



Mo·Mi·Hb
三角ダイアグラム



Fe·Mn·Ti
三角ダイアグラム



第272図 三角・菱形ダイアグラム、Qt-P1相関図

石英は45~60、斜長石は15~30の範囲にある。これらはいずれも焼成温度が低く、ガラスは少なく、原土の組成を示している。

Ⅲ グループ……Ko—1、2、4、10、18

石英は50~65、斜長石は5~15の範囲にある。Ko—18以外は焼成温度は比較的 low、原土の組成を示すが、Ko—18は高温焼成のため斜長石は分解し、本来の量より減少しているものであろう。

Ⅳ グループ……Ko—12、13

石英は75~85、斜長石20~25の範囲にある。焼成温度は比較的 low、原土の組成を示す。

Ⅴ グループ……Ko—14、16

石英は60~70、斜長石は0~5の範囲にある。高温焼成のため斜長石は分解し、本来の量より減少しているものであろう。

Ⅵ グループ……Ko—22、23

石英は105~120、斜長石は0~10の範囲にある。高温焼成のため斜長石は分解して本来の量より減少しているものであろう。

その他……Ko—3、6、7、11、21

Ko—3は斜長石が181と最も高く、その砂の成分に大きな相違があり、特徴的な組成を有する土器である。Ko—7も斜長石が68と高く、Ⅰ~Ⅵのグループがは強度において異なる。Ko—6も同様に斜長石の強度が高い。Ko—11、21はⅤあるいはⅥに入る可能性もあるが、集中度という点からみるとこれらは独立しているようである。

土器胎土中に含まれている砂の石英 (Qt)、斜長石 (Pl) の比によってⅠ~Ⅵの6グループとその他に区分された。

前記の前提条件に基づいて考察するならば、Ⅰ~Ⅵの6グループは同時代における異なる集団、あるいは同集団における時間の相違を意味するものであり、またその他の各々は各々が別の集団を意味するものであろう。各グループが同時代の別集団を意味するか、同一集団の時間の相違を意味するかは別に土器の形態、出土層準による時間の決定等との対比によらなくてはならない。

3—3 蛍光X線分析結果

蛍光X線分析結果は蛍光X線諸元表に示すとおりであり、Fe—Mn—Ti三角ダイヤグラムによって分類を試みた。児玉工業団地出土の土器のうち焼成温度の高いものが対象となっており、ムライト (Mu)、クリストパーライト (Cr) が生成し、原土の鉱物組成が変化していると考えられるので、Fe、Mn、Tiの3成分の比をもって胎土の区分を試みた。

Ⅰ グループ……Ko—4、6、9、10、11、12、13、14、15、16、17、18、19

Feが99%以上、Mnは0.4~0.6%、Tiが0.2~0.4%にある。個体数は13個とその集中度はよく、3成分的には非常に類似した組成を有する。

Ⅱ グループ……Ko—2、3、5、7、8、20

Feは98.8~99%、Mnは1.1~1.2%、Tiは0.2~0.3%にある。個体数は6個と少ないが集中度は高い。

Ⅲ グループ……Ko-21、22、23

Feは98.7~98.8%、Mnは0.6~0.7%、Tiは0.6%にある。個体数は3個と少ないが集中度は高い。

その他……Ko-1

Feは98.5%、Mnは1.3%、Tiは0.2%にあり、3つのグループとはかけ離れており、胎土的に異なる可能性が高い。

I~Ⅲの3つのグループとその他が実際に胎土の相違を示し、土器の分類とどの程度対比されているものであるかの検討は、土器の形態との比較によることが望ましい。

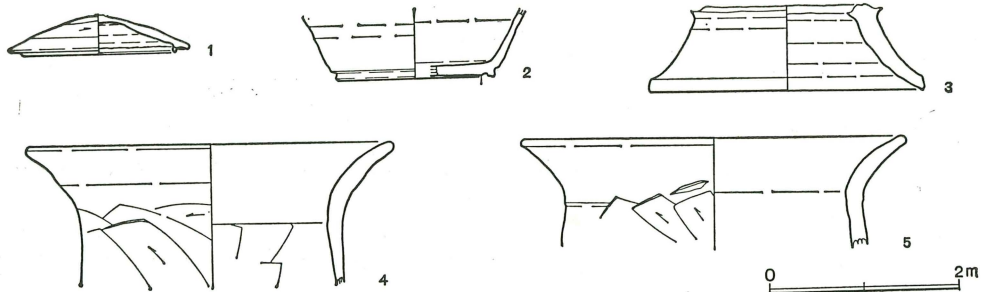
第6表 蛍光X線諸元表

Intensity							(%)								
サンプル No	Fe	Mn	Ti	Fe	Mn	Ti	グループ	サンプル No	Fe	Mn	Ti	Fe	Mn	Ti	グループ
ko-1	477	6.4	1.1	98.5	1.3	0.2		Ko-13	298	1.7	1.0	99.1	0.6	0.3	I
2	534	4.8	1.2	98.9	0.9	0.2	Ⅱ	14	253	1.3	0.8	99.2	0.5	0.3	I
3	444	4.3	1.2	98.8	1.0	0.2	Ⅱ	15	432	2.6	1.1	99.2	0.6	0.2	I
4	389	1.7	1.2	99.3	0.4	0.3	I	16	325	1.1	0.8	99.4	0.3	0.3	I
5	389	3.6	1.1	98.8	0.9	0.3	Ⅱ	17	446	1.4	1.2	99.4	0.3	0.2	I
6	423	2.4	1.1	99.1	0.6	0.3	I	18	500	2.9	1.1	99.2	0.6	0.2	I
7	395	3.1	1.1	98.9	0.8	0.3	Ⅱ	19	439	1.6	1.1	99.4	0.4	0.2	I
8	318	2.9	1.0	98.8	0.9	0.3	Ⅱ	20	596	5.4	1.3	98.9	0.9	0.2	Ⅱ
9	498	2.1	1.1	99.4	0.4	0.3	I	21	181	1.2	1.2	98.8	0.6	0.6	Ⅲ
10	382	1.4	0.9	99.4	0.4	0.2	I	22	205	1.3	1.1	98.7	0.7	0.6	Ⅲ
11	378	1.4	1.0	99.4	0.4	0.2	I	23	167	1.1	1.0	98.7	0.7	0.6	Ⅲ
12	302	1.3	1.2	99.2	0.4	0.4	I								

3-4 まとめ

児玉工業団地出土土器の胎土分析は23試料であるが、現地の土と一致する組成を有する土器胎土はAタイプのものであり、これらは在地性の可能性が非常に高い。個体数の多さからするとFタイプが6個と最も多く、これらも在地性の可能性が高い。Ko-20は胎土の組成に特徴があり、外来性の可能性が高い。砂の混合比ではKo-3の斜長石(Pl)の強度に特徴があり、これも外来性の可能性が高い。蛍光X線分析ではKo-1の3成分に特徴があり、Ⅲグループに属するKo-21、22、23もまた、他のグループとは異なっている点で特徴をみせている。

これらを総合すると、土器胎土は少なくとも5~6タイプの存在が推察され、全体に種類が豊富である傾向が伺われる。



第273図 胎土分析試料

胎土分析試料観察表 (第273図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
須恵蓋	1	9.5		(2.1)	B (少) C (多) A D E F	青灰色 1	ロクロナデ。天井部外面回転篋削り、 下位ロクロナデ。つまみ欠失。	八幡太神南A 1号住D区。 1/4。胎土分析No.20。
高台坏	2		(8.3)	(3.6)	A D E、精選。	暗灰色 1	ロクロナデ。底部外面回転篋削り。高 台は削り出し手法によると思われる。	八幡太神南A 1号住覆土。 1/5。胎土分析No.14。
瓶	3		14.6	(4.6)	D (多) F (少) A B	乳白色 2	ロクロナデ。脚部のみ残存。	八幡太神南A 1住No.130。 脚部2/5。胎土分析No.23。
土師甕	4	(19.4)		(7.6)	D (少) A B C F	褐色 1	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り、内面 篋ナデ。	八幡太神南A 1号住No.295 1/5。胎土分析No. 6。
甕	5	(20.1)		(5.9)	A B C D F	橙褐色 2	口縁部横ナデ。胴部外面篋削り。	八幡太神南A 1号住No.148 1/4。胎土分析No. 7。

第7表 胎土分析試料一覧表

番号	器種	出土遺構	図版番号	番号	器種	出土遺構	図版番号
1	土師坏	今井G 2号住	第 66図— 12	13	土師蓋	八幡A 1号住	第 31図—132
2	〃	八幡A 1号住	第 28図— 41	14	須恵坏	立野南 1号住	第273図— 2
3	〃	八幡A 1号住	第 28図— 3	15	〃	八幡A 1号住	第 31図—135
4	〃	立野南 2号住	第 11図— 2	16	〃	八幡A 1号住	第 31図—136
5	皿	八幡A 1号住	第 29図— 65	17	蓋	今井G 2号住	第 68図— 59
6	甕	八幡A 1号住	第273図— 4	18	〃	今井G 1号住	第 63図— 1
7	〃	八幡A 1号住	第273図— 5	19	〃	八幡A 1号住	第 31図— 93
8	〃	今井G 2号住	第 67図— 48	20	〃	八幡A 1号住	第273図— 1
9	蓋	立野南 2号住	第 13図— 59	21	〃	立野南 2号住	第 13図— 85
10	盤	八幡A 1号住	第 29図— 67	22	鉢	立野南 2号住	第 15図—124
11	〃	八幡A 1号住	第 29図— 68	23	瓶	八幡A 1号住	第273図— 3
12	蓋	八幡A 1号住	第 31図—119				

XII 結 語

取付道路関係遺跡群からは古墳時代前期（五領期）～奈良・平安時代及び中・近世に至る各時期の遺構とそれに伴う遺物を検出したが、本項においてその全てについて触れる余裕は残されていない。ここでは真間期初頭頃の豊富な遺物を出土した立野南2号住居跡、八幡太神南A地点1号住居跡、今井G地点2号、5号住居跡の4軒の資料を分析するなかで前後関係の把握と年代的な位置付けについて触れてみたい。

須恵器

まず最も出土数の多い蓋と坏について分類を先行する。

1、蓋

A類 古墳時代以来の身受けのかえりをもたないもの。口径8.7～10cm、器高2.9～3.5cmと小型化が顕著である。（八幡A1住89～92） 但し92は「逆転期」後の坏の可能性もある。

B類 口径8.5～11cm前後の小型の蓋で内面に身受けのかえりをもつ。つまみは宝珠形もしくはその稜の弱いものが多いが、乳頭状、截頭円錐形状のものも認められる。かえりも端部より突出するもの、ほぼ同高のもの、内側にはいるものがあり、形態も含めて個体差が大きい。（八幡A1住93～111・127、今井G2住54～62、同5住32～41） 但し今井G2住62は壺類の蓋であろう。

C類 基本的にはB類と同一だが、酸化焰焼成を基軸とする一群である。（八幡A1住113～126・128～132） 全体にボツテリとした厚手のつくりで、つまみ、器形はB類を模したと思われる。酸化焰焼成後、器表面（内・外面あるいは片面）を黒色処理した丁寧なつくりの一群と、酸化焰焼成のままのもの、器表面が灰色を呈し、一部還元焰焼成を受けたと思われるものがある。外面の整形には回転ヘラケズリを施す例と手持ちヘラケズリのものがみられる。

D類 口径16cmを越える大型の蓋で内面にかえりをもち、つまみは欠失するが小さな宝珠形(?)状のものが付されるもの（今井G5住43・44）

E類 内面に低いかえりをもつもので、つまみは扁平な円板状をなし中央部が凹む。口縁端部は水平方向に延びるためにかえりは突出するものが多い。法量により2分され、(I)口径16.4～19.5cmの大型品（立野南2住82～92）と、(II)口径11.5～13.3cmのもの（立野南2住72～80）がある。

F類 内面にかえりをもたないものをあてる。（八幡A1住112、立野南2住81）

2、坏

A類 蓋受の立ちあがりをもつ小型の坏。（八幡A1住133、今井G2住63）

B類 口径8.9～10.8cmの小型坏。底部は丸みをもつものと平底風のものがあり、体部は上方に立ちあがる。底部調整は回転ヘラ切り後ナデ又は外縁部ヘラケズリを施すものと、全面ヘラケズリのものがある。口径9～10cm、器高3.2～3.6の範囲に集中する。（八幡A1住134～138、今井G2住64～68、今井G5住45～49、立野南2住93・94）

C類 平底もしくはやや丸底を呈する底部から体部は直線的に外傾するもの。底部は全面回転ヘラ削りされる。法量により3大別される。I、口径16.8～18cm、器高3.5～4.6cmの大ぶりのもの。

(立野南 2 住109~115) II、口径 13~14cm 前後のもの。(立野南 2 住107・108) III、口径11~12.6cm、器高2.7~3.6cmの小ぶりのもの。(立野南 2 住95~106)

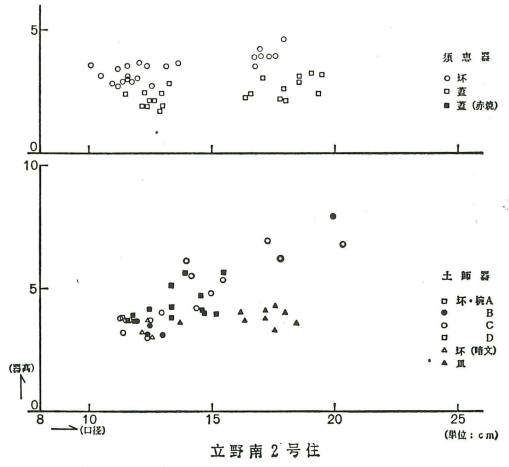
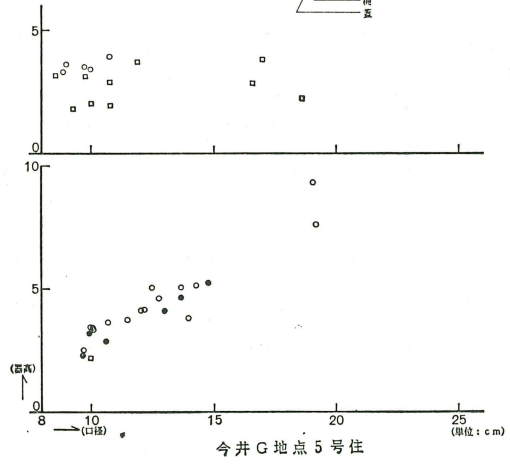
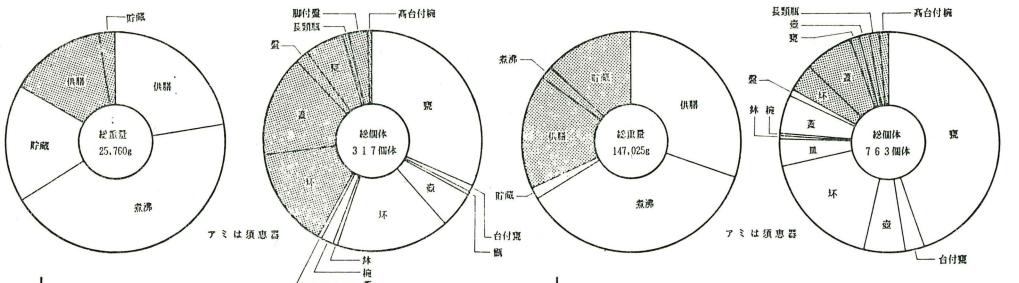
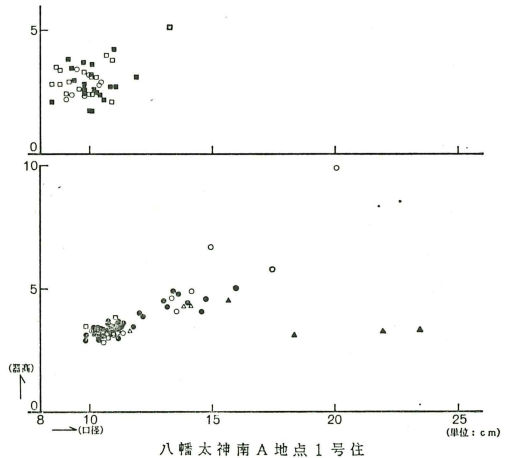
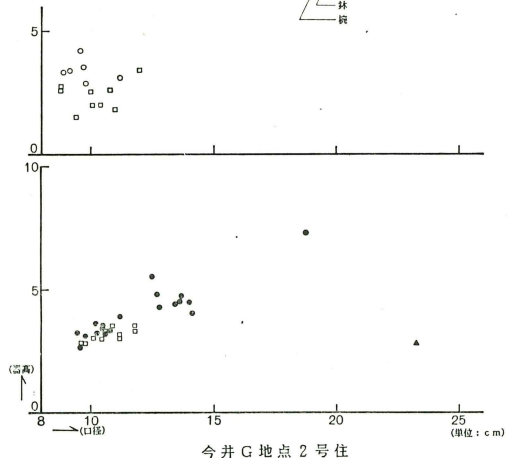
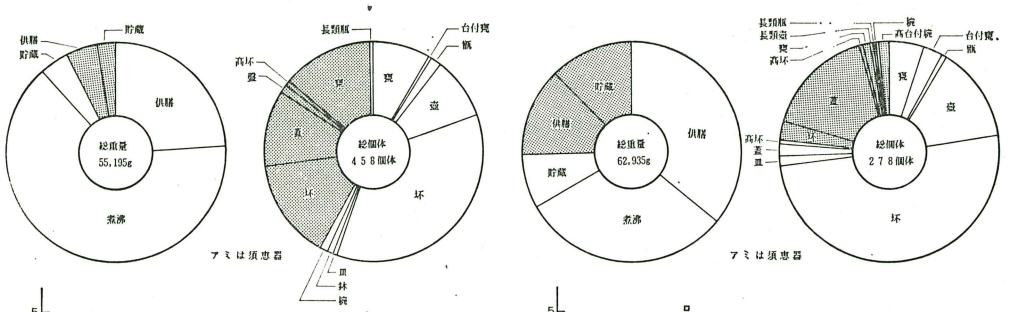
D類 高台の付される坏(坑)をあてる。I、高台はやや高く外方にふんばるもの。(今井G 5 住51) II、C I類と同様な法量をもち低い高台を付したもの。(立野南 2 住117~121) III、C II類に低い高台を付したもの。(立野南 2 住116) IV、削り出し高台風の低い凸帯が底部外縁に巡るもの。(立野南 2 住。第273図)

次にこの分類を基に各住居跡出土須恵器の伴出関係をまとめると、今井G 2 住では蓋B、坏A、B類に盤、高坏、瓶、甕類が伴う。八幡A 1 住は蓋A・B・C・F類、坏A・B類と瓶、甕、平瓶、高坏という組み合わせになる。今井G 5 住では蓋B、D類と坏B、D I類の他に盤、高坏、細頸瓶がある。また立野南 2 住では蓋E I・E II・F類と坏B、C I~C III、D II~D IV類に盤、壺、甕、鉢が伴う。

これらの住居跡は伴出遺物によって大きく2期に分かれる。即ち今井G 2 住、同5 住、八幡A 1 住と立野南 2 住である。前者の3軒は坏B類、蓋B類を供膳器の主体としている点に近似した様相が認められる。この坏B類と蓋B類はセット関係にあり、奈良国立文化財研究所の飛鳥、白鳳期土器編年案(稲田 1976、西 1978)によれば坏Gに相当し、飛鳥 I 期~IV 期にかけて存在する。飛鳥 II 期において古墳時代以来の坏Hと相半ばする数量に達し、飛鳥 III 期に主体的な位置を占めるといふ。こうしたあり方と対比すればこの3軒は基本的には飛鳥 III 期に比定される坏類の組合せをもつものと考えられる。但し、今井G 2 住と八幡A 1 住には量的には少ないが坏Hに相当する古墳時代的な坏と蓋(坏A、蓋A類)が認められる。口径10cm前後と小型化が著しく、奈文研編年に照らせば飛鳥 II 期とした坂田寺の池S G 100出土例に最も近いであろう。また八幡A 1 住の有蓋高坏、今井G 2 住の無蓋高坏も同様に古墳時代以来の器種の末期的形態と考えられ、前者においては口縁部の立ちあがりの低さに後者では裾部の屈曲の消失と、透しが線刻程度に退化する点にその特徴が示されている。こうした点を考慮すれば、今井G 2 住と八幡A 1 住の方が今井G 5 住よりも器種構成においてより古い様相が認められるといえよう。^(註1)

一方、今井G 5 住出土の坏D I類は口縁部を欠くため法量は窺い知れないが、高台は底部外縁より内側に寄った位置に付され、外方にふんばるやや高いもので、飛鳥 III 期の標式資料である大官大寺下層 S D 121 出土例に類例が求められる。またかえりをもつ大型の蓋D類が新たに器種構成に加わり、坏B類に関しては法量には変化がないが、底部が平底化し体部が直線的に外傾するものが現われやや後出的要素が認められる。

次に立野南 2 住についてみると、前段階において供膳器の主体を占めた蓋B類は姿を消し、坏B類(93・94)も体部の開き方が大きくなり「坏G」の特徴からはずれる。一方、坏C I~C III類、D II~D IV類、蓋D I・D II類が出現し、器種の多様化が顕著にあらわれる。特に坏C類、D II・D III類、蓋D類にあってはほぼ同一の形態を示しながら大小の別が明確化しており、畿内において飛鳥 IV 期に出現する「法量による器種分化」という方向性の反映と理解される。これらの土器群の器種構成上の特徴をあげれば、小型坏のC III類はB類に比較して口径が大きくなり(径12cm前後)、明らかに後出の様相を示しつつも一定の数量を保つこと、また大型の平底坏C I類の存在、かえり



第274図 器種構成及び法量表

りを有する蓋が主体的に存在すること等であろう。このうち小型坏と大型坏の共伴現象は大型坏の盛行と小型坏の消滅化という8世紀初頭以降の流れ(笹森 1981)のなかで捉えれば、例えば山下6号窯にみられる様な大型坏と蓋のみを焼成した段階以前に位置づけられるであろう。かえり蓋の主体的な存在を考え合せると7世紀末～8世紀初頭頃の組合せを示すものと考えられる。小型坏と大型坏にかえり蓋を伴出する例としては、水深遺跡第2捨場(栗原 1972)、城見上遺跡B地点3号住(埼玉県 1984)、内出遺跡13号住(埼玉県 1984)、立野遺跡2号住(今井1980)等がある。このうち立野遺跡では大型のかえり蓋の存在から大型坏が予想されてはいるものの出土例があるわけではなく、坏の主体はあくまで小型坏にある点で様相はやや異なり、供膳器における器種構成比という視点でみればむしろ今井G5住に近似した様相といえるかもしれない。

ところで坏の形態的特徴をみると、本住居跡のそれは、体部の開きが大きく器高が低いことがあげられるが、水深遺跡の大型坏に類似する例があるものの城見上他の坏とは一見して異なる。また蓋に関しても本住居の蓋は上面を凹ませた扁平な円板状つまみをもつ点で、宝珠系統のつまみをもつ他の例とはタイプを異にする。この種つまみについては「在地において継続して操業されたために出現した地域色」(酒井 1981)であるとの指摘がなされている。とすれば本住居跡の蓋は在地産と考えられるが、先にあげた城見上遺跡、立野遺跡の坏・蓋類にそれぞれ末野・南比企窯跡の形態的な特徴が示されているとすれば本住居跡の窯・蓋との形態的な差異は大きく、両窯跡の製品と想定することはできない。また、最近存在が明らかにされた児玉窯跡の製品とも異なるようである(註2)。類例を求めるとすれば、集落跡であるが群馬県中尾遺跡D-105号住があげられる。大小の蓋と高台付坏は本住居跡のそれに最も近似するものであろう。あるいは群馬県内の窯跡の製品が一括して供給された可能性もあるが現状では供給窯の特定は難しい。

さて本住居跡からは坏DⅣ類とした削り出し高台風の坏が出土している。同様な例は水深遺跡13号住、若宮台遺跡60号住、中尾遺跡D-115号住、栃木県北山1号窯等にみられ、若宮台と中尾遺跡では大型のかえり蓋や坏に伴出することから、DⅣ類も一応住居に伴うものと考えておきたい。

この他、分類には加えていないが、ロクロ使用の土師器坏・蓋と盤が確認されている。(59～68・70・71) 形態的には須恵器そのものであるが、酸化焰焼成による非常に硬質な焼き締まりを特徴とし、ヘラ磨き調整が顕著に認められる。胎土には雲母、赤色粒子、角閃石が含まれ土師器の胎土により近い。59の蓋を例にとるとつまみ剝落部に螺旋状の沈線が回ること、外面のヘラ磨き調整下に弱いながらも平行する稜が認められることから整形にロクロが使用されていたことが想定できる。また坏においては、底部のヘラ削りにそれが示されている。

この一群の土器は周辺の遺跡においても数例は見出されずその位置付けには困惑するが、敢えて求めるとすれば南武蔵地域に分布する「ロクロ土師器」が挙げられる。だが、両者は地域的にもまた時間的にも隔たりがあり直ちに結びつけるには現時点ではやや無理があるだろう。またこれらの土器群の製作にあたって、須恵器工人が関与したのか否か、その出現の背景も含め今後の検討が必要であろう。

続いて蓋C類について若干触れておきたい。これは八幡A1住に特徴的にみられ、他の住居からは出土していない。基本的な形態はB類としたかえりを持つ小ぶりの蓋と同一であり、その意味で

は同一範疇に含めることも可能であるが、いくつかの点で違いがある。C類の特徴をまとめておくと、酸化焰焼成を基本とし、黒色処理を施すものがあり、概して前面は平滑で光沢をもっていること、またつまみ及びかえりの形態にはB類のもつバラエティがそのまま認められるが、その表現はいかにも稚拙であり、かえりについては幅広の口縁端部に凹面をつくることで表現したり、つまみは宝珠形を意識したと思われるものも形態は著しく崩れている。この土器群はB類の蓋の様な通常の須恵器とは異なる特異な存在であり、他に類をみない。一部に還元焰焼成を受けたと思われる灰色の色調を呈するものが存在することから何らかの焼成施設を利用したことは考えられるが、少なくとも熟練した須恵器工人の製作とは思われない。むしろ須恵器を模倣して在地において製作された「試作品」という性格が強いのではなからうか。更に憶測をたくましくすればB類の蓋を多量に所持した在地首長の命により、土師器工人達がB類を手本にロクロ（回転台？）使用をとり入れ須恵器そのものをつくろうと製作した可能性もある。B類蓋の形態上のバラエティがC類にも表現されていることはその間の事情を物語るものといえようか。

以上をまとめると、今井G 2住・八幡A 1住→今井G 5住→立野南 2住という土器の変遷が窺えた。今井G 2住と八幡A 1住では所謂「逆転期」前の坏A、蓋A類が伴い、その限りにおいては飛鳥Ⅱ期の器種構成といえるが既に主体は坏B、蓋B類に移行しており、飛鳥Ⅲ期の様相に近いといえる。白石太一郎氏による7世紀代の須恵器編年の再検討に従えば（白石 1982）、前期難波宮整地層及びその下層出土土器の関係から7世紀第3四半期と考えてよからう。続く今井G 5住は、坏B、蓋B類に高台付坏と大型のかえり蓋を伴う。大津京の穴太瓦窯出土土器との関係から第3四半期後半～第4四半期にかけての時期と考えておきたい。立野南 2住は平底の小型坏と大型坏の共存を特徴とし、7世紀末葉以降でも8世紀初頭であろう。

ここでとりあげた4軒の住居跡の須恵器出土量は極めて多く、古墳時代における須恵器保有のあり方とは全く異なる。立野南 2住には少ないが他の3軒から出土した坏・蓋類及び瓶類には所謂搬入品と考えられる例が多いことも注意される。このような須恵器供膳器の大量保有を可能とした背景には、一般集落とは異なる何らかの要素、当遺跡においては鉄滓、羽口等の出土からみて恐らくは製鉄関連集団を掌握した在地首長層の存在を考えざるを得ないのである。（富田和夫）

（土師器）

7世紀後半から8世紀初頭にかけての様相を土師器坏の分類検討によって試論してみたい。

該期の土師器坏をA・B・C・D・E類に大別し更に法量差をⅠ・Ⅱ・Ⅲ群としてとらえた。

A類は、丸底で体部内湾しながら立ちあがり、口縁部との境に弱いながらも稜をもち口縁部の外反する「須恵器模倣坏」の系譜を引くものである。

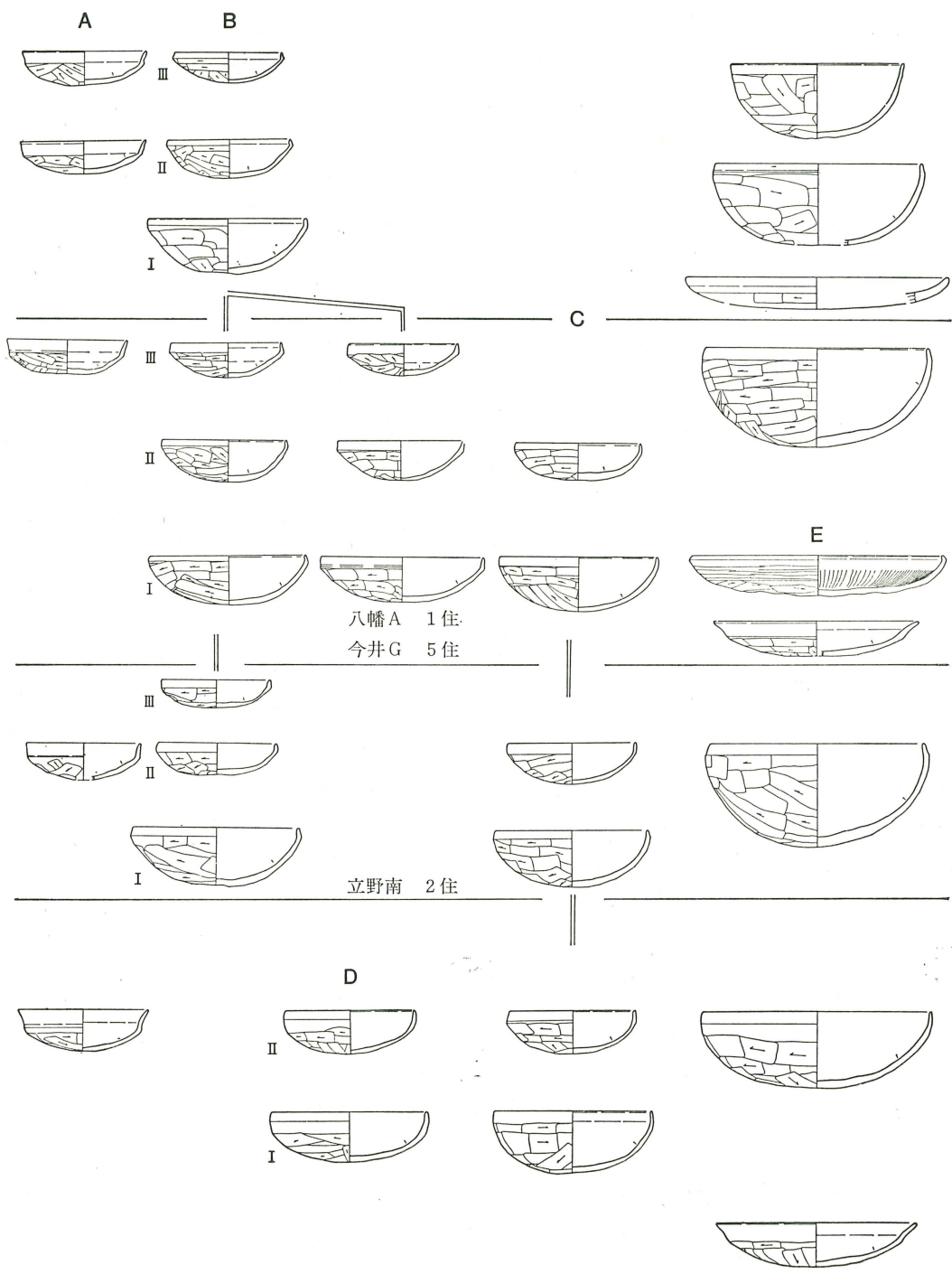
B類は、丸底で体部内湾しながら立ちあがり、口縁部が内側に屈曲する「丸底内屈口縁形態坏」。

C類は、丸底で体部内湾しながら立ちあがり、口縁部の屈曲度合が極めて弱く内湾する。

D類は、丸底で体部内湾しながら立ちあがり、口縁部への移行はスムーズで直立して立ちあがる。

E類は畿内系土師器皿である。

以上、形態の特徴により5類に分類を行なった。土師器製作に関わる手法的差異はいずれも類似



第275図 土師器坏分類図

性が認められ、在地における伝統的土師器生産体制の存在が想定されるが、坏A類と坏B～D類とは形態の断絶があり口縁部形態を作り出す手法的技術変化が認められ坏B類の祖型を他に求めざるを得ない。いずれにせよ坏B類自身は「北武蔵型坏」の祖型として捉えられ、B～D類への変化は系統的連続性を持っている。また、胎土・色調・焼成等の違いは、工人集団の相異と同時に時間的手法の変化であると考えられる。坏B類は、口縁部を強く押えつけ内外面をつまみ出して屈曲を作り出すのに対し、C類は、その度合いが弱く、D類に至っては、上方へ引きあげて横ナデを施し口縁部形態を造り出している。「屈曲」→「内湾」→「直立」といった土師器製作工程上の単純化としての技術的变化である。加えて、該期に見られる法量によるバリエーションの相違は、Ⅰ群を口径13～15cmを計る大型坏、Ⅱ群を口径11～12cmを計る中型坏、Ⅲ群を口径10cm前後の小型坏とする。八幡A 1住、今井G 2・5住においては、Ⅰ～Ⅲ群の法量差による器種分化の成立と普遍性が保たれていることが認められる。立野南 1住では、Ⅲ群の消失傾向とともに、Ⅰ・Ⅱ群の径高指数が高くなることが認められた。畿内では、食器類に土器様式の変化と器種分化の傾向がすでに7世紀初頭には始まっており、こうした様相の成立背景には「6世紀末葉以降に我国に導入された仏教文化を基調とした『金属器指向型』ともいべき方向性^{註4}」を含めた社会的変化の中で伝統的土師器生産体制そのものも何らかの変革が存在したと推測される。東国における「真間式」土器の出現は明らかに畿内を中心とした政治的・社会的な動きの影響と考えられる。故に、北武蔵の様相としては、古墳時代の系譜を引く坏A類の存在とは別に、器種分化が起った坏BⅠ～BⅢの存在をもって真間式土器の成立と捉えたい。時間的な位置付けとしては、八幡A 1住出土の畿内系土師器皿を大官大寺下層に対比され飛鳥・藤原Ⅲ期と考えられる。今井G 2住は、坏Cの存在が認められない点でわずかに先行するものと考えられる。また、今井G 5住は、坏B類とした内でも屈曲は鋭さを欠き、坏C類の存在がやや多く認められる点で後続段階とされる。今井G 2住→八幡A 1住→今井G 5住の変遷がたどれる。立野南 2住は、坏C・D類が主体を占め、坏B類はほとんど客体的存在となり、Ⅲ群が消失し、Ⅱ群にその主体を置く。畿内系土師器蓋・高台付坏は飛鳥・藤原Ⅴ期に比定される。

遺物の分類に加え、出土状況とその意味について考えると、八幡A 1号住をはじめ、今井G 2・5号住、立野南 2号住のいずれも床直上から覆土中に及んで大量の遺物検出が認められる。器種構成表に示した通り土師器・須恵器によらず坏・蓋類の優位性を保ち多くの完形品を伴うことに注目される。該期の遺跡としては、本庄市石神境遺跡、水深遺跡が存在し遺物出土状況は同一視できる。しかしこれらの現象を単純に「土器の廃棄」としてとらえてよいものか疑問が残る。こうした要因としては、古墳時代の須恵器を中心としたイデオロギー社会で存在し得た祭祀形態とは別に金属器の影響とともにもたらされたイデオロギの変革であり、祭祀→儀礼への変化に伴う現象ではないだろうか。古墳祭祀から集落内における儀式に姿を変え関わる蓋・坏・甕等が一括廃棄されたのではなかろうか。特に八幡A 1号住からは鞆羽口が出土し、今井G 2・5号住、立野南 2号住からも鞆羽口・鉄塊が多量に検出され、水深遺跡同様生産集団の内包された意識の現象形態としてとらえられるのではないだろうか。真間期においてこうした廃棄の現象は政治的・社会的関係性の中で存在し「八幡太神南パターン」として呼称したい。

(赤熊浩一)

- 註1 八幡A 1住139及び140は混入もしくは註記上のミスと思われるため除外して考える。
- 註2 児玉町教育委員会鈴木徳雄、恋河内昭彦両氏の御好意により実現した。
- 註3 土師器坏B類としたものは鈴木徳雄氏が坏B形態としたもので「丸底内屈口縁形態坏」と呼称されている。
- 註4 西弓海氏はこの時期の土器様式とその発展の基本には、金属製容器の模倣にあるとされた。

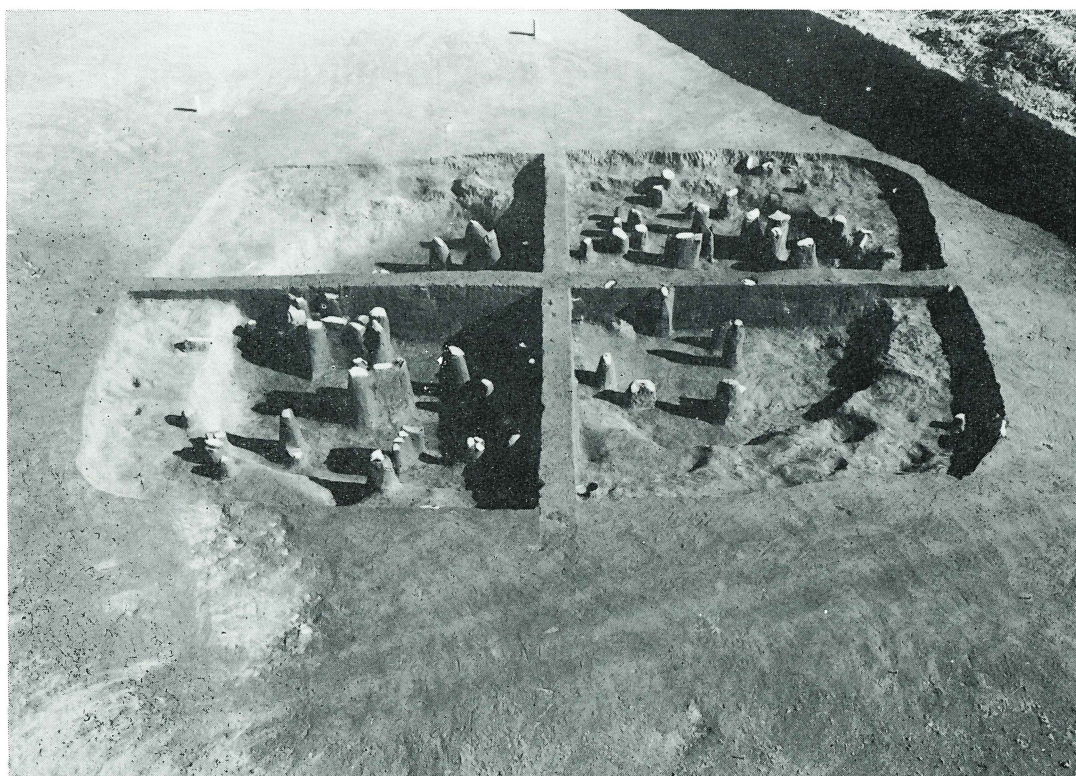
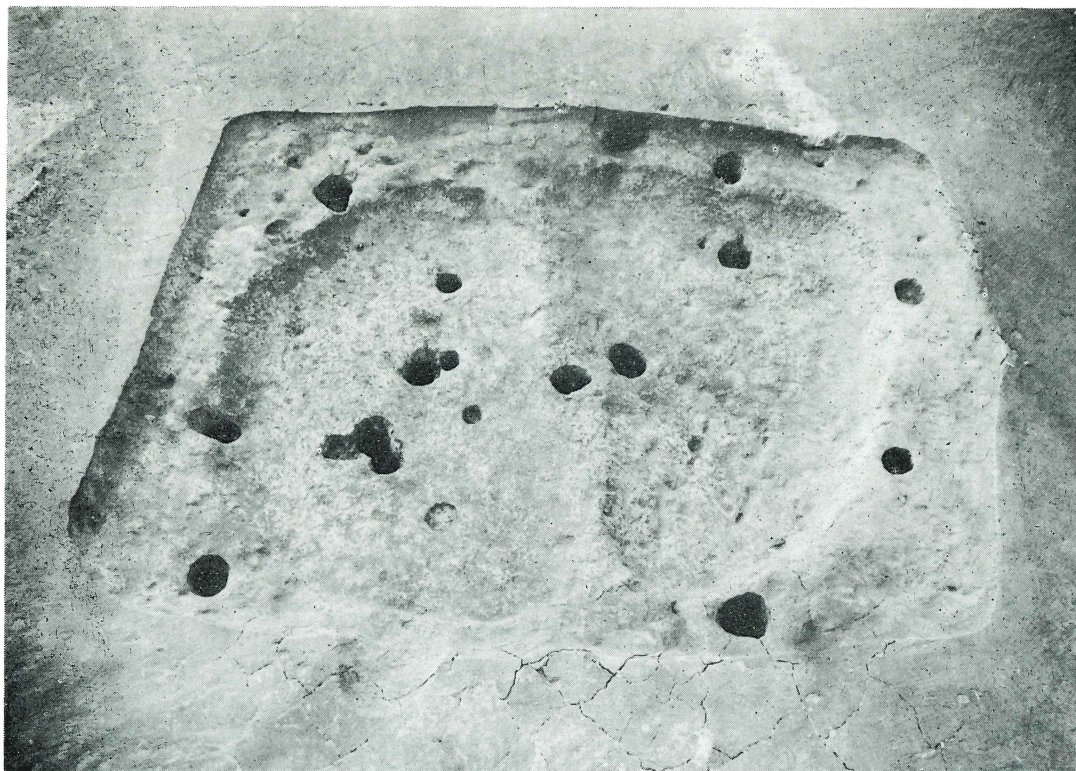
引用・参考文献

- 稲田孝司 1976 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」Ⅰ 奈良県立文化財研究所
- 井上 肇 1978・1979 「舞台」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第17集
- 今井 宏 1908 「児沢・立野・大塚原」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第28集
- 小笠原好彦・西 弓海 1976 「平城京発掘調査報告Ⅶ」 奈良国立文化財研究所
- 金子真土 1982 「北武蔵の須恵器—7・8世紀の様相について—」 埼玉県立歴史資料館研究紀要第4号
- 栗原文蔵他 1972 「水深」 東北縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 埼玉県遺跡調査会
- 駒宮史郎 1976 「本郷東・愛宕」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第7集
- 埼玉県 1984 「新編 埼玉県史」資料編3
- 酒井清治 1981 「房総における須恵器生産の予察(Ⅱ)」 史館 第13号
- 笹森健一 1981 「埼玉県における奈良時代土器の変遷とその様相」 シンポジウム盤状坏—奈良時代土器の様相— 相武古代研究会・東洋大学未来考古学研究会
- 佐藤忠雄 1976 「水窪・新井遺跡の調査」 岡部町教育委員会
- 白石太一郎 1982 「畿内における古墳の終末」 国立歴史民俗博物館研究報告 第1集
- 鈴木徳雄 1983 「古代北武蔵における土師器製作手法の画期」 土曜考古 第7号
- 鈴木徳雄 1984 「いわゆる北武蔵系土師坏の動態」 土曜考古 第9号
- 鈴木徳雄 1984 「阿知越遺址Ⅱ」 児玉町文化財調査報告書 第4集
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」 角川書店
- 利根川章彦 1982 「古墳時代集落構成の一考察」 土曜考古 第5号
- 中村倉司 1908 「臺遺跡」 埼玉県遺跡調査会報告 第41集
- 中村倉司 1984 「古代北武蔵における供膳器の様相」 土曜考古 第9号
- 中村 浩 1976 「陶邑Ⅰ」 大阪府文化財調査報告書 第28輯
- 西 弘海 1978 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ」 奈良国立文化財研究所
- 西 弘海 1982 「土器様式の成立とその背景」 考古学論考 平凡社
- 服部敬史 1983 「奈良・平安時代の土器生産について」 史館 第15号
- 梁木 誠・田熊清彦 1981 「栃木県における歴史時代の須恵器 研究ノート」 栃木県考古学会誌 第6集
- 福田健司 1981 「南武蔵における奈良時代土器編年」 シンポジウム盤状坏—奈良時代土器の様相— 相武古代研究会 東洋大学未来考古学研究会
- 増田逸郎他 1977 「塚本山古墳群」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第10集

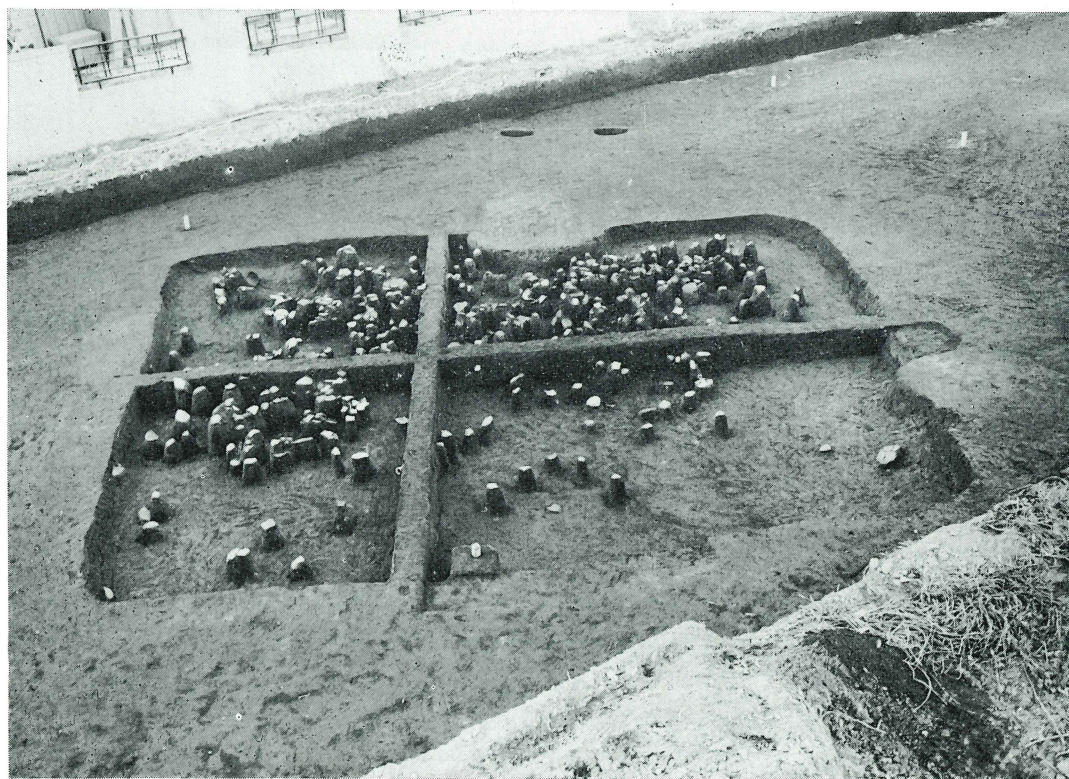
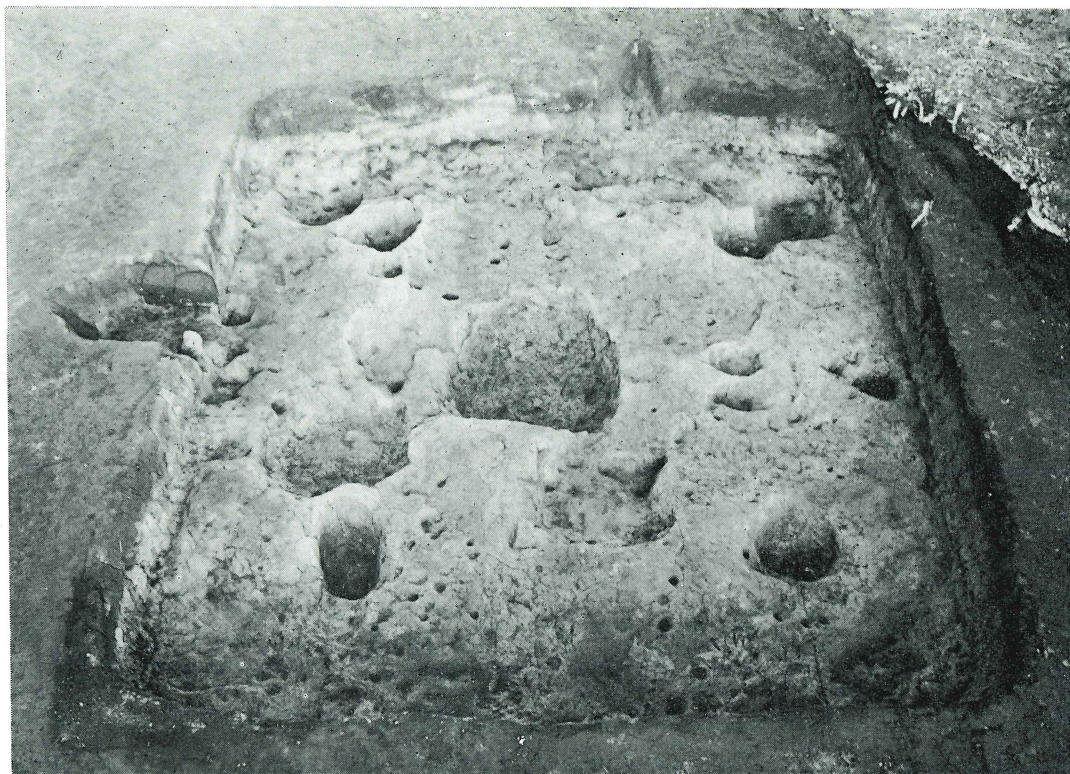


立野南全景

图版 2



立野南1号住居跡



立野南 2 号住居跡